

かやめん 萱免遺跡 第2次調査

— 宅地造成に伴う萱免遺跡第2次発掘調査報告書 —



2009

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市秋葉区山谷町1丁目3552番5他に所在する萱免遺跡の発掘調査記録である。第1次調査は平成20年2月1・7日に、第2次調査は2月28日～3月29日（実質17日間）に行った。
- 2 調査は宅地造成事業に伴い、北都ハウス工業株式会社から新潟市が受託した。調査は新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター（以下、市埋蔵文化財センターという）が補助執行した。
- 3 平成19年度に発掘調査、平成20年度に整理作業・報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章に記した。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業にかかわる記録類は、一括して市埋蔵文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の編集は立木宏明（市埋蔵文化財センター主査）が行い、八藤後智人（市埋蔵文化財センター専門臨時職員）が補佐した。図版レイアウトは遺構図版を八藤後・立木、土器・土製品・鍛冶関連遺物・石製品図版を立木、遺構・遺物写真図版を立木・八藤後が行った。執筆分担は以下の通りである。
第IV章・第七章第1節を八藤後、第VI章を除くその他の執筆を立木が行った。なお、第VI章については（株）火山灰考古学研究所に委託し、第1節を杉山真二、第2節を金原正子が執筆した。
- 6 本書で用いた写真は、遺跡写真は立木・遠藤恭雄（市埋蔵文化財センター主査）・池田ひろ子（市埋蔵文化財センター専門臨時職員）が撮影し、遺物写真は佐藤俊英氏（ビッグヘッド）に撮影を委託した。ただし、写真図版1は米軍（国土地理院発行）が、写真図版2～4は（株）オリスが撮影したものを使用した。
- 7 遺構図のトレースと各種図版作成・編集に関しては、（株）セピアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 8 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。
伊藤秀和・小熊博史・尾崎高宏・春日真実・笹澤正史・土橋由理子・古澤妥史・水澤幸一・山中雄志・吉井雅勇・牧野耕作・渡邊裕之
北都ハウス工業（株）・新潟県教育庁文化行政課・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者・作成年を示した。
- 3 図版2は「新津郷耕地整理組合現形図」1940年頃（新津郷土地改良区所蔵）を縮小し、「国土基本図」2006年（新潟市）と重ね合わせたものである。
- 4 本文中の注は各章の末尾に記した。引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 5 遺構平面図（図版6～9・12）で破線の円形で示したものは、以前に存在した構造物の基礎による攪乱を表している。
- 6 遺構番号は現場で付したものをを用いた。番号は遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。
- 7 土層の土色観察は『新版 標準土色帖』（小山・竹原1967）を用いた。
- 8 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。また、土器に付着する炭化物は、不定形の濃い網目で表し、砥石の研磨面も同様とした。
- 9 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。
- 10 遺物の注記は調査年度「07」、萱免遺跡の略記号「萱免」とし、出土地点や層位を続けて記した。同時に掲載した秋葉2丁目窯跡は調査年度「06」、遺跡名、地番、出土年月日、出土地点を記した。
- 11 遺物番号は種別（土器、土製品、鍛冶関連遺物、石製品）ごとに通し番号とし、本文及び観察表・写真図版の番号は同一番号とした。

目 次

第 I 章 序 章	1	2) 性格不明遺構 (SX)	12
第 1 節 遺跡概観	1	3) 溝 (SD)	13
第 2 節 発掘調査に至る経緯	1	4) 小土坑 (Pit)	14
第 II 章 遺跡の位置と環境	2	第 V 章 遺 物	15
第 1 節 遺跡の位置と地理的環境	2	第 1 節 概 要	15
第 2 節 周辺の遺跡	2	第 2 節 奈良・平安時代の遺物	15
第 3 節 歴史的環境	6	A 土器の分類と記述	15
第 III 章 調査の概要	7	B 出土土器等各説	18
第 1 節 試掘調査	7	1) 遺構出土土器	18
第 2 節 本発掘調査	7	2) 包含層出土土器	20
A 調査方法	7	3) 試掘調査出土土器	21
1) 現 況	7	第 3 節 土製品、鍛冶関連遺物、	
2) グリッドの設定	7	石製品	22
3) 調査方法	9	A 土 製 品	22
B 調査経過	9	B 鍛冶関連遺物	22
C 調査体制	9	C 石 製 品	22
第 3 節 整理作業	10	第 4 節 秋葉 2 丁目窯跡出土土器	22
A 整理方法	10	第 VI 章 自然科学分析	24
1) 遺 物	10	第 1 節 植物珪酸体	
2) 遺 構	10	(プラント・オパール) 分析	24
B 整理経過	10	第 2 節 花粉分析	25
C 整理体制	10	第 VII 章 総 括	29
第 IV 章 遺 跡	11	第 1 節 萱免遺跡の遺構について	29
第 1 節 概 要	11	第 2 節 萱免遺跡の奈良・平安時代の	
第 2 節 層 序	11	土器について	29
第 3 節 遺 構	11	第 3 節 萱免遺跡の性格	33
A 遺構の概要	11	引用・参考文献	34
B 遺 構 各 説	12	別 表	37
1) 土 坑 (SK)	12	報告書抄録・奥付	巻末

挿 図 目 次

第 1 図 周辺地形分類図 (1 / 150,000)	3	第 8 図 植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析結果	25
第 2 図 萱免遺跡周辺の古代遺跡分布図 (1 / 50,000)	4	第 9 図 植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真	26
第 3 図 萱免遺跡試掘調査位置図 (1 / 2,500)	8	第 10 図 基本層序 F における花粉ダイアグラム	27
第 4 図 萱免遺跡試掘調査土層柱状図 (1 / 40)	8	第 11 図 花粉・孢子	28
第 5 図 タタキメ・当て具痕の細分類図	16	第 12 図 萱免遺跡 SX6 器種組成・種類別構成・	
第 6 図 萱免遺跡出土土師器・黒色土器・赤彩土器・		機能別構成図	31
須恵器分類図 (1 / 12、1 / 8、1 / 6)	17	第 13 図 山崎窯跡、秋葉 2 丁目窯跡、萱免遺跡出土食膳具	
第 7 図 秋葉 2 丁目窯跡遺物出土地点 (1 / 5,000)	23	の法量分布図	32

表 目 次

第 1 表	萱免遺跡周辺の古代遺跡一覧表	4	第 3 表	萱免遺跡における花粉分析結果	27
第 2 表	植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析結果	25			

別 表 目 次

別表 1	萱免遺跡遺構計測表	37	別表 5	萱免遺跡遺構出土古代土器器種構成率	40
別表 2	萱免遺跡古代土器観察表	37	別表 6	秋葉 2 丁目窯跡出土古代土器点数・重量組成表	40
別表 3	秋葉 2 丁目窯跡古代土器観察表	40			
別表 4	萱免遺跡土製品・石製品・鍛冶関連遺物観察表	40			

図 版 目 次

図版 1	周辺の旧地形図 (1 / 25,000)	図版 14	出土遺物 2 SK6 (2)
図版 2	遺跡周辺の旧土地利用図 (1 / 5,000)	図版 15	出土遺物 3 SK6 (3)・10・15、SD9・11・13、Pit2
図版 3	萱免遺跡と周辺遺跡 (1 / 10,000)	図版 16	出土遺物 4 包含層 (1)
図版 4	グリッド設定図 (1 / 2,500)	図版 17	出土遺物 5 包含層 (2)
図版 5	グリッド設定図 (1 / 1,000)	図版 18	出土遺物 6 包含層 (3)
図版 6	遺構全体図 (1 / 200)	図版 19	出土遺物 7 包含層 (4)
図版 7	遺構平面部分図 1 (1 / 100)	図版 20	出土遺物 8 包含層 (5)
図版 8	遺構平面部分図 2 (1 / 100)	図版 21	出土遺物 9 包含層 (6)
図版 9	基本層序実測図 (1 / 40)・ 基本層序位置図 (1 / 400)	図版 22	出土遺物 10 包含層 (7)
図版 10	遺構実測図 1 (1 / 40)	図版 23	出土遺物 11 包含層 (8)、試掘調査 5T・7T・8T (1)
図版 11	遺構実測図 2 (1 / 40)	図版 24	出土遺物 12 試掘調査 8T (2)・10T・11T、土製品、鍛冶関連遺物、石製品
図版 12	包含層の小グリッド別古代土器出土重量分布図 (1 / 200)	図版 25	秋葉 2 丁目窯跡出土遺物
図版 13	出土遺物 1 SK3・4・14、SX1・6 (1)		

写 真 図 版 目 次

写真図版 1	萱免遺跡周辺空中写真 1 (米軍撮影 昭和 23 年 (1948) 3 月 31 日)	写真図版 12	出土遺物 SK14、SX10、包含層、 試掘調査 8T・10T
写真図版 2	萱免遺跡周辺空中写真 2 (株式会社オリス撮影 平成 11 年 (1999) 3 月 24 日 1/4,000)	写真図版 13	出土遺物 SK3・4・14、SX1・6・10 (1)
写真図版 3	萱免遺跡周辺空中写真 3・4	写真図版 14	出土遺物 SX10 (2)・15、SD9・11・13、 Pit2、包含層 (1)
写真図版 4	萱免遺跡全景空中写真 1・2	写真図版 15	出土遺物包含層 (2)
写真図版 5	完掘状況 (1)	写真図版 16	出土遺物包含層 (3)
写真図版 6	完掘状況 (2)、基本層序 A・B・C・D	写真図版 17	出土遺物包含層 (4)、試掘調査 5T・7T・8T (1)
写真図版 7	基本層序 E・F・G、SK3・4・5・14 (1)	写真図版 18	出土遺物試掘調査 8T (2)・10T・11T、土製品、 鍛冶関連遺物、石製品
写真図版 8	SK14 (2)、SX1・6・10	出土遺物 19	秋葉 2 丁目窯跡出土遺物
写真図版 9	SX15、SD9・11・12・13、Pit2・7・8		
写真図版 10	萱免遺跡出土土師器・須恵器		
写真図版 11	出土遺物 SK14、SX10、包含層、 試掘調査 8T・10T		

第 I 章 序 章

第 1 節 遺 跡 概 観

萱免遺跡は新潟市秋葉区山谷町 1 丁目 3552 番 5 ほかにも所在する。後述する試掘調査以前は遺跡として周知化されていない地点である。遺跡名は旧小字名の「萱免」から命名した。遺跡推定面積は現状で南北 50m、東西 100m の約 5,000 m²で、奈良・平安時代の遺跡である。旧能代川（現新津川）の左岸約 0.7km に位置し、付近の標高は 5 ～ 6m 前後で自然堤防あるいは沖積地の微高地である。

地理的には新津丘陵の北端の出口にあたり、丘陵と沖積平野の境界付近の平野寄りである。

第 2 節 発掘調査に至る経緯

平成 19 年 11 月 13 日に新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財係（以下、市埋蔵文化財係という）に対して、北都ハウス工業株式会社（以下、事業者という）より秋葉区山谷町 1 丁目地内の旧 JR 東日本アパート跡地に計画された宅地造成について、遺跡の有無を確認するため「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」が提出された。市埋蔵文化財係は、未周知の遺跡が存在する可能性があるため、事前に試掘調査が必要との判断を示し、平成 19 年 11 月 19 日付けで回答した。

平成 19 年 11 月 21 日、事業者より新潟市教育長（以下、市教育長という）あてに埋蔵文化財の事前調査の依頼があり、平成 20 年 2 月 1・7 日の 2 日間に試掘調査（第 1 次調査）を行った。調査の結果、奈良・平安時代の遺物が確認されたため、平成 20 年 2 月 7 日付け新歴第 5215 号の 5 で、新潟県教育長（以下、県教育長という）あてに終了報告を提出するとともに、新たに発見された遺跡を「萱免遺跡」とし、平成 20 年 2 月 13 日付け新歴第 5215 号の 9 で新遺跡発見届を提出した。その後、平成 20 年 2 月 18 日付け教文第 1292 号で新潟県教育庁文化行政課長から市教育長あての文書で周知化された。

平成 20 年 2 月 14 日に事業者と市埋蔵文化財係で協議を行い、遺跡推定範囲内で新たに道路を造成する部分、約 370 m²について本発掘調査を実施すること、調査経費は事業者が負担すること、平成 19 年度内で現場での作業を終了することで両者合意した。

平成 20 年 2 月 21 日に事業者より本発掘調査の依頼文が提出され、同日付け新歴第 5215 号の 11 で市教育長あてに文化財保護法第 93 条の届出があった。遺跡の取扱いについては、同日付け新歴第 5215 号の 2 で、遺跡範囲内における新設道路部分約 370 m²について開発前に本発掘調査を実施すること、遺物の出土が希薄であった道路部分については工事立会を行う旨を通知した。

平成 20 年 2 月 22 日に事業者と新潟市で協定書を取り交わし、開発事業における遺跡の取扱い及び発掘調査の年度別計画、並びに資金計画について規定した。また、同日付けで平成 19 年度の調査委託について契約を締結した。以上の手続きを経て、新潟市教育委員会は平成 20 年 2 月 28 日、新歴第 5215 号 16 で、県教育長あてに文化財保護法第 99 条の規定に基づく発掘調査の報告を提出し、本発掘調査（第 2 次調査）に着手した。

平成 20 年 4 月 1 日に事業者と整理作業と報告書刊行の契約を結び、同日付で整理作業に着手した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置と地理的環境 (第 1 図、図版 1・2)

新潟市は平成 17 年に行われた周辺市町村（新津市・白根市・豊栄市・小須戸町・横越町・亀田町・西川町・巻町・味方村・潟東村・月潟村・中之口村）との合併により、海岸部を含む新潟平野の大部分と信濃川を挟んで対峙する弥彦・角田山塊と新津丘陵が含まれる総面積 726.1 km² の広大な面積を有する市となった。

遺跡のある新潟市秋葉区（以下、秋葉区という）は越後平野のほぼ中央に位置し、新津丘陵を中心として東に阿賀野川、西に信濃川が北流する。享保年間には加治川が阿賀野川に、阿賀野川が新潟港で信濃川に合流する状況で、度々水害に見舞われていたため、享保 15 年（1730）に新発田藩が松ヶ崎放水路を開削し、現阿賀野川の河口となった。下新付近で、五泉市域を北流してきた早出川が阿賀野川に合流する。また、七日町付近では阿賀野川から分岐した小阿賀野川が西流し、覚路津付近で信濃川に合流する。新津丘陵東縁を北流する能代川は、太平洋戦争後に水害対策の河川改修が行われた。これにより五泉市千原～秋葉区大関間の蛇行部分が直線化し、秋葉区新津地区の市街地を貫流していた本来の流路から分流が東方に作られ、現在の新津川・能代川となっている。この能代川と新津川は下興野付近で再び合流し、荻島付近で小阿賀野川に注いでいる。

秋葉区付近の地形は丘陵とその縁辺の段丘、沖積地から成っている。南南西～北北東に走る新津丘陵は加茂川を南限に標高 278m の高立山が最も高く、北に行くに従い標高を下げ北端で 70～80m となり、その周囲には段丘が標高 10～70m 間に 4 段見られる。沖積地は信濃川・阿賀野川の二大河川により形成され、自然堤防や旧河道・後背湿地・三角州などの地形が見られる。阿賀野川が流路を東遷させてきた結果、秋葉区域では新津丘陵北端～小阿賀野川間に自然堤防が形成され、現在起伏の極少ない微高地として断続的に存在している。遺跡は能代川（現新津川）の西約 0.6km に位置し、この微高地上に存在する。

遺跡は調査直前の平成 20 年 1 月末日まで、JR 東日本の職員宿舎が建ち、JR 新津駅の隣接地であることから周辺は住宅・商業地として利用されており地形の起伏はほとんど認められない。しかし、陸地測量部が明治 44 年（1911）測図した 1/25,000 の地形図（図版 1）や耕地整理以前の地図（図版 2）では水田として利用されている。また、図版 2 では北側に畑や住居域が広がり、遺跡から北側に向かって標高が高くなることから、遺跡は微高地の南斜面に立地すると予想される。現標高は 5.3m 前後である。

第 2 節 周辺の遺跡 (第 1 表、第 2 図、図版 3)

萱免遺跡周辺の遺跡分布は旧石器時代では丘陵部に限定される。縄文・弥生時代では丘陵・段丘上及び砂丘地に集中し、古墳時代には丘陵や段丘の縁辺部や平野部微高地・砂丘地、奈良・平安時代になるとさらに平野部微高地に多くの分布が見られるようになる。具体的には古代までは丘陵上に弥生後期の環壕集落・円墳などが展開し、丘陵裾部には奈良・平安時代の製鉄・須恵器（土師器）窯などの生産遺跡が集中している。中世の遺跡は遺跡周辺の新津城跡を含め主に沖積地に立地する。

現在、合併後の遺跡数は市域で約 708 か所である。遺跡の分布状況詳細は、『沖ノ羽遺跡Ⅳ 第 15 次調査』〔立木・澤野・八藤後^{ほか} 2008〕に記載しているのでそちらを参照されたい。本書では萱免遺跡周辺の古代の遺跡に限定して記載する。

古代の遺跡 古代（飛鳥～平安時代）の遺跡は市内で 343 遺跡確認されている。平野部には集落遺跡が多く立



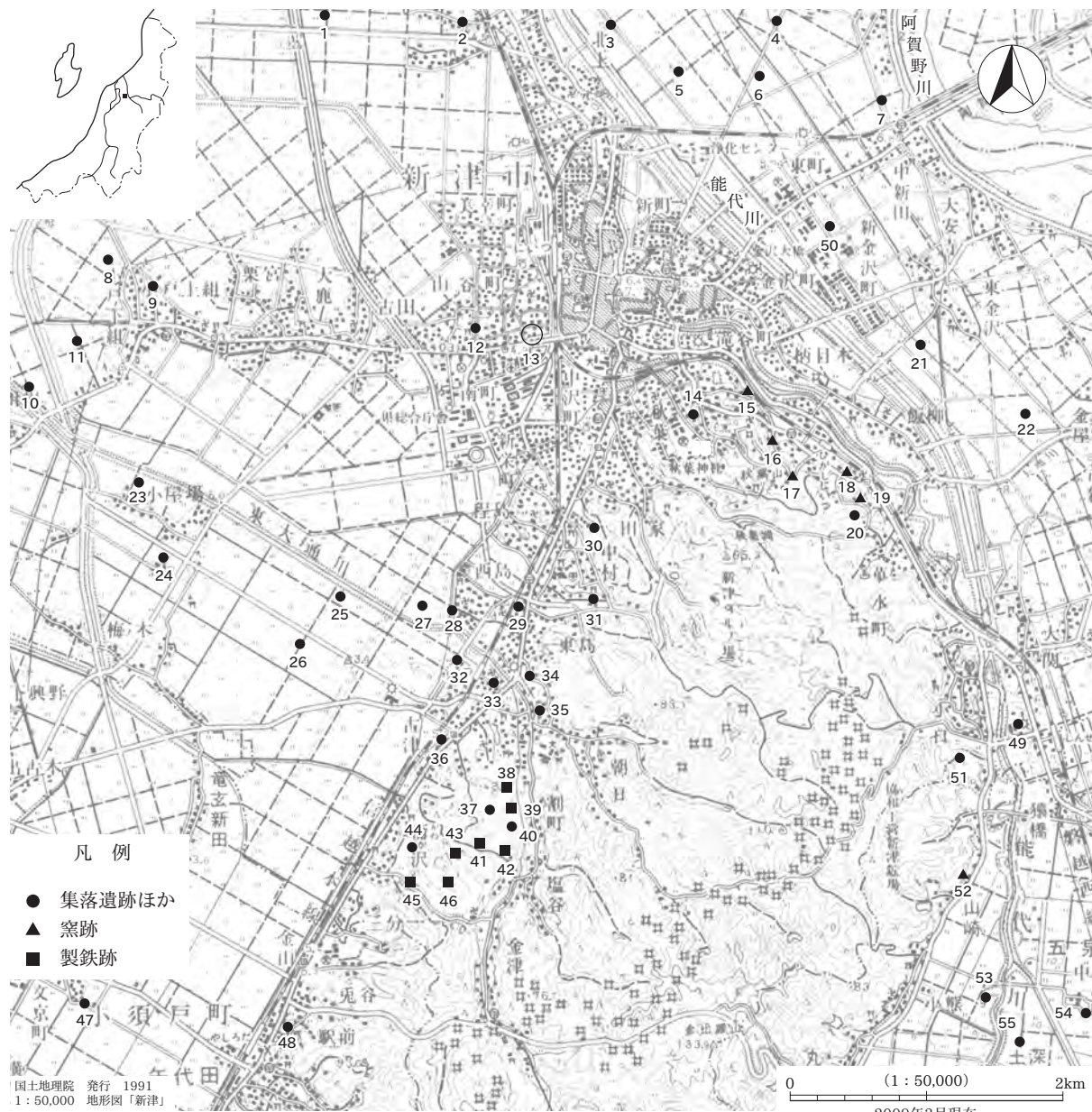
新潟県『土地分類基本調査 新潟・新津』1972・1974年より作成 [1/150,000]

第1図 周辺地形分類図

第2節 周辺の遺跡

第1表 萱免遺跡周辺の古代遺跡一覧表

No.	名称	市町村	時代	種別
1	上浦 A	新潟市	古代	遺物包含地
2	川口乙	新潟市	平安	遺物包含地
3	神ノ羽	新潟市	古墳・古代・中世	遺物包含地
4	無頭	新潟市	平安	遺物包含地
5	山王浦	新潟市	平安	遺物包含地
6	大下	新潟市	平安	遺物包含地
7	中新田久保	新潟市	平安	遺物包含地
8	西沼	新潟市	平安	遺物包含地
9	小戸下組	新潟市	平安・鎌倉～室町	遺物包含地
10	川根	新潟市	古代～中世	遺物包含地
11	長左工門沼	新潟市	平安	遺物包含地
12	新津城跡	新潟市	平安・南北朝～戦国	散布地・城郭跡
13	萱免	新潟市	奈良・平安	遺物包含地
14	秋葉	新潟市	縄文・弥生・平安	遺物包含地
15	秋葉2丁目窯跡	新潟市	平安	窯跡
16	七本松窯跡群	新潟市	平安	窯跡
17	滝谷窯跡	新潟市	平安	窯跡
18	草水町1丁目窯跡	新潟市	平安	窯跡
19	草水町2丁目窯跡	新潟市	旧石器・縄文・平安	窯跡
20	愛宕澤	新潟市	縄文・平安・中世	遺物包含地
21	西江浦	新潟市	平安	遺物包含地
22	細池寺道上	新潟市	平安・中世	遺物包含地
23	下梅ノ木	新潟市	平安・鎌倉～南北朝	遺物包含地
24	曾根	新潟市	平安・鎌倉	遺物包含地
25	古通	新潟市	平安	遺物包含地
26	中郷	新潟市	平安	遺物包含地
27	西島中谷内	新潟市	古代	遺物包含地
28	桜大門	新潟市	平安	遺物包含地
29	東島大道下	新潟市	古墳・古代・鎌倉・室町	遺物包含地
30	城見山	新潟市	縄文・古代・中世	遺物包含地
31	大坪	新潟市	古代	遺物包含地
32	舟戸	新潟市	弥生・古墳・古代	遺物包含地
33	塩辛	新潟市	弥生・古墳・古代・中世	遺物包含地
34	山脇	新潟市	古墳・平安	遺物包含地
35	森田	新潟市	弥生・古墳・平安・中世	遺物包含地
36	二百刈	新潟市	縄文・古代	遺物包含地
37	古津八幡山	新潟市	縄文・弥生・古墳・平安	集落跡
38	古津初越 B	新潟市	古代	製鉄跡
39	古津初越 A	新潟市	古代	製鉄跡
40	金津初越 B	新潟市	古代	遺物包含地
41	大入 C	新潟市	古代	製鉄跡
42	金津初越 A	新潟市	古代	製鉄跡
43	居村 C	新潟市	縄文・弥生・古代	製鉄跡
44	神田	新潟市	縄文・古代	遺物包含地
45	居村 A	新潟市	平安	製鉄跡
46	居村 B	新潟市	弥生・古代	製鉄跡
47	東腰付	新潟市	奈良	遺物包含地
48	三沢 B	新潟市	平安	遺物包含地
49	諏訪畑	新潟市	平安	遺物包含地
50	大野中	新潟市	縄文・平安	遺物包含地
51	小実山	新潟市	縄文・弥生・古代	遺物包含地
52	山崎窯跡	五泉市	奈良	窯跡
53	筧下	五泉市	古墳～平安	集落跡
54	中野	五泉市	奈良・平安	遺物包含地
55	村付	五泉市	奈良・平安	遺物包含地



第2図 萱免遺跡周辺の古代遺跡分布図

地し、丘陵裾部には製鉄遺跡、須恵器・土師器窯跡などの生産遺跡が集中している。海岸近くの砂丘上には製塩遺跡もある。萱免遺跡のある新津丘陵周辺には多くの遺跡が確認されている。

生産遺跡としては新津丘陵窯跡群が丘陵北東斜面に分布し、七本松窯跡(16)〔中川・倉田1956〕・草水町1・2丁目窯跡(18・19)・滝谷窯跡(17)〔川上・木村・鈴木1989〕などが代表的である。平成18年度の下水道工事に伴う立会調査で七本松窯跡に隣接する地点で、新たに秋葉2丁目窯跡(15)が新発見された。昭和27年(1952)に出版された『新津市誌』では新津丘陵に18か所の窯跡が存在すると記載〔小林1952〕されているが、詳細な地点が不明なものが多く、近隣に未知の窯跡がまだ多数存在すると考えられる。それを裏付けるように、草水町2丁目窯跡から南へ3kmほどの地点の五泉市域に山崎窯跡(52)が単独で存在する。新津丘陵窯跡群は時代的には8世紀中～9世紀中葉までの存続時期と考えられている〔春日1999〕。製鉄遺跡は新津丘陵西斜面に居村C遺跡(43)・大入C遺跡(41)などがあり、9世紀第2四半世紀以降とされる〔渡邊^{ほか}1997〕。

次に、沖積地に立地する集落遺跡を古い時期から紹介する。長沼遺跡は、非ロク口の土師器や返りのある須恵器蓋が定量出土した、7世紀後半～8世紀の遺跡である〔渡邊1991〕。近年、秋葉区天ヶ沢地内の大沢谷内遺跡からは7世紀後半の土器に伴出して県内最古と言われる「九九木簡」などの木製品や律令祭祀具などが出土している。両遺跡ともに、7世紀中葉の647年に造営されたとされる「淳足柵」と年代が近く、注目される。上浦A遺跡(1)では掘立柱建物が発見され〔川上1997、坂上2003〕、円面硯や多量の墨書土器が出土している。上浦A遺跡の年代は出土遺物の年代観から7世紀末～10世紀と考えられ、存続時期の長い遺跡である。隣接する上浦B遺跡〔新潟市国際文化歴史文化課2007〕からは、周囲を溝で囲まれた総柱建物跡1基と掘立柱建物2基が方向を揃えて検出された。周辺には井戸や畑跡も検出されている。遺跡の年代は9世紀後半の短期間に営まれている。希少なものとしては奈良三彩の小壺が1点出土している。

また、丘陵北側の秋葉区満日地区には沖ノ羽遺跡(3)〔石川^{ほか}1994、星野^{ほか}1996、細野^{ほか}2002、春日2003a、北村・菊池^{ほか}2004、立木・澤野^{ほか}2005、立木・澤野・八藤^{ほか}2008〕、山王浦遺跡(5)〔立木・澤野^{ほか}2004b〕、中谷内遺跡〔立木^{ほか}1999、渡邊^{ほか}2002〕、内野遺跡〔立木・高野^{ほか}2002〕、無頭遺跡(4)〔長澤^{ほか}2002〕、大下遺跡(6)、中新田久保遺跡(7)など9世紀後半を中心とする遺跡が多く確認されている。沖ノ羽遺跡からは8世紀第3四半世紀から10世紀第1四半世紀までの遺構・遺物が連続的に確認されており、集落や生産域が時代的に移動する様相が明らかになりつつある。瓦塔や緑釉陶器香炉、同香炉蓋、土師器仏鉢形土器など特殊な遺物が出土した地点もあり、「村落内寺院」を持つ地域の中心的な集落である。山王浦遺跡からは9世紀後半の雨落溝を伴う掘立柱建物が3基検出されており、井戸や土坑など周辺施設が併設する建物小群がいくつか並存する「住耕一体型」の集落の一部と考えられる。中谷内遺跡からは平安時代に流れた旧流路に沿って、集落の一部が確認された。旧河道の覆土中からは祭祀に伴う多くの墨書土器が出土した。土器は上層と下層で様相を異にし、9世紀第3四半世紀～と第4四半世紀の概ね3時期に分けられる。緑釉陶器無台椀など希少品も出土している。内野遺跡からは溝・小土坑などが検出され、9世紀後半の集落の一部が確認された。無頭遺跡は狭小な調査区で不明な部分が多いが、9世紀後半の土器が少量出土している。

新津丘陵東側の両新地区では細池寺道上遺跡¹⁾〔小池^{ほか}1994、立木・渡邊^{ほか}1998、渡邊^{ほか}2001、北村・菊池^{ほか}2004〕(22)、諏訪畑遺跡〔潮田2008〕(49)、小実山遺跡〔山崎・遠藤1999〕(51)など9～10世紀にかけての遺跡が確認されている。細池寺道上遺跡は、遺跡範囲が広範囲におよんでいるが9世紀代の遺物が主体的に確認されている。遺物の中には、「都保一口」と刻書された9世紀前半の須恵器短頸壺や土師器仏鉢形土器など特殊な遺物も出土している。諏訪畑遺跡からは9世紀後半から10世紀初頭の土師器長甕と鍋の一括資料が出土している。さらに出土状況から畑跡状遺構に伴うと考えられ貴重な例である。小実山遺跡は諏訪畑遺跡の能代川対岸の丘陵上に位置する。出土遺物は10世紀前半が主体である。緑釉陶器耳皿など特殊遺物が出土している。

第3節 歴史的環境

古墳時代の越後国については文献史料では不明な点が多い。越後平野に立地する古墳は秋葉区の古津八幡山古墳をはじめ、西蒲区の菖蒲塚古墳・山谷古墳、西区の緒立神社古墳や三条市の保内三王山古墳群などいずれも前期のもので、5世紀代には越後平野で古墳の実態は不明瞭である。5世紀後半以降は高田平野・魚野川流域に造営されるようになる。

越国の領域については第1段階(3～4世紀)は旧越前国(越前・加賀・能登)、第2段階(5～6世紀)は旧越中国(頸城・古志・魚沼・蒲原4郡まで含む)まで、第3段階(7世紀中～)は淳足・磐舟柵までとし、次第に北上していく様が伺える〔米沢1965・1980〕。『続日本紀』大宝2年(702)3月条には、越中国4郡を割いて越後国に編入するとあり、頸城・古志・魚沼・蒲原の4郡がこれに当たるとされ、これにより越中国の領域が確定した。最終的に越後国の領域が確定するのは、和銅5年(712)にそれまで越後国に属していた出羽郡を分割して出羽国を建国したことによる。

古代の秋葉区域は蒲原郡に属し、その郡域は概ね三条市以北阿賀野川以西の越後平野と推定され、中世南北朝に蒲原郡の郡域が旧沼垂郡を含む領域に拡大するまでは大幅な変更はなかったと思われる。7世紀段階には旧越中国の淳足柵に属する領域として整備され、8世紀には蒲原郡として成立したと見られる。蒲原郡内には10世紀成立の『和名類聚抄』に桜井・勇礼・青海・小伏・日置の5郷が見られ、桜井・勇礼・青海・小伏の4郷については所在地が比定できることから、秋葉区域は日置郷に当たると考えられていた。郷域は新津丘陵の北端部を中心に阿賀野川以西信濃川以東、概ね現在の秋葉区・五泉市・田上町の範囲と推定される。

宝亀11年(780)の「西大寺資財流記帳」(『寧楽遺文』中巻)には、西大寺の荘園として蒲原郡に鶉橋庄・槐田庄が見られる。同史料に「越後国水田并墾田地帳景雲三年」とあることから、成立はいずれもそれ以前の8世紀中葉と見られる。所在地については式内社名から、鶉橋庄は五泉市橋田、槐田庄は三条市周辺とされている。これらの荘園に秋葉区域が含まれていたのかは不明である。

新津丘陵における須恵器生産は、早ければ7世紀後半には始まり〔春日1995〕、8世紀前半～9世紀中頃が主な操業時期である。これは越後国内の他地域の須恵器生産動向とほぼ一致しており、いわゆる「一郡一窯体制」であった〔宇野1994〕。しかし9世紀前半～中葉には、佐渡小泊窯の製品が越後国全域に流通するという画期的変化が生じる〔坂井1996〕。

一方、金津丘陵製鉄遺跡群は新津丘陵北西側の金津地区にあり、窯跡と近接するのは燃料が薪や木炭と共通するためである。古代の秋葉区域の産業は新津丘陵の製鉄・窯跡群が中心で、低湿地や潟湖が大部分を占めていた越後平野の中で新津丘陵は重要な位置にあったと思われる、文献史料上は確認できないが、沼垂柵や国府津である蒲原津とも何らかの関係があった可能性がある。

注

- 1) 細池寺道上遺跡は寺道上遺跡(旧新津市 No.28)が昭和60年(1985年)に行われた新潟県文化行政課主催の分布調査により確認され、その後に細池遺跡(旧新津市 No.68)が磐越自動車道建設に伴う試掘調査で平成2年(1990年)に発見された。それぞれ新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードおよび遺跡地図に登録され、地点が異なることから別遺跡とされた。その後、平成3・4年(1991・1992年)に新潟県による細池遺跡と寺道上遺跡の調査が行われ〔小池ほか1994〕、平成8・9年(1996・1997年)には新津市による市道建設に伴う本調査が細池遺跡で行われた〔立木・渡邊ほか1998〕。平成11年(1999年)には新津市による同原因の調査が寺道上遺跡で行われた〔渡邊ほか2001〕。平成14年(2002年)に行われた両新地区圃場整備事業に伴う確認調査の結果、範囲が拡大し、細池、寺道上遺跡の両遺跡と土手外遺跡(旧新津市 No.89)を含めた範囲を「細池寺道上遺跡」として再登録された。それに伴う処置として、土手外遺跡は欠番として扱われた。これ以降の遺跡名は「細池寺道上遺跡」の名称を用いている。平成16年(2004年)に行われた東北電力鉄塔建設に伴う本発掘調査の報告書名は『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』として刊行されている〔北村・菊池ほか2004〕。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘調査(第3・4図)

試掘調査(第1次調査)は平成20年2月1・7日の2日間行った。開発予定面積は7,009.59㎡で、12か所の試掘坑を設定した。試掘調査は重機(バックホウ)で表土から徐々に掘削した後、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況を記録した。試掘調査面積は72㎡(6㎡×12か所)である。

この結果、調査範囲の北西側にある5・7・8・10・11トレンチから奈良・平安時代の遺構・遺物が確認された。特に7・8・10・11トレンチでは、暗オリーブ灰色のシルト質の包含層が良好な状態で保存されていたため新遺跡発見の手続きがとられ、萱免遺跡として周知化された。

以上の結果を踏まえて前述(第I章第2節参照)したように事業者と協議を行い、道路部分約370㎡について記録保存のための本発掘調査を実施することになった。また、それ以外の道路予定部分については既存建物の影響で攪乱が著しいため工事立会とし、宅地部分については盛土にて保護層を確保することとした。

第2節 本発掘調査(図版4～6)

A 調査方法

1) 現況

平成20年1月の解体工事までJR東日本の4階建職員宿舎が建てられていた。昭和39年(1964)頃までは平屋建ての建物だったが、同年の新潟地震後に鉄筋4階建ての宿舎が建設され、今に至るようである。それ以前は水田耕作地である。現標高は5.3mである。

2) グリッドの設定(図版5・6)

グリッドを設定するにあたっては、基点を北西杭とした。基点はX座標:199500.000、Y座標:54500.000、緯度:37°47'46"4786、経度:139°07'07"8608とし、これを1A1杭とした。基点から国土地理院の第8系座標軸を用いて10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は北西隅の杭を基点として南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドをさらに2m方眼に区分して1から25の小グリッドに分割し、「11E1」のように呼称した。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区3点の座標(新座標)は次のとおりである。

・11E1

(X座標:199400.000、Y座標:54540.000、緯度:37°47'43"2265、経度:139°07'09"4687 杭頭高3.857m)

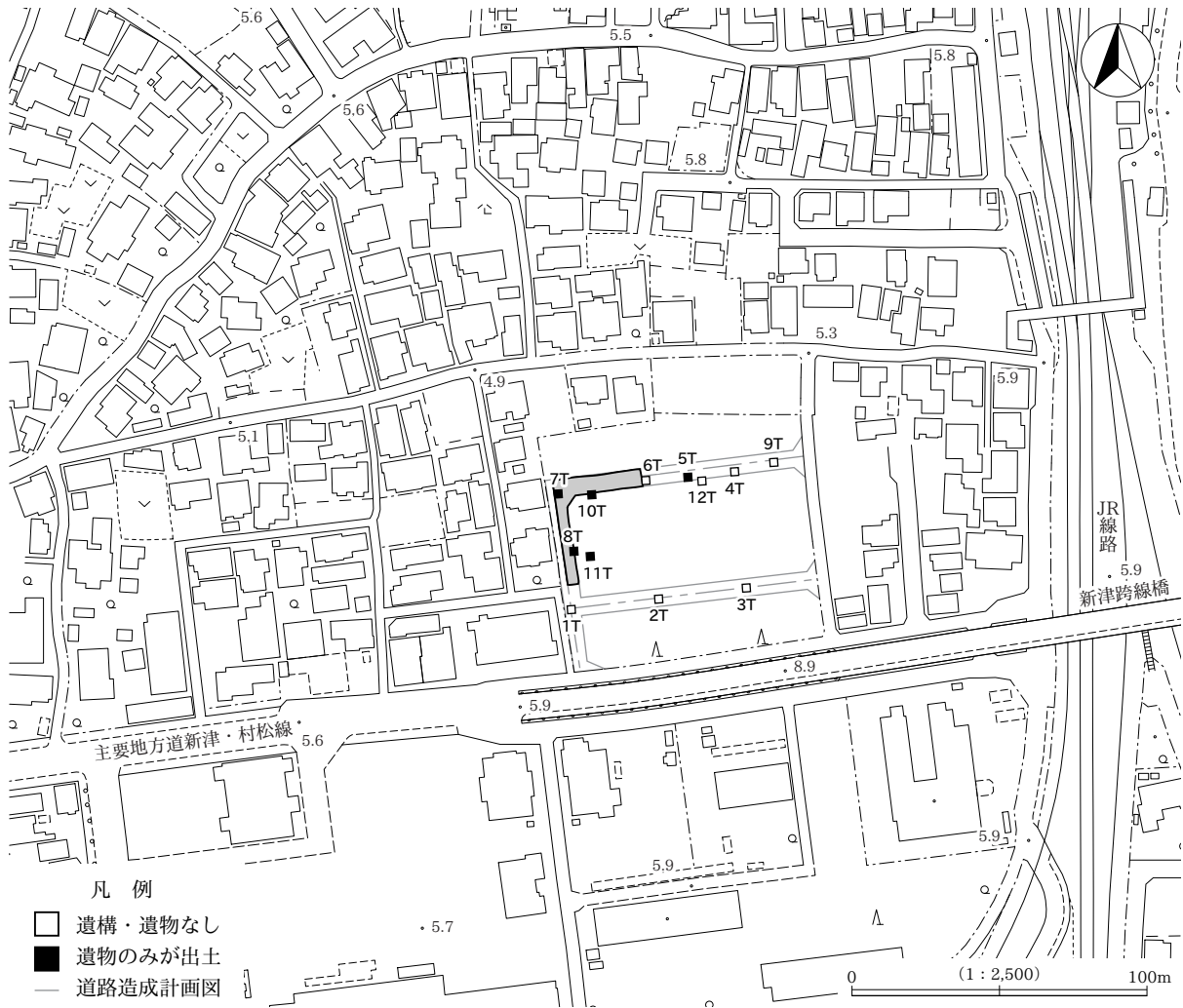
・11G1

(X座標:199400.000、Y座標:54560.000、緯度:37°47'43"2222、経度:139°07'10"2862 杭頭高5.343m)

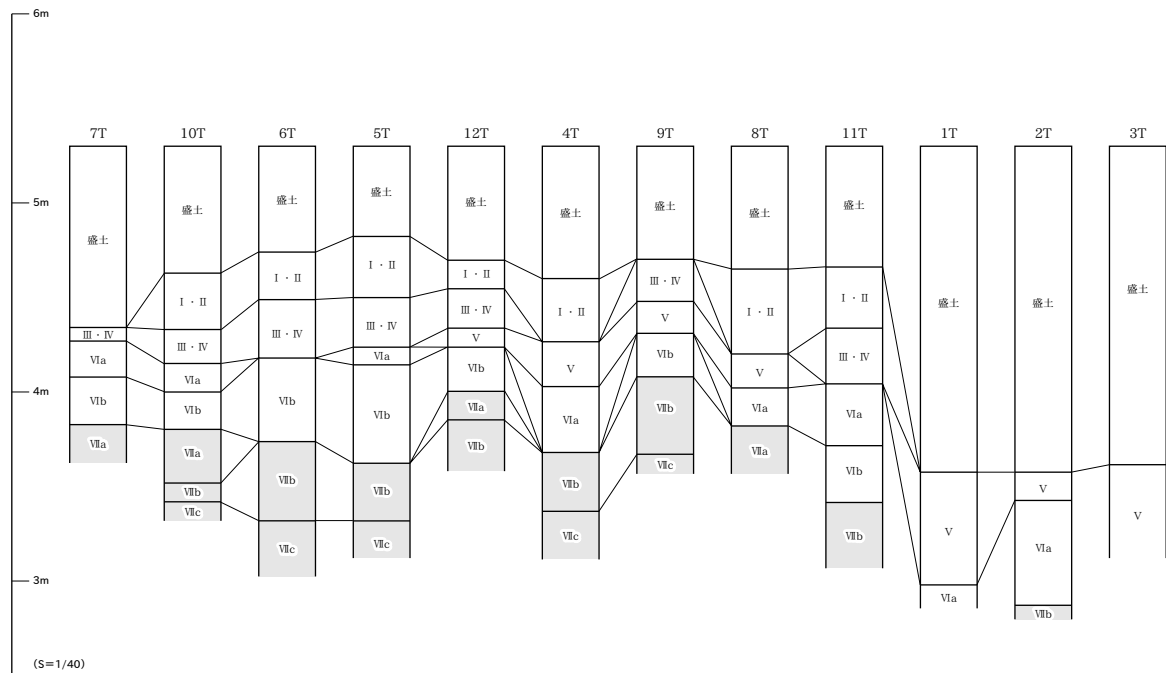
・14E1

(X座標:199370.000、Y座標:54540.000、緯度:37°47'42"2534、経度:139°07'09"4606 杭頭高4.750m)

真北は11E1杭で長軸方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対し0度22分46秒東偏し、磁北は真北に対し7度44分00秒西偏する。



第3図 萱免遺跡試掘調査位置図



第4図 萱免遺跡試掘調査土層柱状図

3) 調査方法

①表土剥ぎ：試掘調査によって遺物の出土が多量であることから、遺物包含層（Ⅵ層）上面まで、遺物の出土に注意しながら重機(バックホウ)により除去した。排土は横置きした。法面は安全面を考慮して一分の勾配とした。また、湛水防止のために表土剥ぎと並行して調査区の周囲に土側溝を掘り、2 時のポンプで強制排水を行った。土側溝は、幅 20 cm×深さ 20 cm程の溝で、壁面を垂直に掘ると崩壊する恐れがあるために緩く傾斜をつけた V 字の溝であり、人力で掘削した。土側溝により遺構の破壊が考えられたが、湛水により調査が不能になることを防ぐ処置である。

②包含層掘削・遺構検出・発掘：重機で掘削後、ジョレン等を用いて人力で精査を行い、包含層の掘削・遺構の検出にあたった。排土は人力で調査区外へ搬出した。

③実測・写真：実測図は断面図を 1 / 20 で作成した。平面図や各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて作成し、あわせて俯瞰写真を撮影した。写真撮影は 35 mm版、6 × 7 版のカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。さらにデジタルカメラでの撮影も行った。

④遺物取り上げ：包含層出土遺物は小グリッド単位で取り上げた。遺構からの出土遺物は点数が少ないため、層位・小グリッド単位ごと一括で取り上げた。

⑤自然科学分析：植物珪酸体分析・花粉分析を行った。

B 調査経過

平成 20 年 2 月 28 日から諸準備を開始し、2 月 29 日に機材を搬入した。3 月 4 日～3 月 7 日まで、重機によって I～Ⅵ層を除去した。表土剥ぎと並行して作業員約 5 名で排水路掘削、法面仕上げを行った。表土は 1.5m ほどの深さがあり、近隣住居の間際から掘削すると住居が傾く危険があった。このため、地盤の崩落を防ぐため、住居のある東側は 2m 内側から掘削した。従って、調査面積は当初の 370 m²が減少した。3 月 7 日より表土機械掘削班と 2 班に分かれ、作業員 5 名で調査区東側から順に人力包含層掘削および遺構検出・精査作業を開始した。途中、降雪などで作業に遅延をきたしたが、3 月 13 日に完掘写真の撮影をし、発掘作業をほぼ終了した。3 月 16 日にセスナ機（実機）による航空写真撮影を行った。3 月 17 日に地元の山谷町 1 丁目地区を対象とした見学会を行い、約 20 名ほどの参加があった。

最終的な発掘調査面積は上端面積 295.0 m²、下端面積 212.3 m²である。

C 調査体制

【平成 19 年度】

調査期間	平成 20 年 2 月 28 日～平成 20 年 3 月 29 日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫）
所管課	歴史文化課（課長 倉地一則、課長補佐 山田一雄） 歴史文化課埋蔵文化財係（係長 渡邊朋和）
事務担当	埋蔵文化財センター（所長 山田光行）
調査担当	立木宏明（主査）
調査員	遠藤恭雄（主査） 高野裕子 澤野慶子 八藤後智人 池田ひろ子（専門臨時職員）
整理補助員	熊野敦子 笑喜正子 須貝律子 須田秀樹 内藤正義 西郡大輔 渡辺絵理（臨時職員）

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ（内法 54.5 × 33.6 × 10.0cm）にして 45 箱である。奈良・平安時代の土器・土製品・鍛冶関連遺物・石製品など各種の遺物がある。

遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄。②注記。③包含層：グリッド別の種別の重量計測。④遺構：遺物の器種別の重量・個体数計測。⑤接合。⑥報告書掲載遺物の抽出。⑦実測図作成。観察表作成。⑧仮割付作成。遺物実測図は整理補助員が作成し、トレースおよび版下作成は、業者に委託しデジタルトレースした。

2) 遺構

平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した 1 / 40 の遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。報告書の 1 / 80 と 1 / 40 の遺構平面図は測量業者が作成し、デジタルデータとした。そのほかの図面は整理補助員がトレースを行い作成した。

B 整理経過

平成 19 年度の発掘調査終了後、引き続き整理作業を開始した。しかし年度末ということもあり、実際の整理作業は平成 20 年度に行った。4 月～6 月までは出土遺物の洗浄・注記・接合と、写真・図面整理を行い、併せて測量作業に委託した遺構平面図の校正作業を行った。別発掘調査現場の終了後の 11 月より実測作業を開始した。遺物実測には、3 名で約 3 か月を要した。遺構平面図は測量業者作成のデジタルデータを用いた。職員は、原稿執筆、遺物写真の撮影準備、図版のレイアウト、報告書の編集にあたり、平成 20 年度末に報告書を刊行した。

C 整理体制

【平成 20 年度】

整理期間	平成 20 年 4 月 1 日～6 月 30 日、11 月 4 日～平成 21 年 3 月 31 日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫）
所管課	歴史文化課（課長 倉地一則、課長補佐 山田一雄） 歴史文化課埋蔵文化財係（係長 渡邊朋和）
事務担当	埋蔵文化財センター（所長 山田光行）
整理担当	立木宏明（主査）
調査員	八藤後智人（専門臨時職員）
整理補助員	五十嵐智子 岩寄真由美 小柳勢伊子 小菅和子 広瀬智子 帆苺奈緒子 渡辺絵理（臨時職員）

第IV章 遺 跡

第1節 概 要

萱免遺跡は標高約 5.3m の沖積地に立地する。萱免遺跡では奈良・平安時代（8 世紀中葉～9 世紀前半）の遺物が出土し、同時代の遺構が検出された。しかし、調査区の 10D～10G グリッドにかけては調査以前にあった構造物の基礎による攪乱がひどく、遺跡の遺存率は高いとはいえない。なお、調査区全体の平面図は図版 6～8 に示した。検出された遺構としては土坑 4 基、性格不明遺構 4 基、溝 4 基、小土坑 3 基である。

遺物量は遺物収納コンテナ（内法 54.5 × 33.6 × 10.0cm）で 45 箱である。内訳は奈良・平安時代の土師器・須恵器が 42 箱で、土製品が 1 箱、石製品・礫が 1 箱、鍛冶関連遺物が 1 箱である。

第2節 層 序（図版 9、写真図版 6・7）

萱免遺跡の基本層序は調査区全体に対応する。図については基本層所の位置も含め図版 9 で、写真は写真図版 6・7 で示した。遺構確認面は現地表面から約 1.2～1.8m で達する。従って、遺構確認面の標高は 3.4～3.8m 程度で推移している。

遺跡の基本層序は盛土を除き大きく 7 層に大別され、8 層に細分される。盛土は現地表面を形成しているが、部分的には地山にまで及ぶ。Ⅰ・Ⅱ層は旧水田耕作土及び、旧水田床土である。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は遺物の出土は無い。Ⅵ層から奈良・平安時代の遺物が出土する。遺構検出面はⅥ層及びⅦ層上面である。Ⅶ層以下は地山であり、遺物の出土は無い。以下に盛土以外の基本層序を記す。

- Ⅰ 層 黒褐色土（10YR3/1）シルト層 粘性弱く、しまり弱い。褐鉄鉱が縞状に入る。旧水田耕作土。
- Ⅱ 層 褐灰色土（10YR4/1）シルト層 粘性弱く、しまり弱い。褐鉄鉱が縞状に入る。旧水田面床土。
- Ⅲ 層 灰色土（7.5YR5/1）シルト層 粘性ややあり、しまりややあり。無遺物層。
- Ⅳ 層 灰オリーブ色土（7.5YR4/2）シルト層 粘性ややあり、しまりややあり。無遺物層。
- Ⅴ 層 灰色土（7.5YR5/1）シルト層 Ⅲ層と比べて多少粘性が強く、しまりややあり。無遺物層。
- Ⅵ a 層 オリーブ灰色土（2.5GY5/1）シルト層 粘性ややあり、しまりややあり。径 5mm の炭化物が少量入る。奈良・平安時代遺物包含層。
- Ⅵ b 層 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）シルト層 Ⅵ a 層に比べて若干粘性が強く、しまりややあり。径 5～10mm の炭化物が部分的に多く入る。奈良・平安時代遺物包含層。
- Ⅶ 層 灰色土（10Y4/1）シルト層 粘性が非常に強く、しまりややあり。一部砂層の部分あり。無遺物層。地山。

第3節 遺 構（図版 6～11）

A 遺構の概要

遺構番号は遺構の種別にかかわらず通し番号を付した。説明は土坑、性格不明遺構、溝、小土坑の順に記す。

詳しい遺構の計測値等は別表 1 に示した。遺構出土土器の詳細は別表 2・4 に示しており、遺構の記述では一部省略した。遺跡から検出された遺構は土坑 4 基（以下、SK とする）、性格不明遺構 4 基（以下、SX とする）、溝

4基（以下、SDとする）、小土坑3基（以下、Pitとする）の計15基である。遺構の形態分類は和泉A遺跡での分類〔加藤・荒川1999〕を参考としてはいるが、おおまかに平面形は円形・楕円形・長方形、断面形は弧状・半円状・台形状に分類した。

遺構の所属時期は、VI a層からVII層上面を切って掘り込まれている遺構から奈良・平安時代の土器が出土している。したがって、全ての遺構が奈良・平安時代の遺構と考えられる。

遺構の分布は、10D・10E・11D・12D・13Dグリッドで確認された。標高3.6mから3.8mにかけて確認されているが、同じ標高前後である10Fグリッド付近では遺構が確認されていない。また、13Dグリッドの標高が3.6mより下がる南側では遺構が確認されていない。

遺構の密度としては、種類や規模にもよるが、11D・12D・13Dグリッドの標高3.6mから3.8mにかけての位置にまとまりがある。

B 遺 構 各 説

1) 土 坑 (SK)

SK3 (図版10、写真図版7)

10E12・13に位置する。遺構確認面はVI bおよびVII層である。遺構の一部が土側溝で破壊されている。平面形は東西に伸びる楕円形で、断面形は弧状である。主軸方向はN - 80° - Wで、長軸約1.15m・短軸0.98mで深さは0.18mである。重複関係は隣接するSK4に切られる。覆土は2層に分かれ、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は覆土から土師器小甕が出土している（図版13）。

SK4 (図版10、写真図版7)

10E12に位置する。遺構確認面はVII層であるが、重複するSK3を切る遺構であるため本来はVI層中が確認面と考えられる。遺構の一部が土側溝で破壊されている。平面形は南北に伸びる楕円形で、断面形は半円状である。主軸方向はN - 10° - Eで、長軸0.86m・短軸0.58mで深さは0.16mである。覆土は1層で、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は覆土から土師器小甕が出土している（図版13）。

SK5 (図版10、写真図版7)

10D25、10E21に位置する。遺構確認面はVII層である。遺構の一部が土側溝で破壊されている。平面形は南北に伸びる楕円形で、断面形は弧状である。主軸方向はN - 6° - Wで、長軸1.02m・短軸0.68mで深さは0.10mである。重複する遺構は無い。覆土は1層で、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

SK14 (図版10、写真図版7・8)

13D3・4に位置する。遺構確認面はVII層である。遺構の一部が調査区外に伸びる。平面形はほぼ南北に伸びる楕円形で、断面形は弧状である。主軸方向はN - 23° - Wで、長軸1.26m・短軸不明で深さは0.12mである。重複する遺構は無い。覆土は1層で、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は覆土から土師器長甕・小甕・鍋、須恵器無台杯・杯蓋が出土している。中にはSX10と接合関係にある遺物もある（図版13）。

2) 性格不明遺構 (SX)

SX1 (図版10、写真図版8)

10D22・23に位置する。遺構確認面はVI a層である。平面では確認できず、断面で遺構であると判断したため、遺構の一部を掘り下げてしまっている。平面形はおそらく円形と考えられ、断面形は弧状である。主軸方向はN - 87° - Eで、長軸不明・短軸0.55mで深さは0.17mである。重複する遺構は無い。覆土は1層で、層の中ほどに炭化物が多く混入している。堆積状況からは自然堆積と思われる。遺物は覆土から土師器長甕・小甕が出土している（図版13）。

SX6 (図版10、写真図版8)

11D3・4・8・9・13・14に位置する。遺構確認面はVII層である。遺構の約半分が調査区外に伸びると考えられる。

また、一部が土側溝で破壊されている。平面形はおそらく北東から南西に伸びる楕円形あるいは隅丸方形と考えられ、断面形は浅い台形状である。主軸方向はN - 32° - Eで、長軸3.71m・短軸不明で深さは0.23mである。底面は概ね平坦であるが、浅く窪む部分もある。底面を精査したが、この遺構に付随するような遺構や構築物は確認できなかった。また、重複する遺構は無い。覆土は4層に分かれ、炭化物は全ての層に量の多少にかかわらず混入しているが、特に2層に炭化物が多く混じる。なお、覆土4層は自然科学分析を実施した結果、イネのプラント・オパールが少ないながらも検出されている（第VI章第1節参照）。覆土は堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は覆土から土師器無台椀・蓋・長甕・小甕・鍋、須恵器無台杯・有台杯・杯蓋・大甕・横瓶、敲石が出土している（図版13～15・24）。1層からの出土遺物が多い。

SX10（図版11、写真図版8）

11D23・24、12D3・4・8・9に位置する。遺構確認面はVII層である。遺構の約半分が調査区外に伸びると考えられる。また、東寄りの一部が土側溝で破壊されている。平面形はおそらく南北に伸びる長方形と考えられ、断面形は浅い台形状である。主軸方向はN - 6° - Eで、長軸4.27m・短軸不明で深さは0.22mである。底面は起伏が少なく、概ね平坦である。底面を精査したが、この遺構に付随するような遺構や構築物は確認できなかった。また、重複する遺構は無い。覆土は2層に分かれ、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は覆土から土師器長甕・小甕・鍋、須恵器コップ型有台杯、鉄滓が出土している（図版15・24）。

SX15（図版11、写真図版9）

13D9に位置する。遺構確認面はVII層である。平面形は南北に伸びる楕円形で、断面形は弧状である。主軸方向はN - 13° - Wで、長軸0.85m・短軸0.32mで深さは0.10mである。重複する遺構は無い。覆土は1層で、堆積状況から自然堆積と思われる。なお、覆土は自然科学分析を実施したところ、覆土中からイネのプラント・オパールが多量に検出されている（第VI章第1節参照）。遺物は覆土から土師器長甕・小甕が出土している（図版15）。

3) 溝 (SD)

SD9（図版11、写真図版9）

11D23に位置する。遺構確認面はVII層である。東西に伸びる溝で、断面形は弧状である。東端は調査区外に伸び、一部が土側溝で破壊されている。調査区内での主軸方向はN - 85° - Eで、規模は長軸不明・短軸0.34mで深さは0.08mである。重複する遺構は無い。観察できた部分では覆土は1層で、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は覆土から須恵器無台杯が出土している（図版15）。

SD11（図版11、写真図版9）

12D9・13・14に位置する。遺構確認面はVII層である。東西に伸びる溝で、断面形は弧状である。両端ともに調査区外に伸び、一部が土側溝で破壊されている。調査区内での主軸方向はN - 80° - Eで、規模は長軸不明・短軸0.33mで深さは0.15mである。重複する遺構は無い。観察できた部分では覆土は1層で、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は覆土から土師器長甕が出土している（図版15）。

SD12（図版11、写真図版9）

12D14に位置する。遺構確認面はVII層である。東西に伸びる溝で、断面形は弧状である。東端は調査区外に伸び、西端は土側溝で破壊されている。調査区内の範囲での主軸方向はN - 78° - Eで、規模は長軸不明・短軸0.20mで深さは0.08mである。重複する遺構は無い。観察できた部分では覆土は1層で、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

SD13（図版11、写真図版9）

12D13・14・18・19に位置する。遺構確認面はVII層である。東西に伸びる溝で、断面形は弧状である。両端は調査区外に伸び、一部が土側溝で破壊されている。調査区内の範囲での主軸方向はN - 79° - Eで、規模は長軸不明・短軸2.04mで深さは0.11mである。他の溝に比べて短軸の規模が大きい。底面は起伏が少なく、

概ね平坦である。重複する遺構は無い。観察できた部分では覆土は1層で、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は覆土から土師器長甕・小甕・鍋、須恵器有台杯が出土している（図版15）。

4) 小 土 坑 (Pit)

Pit2 (図版11・写真図版9)

10E22に位置する。遺構確認面はⅦ層である。平面形は円形、断面形は半円状である。長軸0.12m・短軸0.11mで深さ0.10mである。重複する遺構は無い。覆土は1層であり、堆積状況から自然堆積と思われる。また、柱根や柱痕は確認できなかった。遺物は覆土から土師器長甕、須恵器大甕が出土している（図版15）。

Pit7 (図版11・写真図版9)

10E21に位置する。遺構確認面はⅦ層である。遺構の北半分が土側溝で破壊されている。平面形はおそらく円形と考えられ、断面形は半円状である。計測できた部分では長軸0.40m・短軸不明で深さ0.10mである。重複する遺構は無い。覆土は1層であり、堆積状況から自然堆積と思われる。また、柱根や柱痕は確認できなかった。遺物は出土していない。

Pit8 (図版11・写真図版9)

11D18に位置する。遺構確認面はⅦ層である。遺構の西半分が土側溝で破壊されている。平面形はおそらく円形と考えられ、断面形は半円状である。長軸不明・短軸0.39mで深さ0.20mである。重複する遺構は無い。覆土は1層であり、堆積状況から自然堆積と思われる。また、柱根や柱痕は確認できなかった。遺物は出土していない。

第V章 遺物

第1節 概要

萱免遺跡からは、古代（奈良・平安時代）の遺物が出土している。遺物出土総量はコンテナ（内法 54.5 × 33.6 × 10.0cm）に 45 箱出土した。奈良・平安時代の土器が 42 箱、土製品 1 箱、鍛冶関連遺物が 1 箱、石製品・礫が 1 箱である。

第2節 奈良・平安時代の遺物

奈良・平安時代の土器は土師器・須恵器・黒色土器がある。遺跡全体の総重量比は土師器 78.00% (21,407.15g)・須恵器 21.98% (6,034.50g)・黒色土器 0.02% (4.50g)、総点数比は土師器 92.01% (2,659 点)・須恵器 7.92% (229 点)・黒色土器 0.07% (2 点) である。内訳は包含層の総重量比が土師器 77.42% (17,352.35g)・須恵器 22.56% (5,056.60g)・黒色土器 0.02% (4.50g)、総点数比は土師器 92.14% (2,097 点)・須恵器 7.78% (177 点)・黒色土器 0.08% (2 点) である。遺構出土の総重量比は土師器 80.57% (4,054.80g)・須恵器 19.43% (977.90g)・黒色土器 0.00% (0g)、総点数比は土師器 91.53% (562 点)・須恵器 8.47% (52 点)・黒色土器 0.00% (0 点) である。比率を見ると、重量比・点数比ともに土師器の量が卓越している。しかし、後述する遺構別器種構成率（別表 5 参照）では須恵器食膳具の比率が高い。土師器の大部分は煮沸具など大形の土器が多く、おのずと点数・重量比の割合が高くなっている。

包含層出土遺物の出土状況を見ると、奈良・平安時代の遺物はVI層からの出土が大半を占める。出土した遺物の重量を小グリッドごとに合計し、図版 12 に提示した。

その結果、10D・10E・11D・12D・13D グリッド周辺で遺物量が多くなっている。その集中的な分布域は、遺構の集中度と一致する。調査区南側の 14D から南側に向かっては、傾斜変換点となって緩やかに標高が下がり低湿地化している。調査区東側の 10F・10G グリッドは現代の建物による攪乱が著しく、それに対応して遺物量が少ない。

本遺跡で出土した奈良・平安時代の土器類は後述するが、8 世紀中葉から 9 世紀前半の年代観が想定される。

A 土器の分類と記述（第 5～7 図）

記述は最初に土器分類を土師器・黒色土器・赤彩土器・須恵器の順に行い、次に遺構・包含層・試掘調査・秋葉 2 丁目窯跡出土土器について記した。

分類は形態・手法による分類はアルファベット大文字で(A・B・…)と表した。さらに細分する場合は算用数字で(1・2・…)とアルファベット小文字で(a・b・…)と表現した。法量による分類はローマ数字で(I・II・…)と表した。成形・調整の表現・名称は、山三賀Ⅱ遺跡〔坂井^{ほか}1989〕、中谷内遺跡〔立木^{ほか}1999〕、滝寺・大貫古窯跡群〔小田^{ほか}2006〕の記載に従った。

1. 「ロクロナデ」はロクロ回転を利用したナデで、そのほかのものは「ナデ」とした。
2. 回転を利用した削りを「ケズリ」とし、利用しないものは「ヘラケズリ」とした。
3. 黒色土器無台椀・土師器無台椀などに見られるヘラ磨きは「ミガキ」とした。
4. 須恵器大甕・横瓶、土師器長甕などの外面に見られる叩板工具を用いた成形痕を「タタキメ」とし、内

面の当て具工具を用いての成形痕を「当て具痕」とした。これらの細分類は、内堀信雄氏の分類〔内堀1988〕、柿田祐司氏の分類〔柿田2001〕を基本に第5図のようにした。

このほか、須恵器の胎土分類については山三賀Ⅱ遺跡〔坂井ほか1989〕、古代阿賀北地域の土器様相〔春日ほか2004〕などを参考に、次のA～D群に分類したが、本遺跡ではA・C群のみが出土している。事実記載にあつたつてはC群の新津丘陵窯跡群以外の産地を記し、記載の無いものは全て新津丘陵窯跡群（C群）である。

A群：胎土そのものが相対的に粗く、石英・長石・金雲母を多く含む。器面はざらついたものが一般的で、小礫が露出する。笹神丘陵の笹神・真木山窯跡群を中心とする阿賀北地方の須恵器と推定される一群である。

B群：胎土そのものが精良で、白色小粒子を多く含む。器面に黒色の斑点、吹き出しが見られる。佐渡の小泊窯跡群の須恵器と推定される一群である。

C群：胎土そのものは比較的精良であり、石英・長石の小粒子を少量含む。器面は滑らかである。新津丘陵窯跡群の須恵器と推定される。

D群：A～C群以外のものを一括した。西古志・高田平野西部丘陵産と推定されるものも含む。

また、近年の調査成果〔渡邊ほか2001〕で還元炎焼成の須恵器と酸化炎焼成の須恵器の区別を行い報告している。それにならい、還元と酸化の区別をし、還元炎焼成はさらに青灰～灰色のものを「還元」とし、灰白色の焼成不足と思われるものを「還元 灰白」と別表に記した。このほか、詳細な計測値は別表2に示したとおりである。土師器の胎土分類は多様で分類を行っていない。

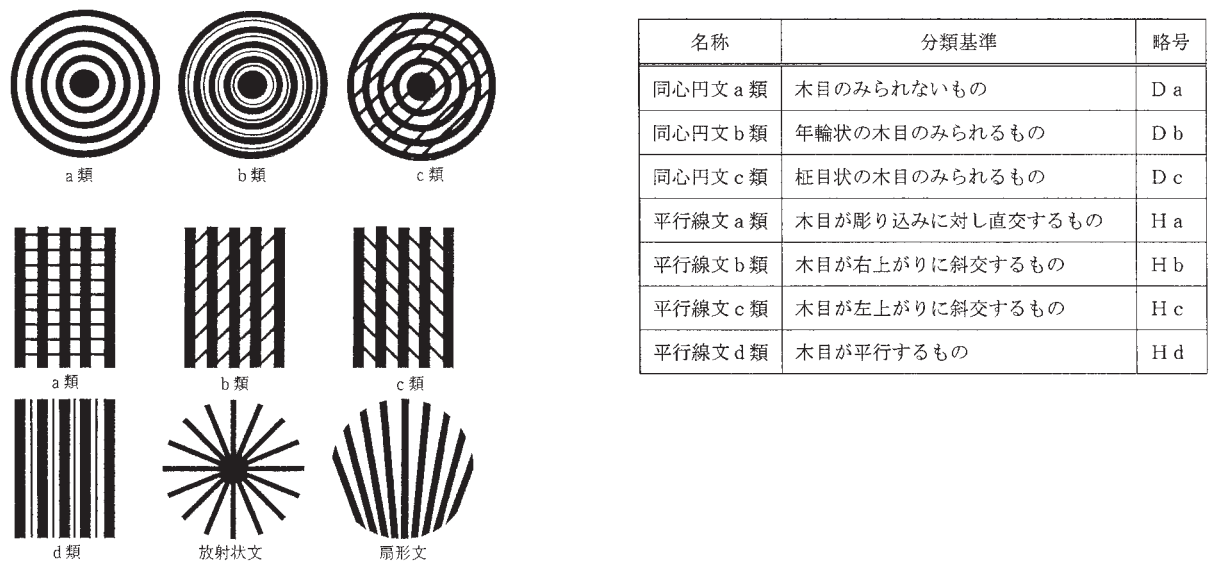
次に本遺跡の特徴を整理するため器種分類を行い、器種ごとに説明を行う。以下、土師器・黒色土器・赤彩土器・須恵器の順で概説する。

土師器 大きく食膳具と煮炊具がある。食膳具には無台碗がある。煮炊具には長甕・小甕・鍋がある。

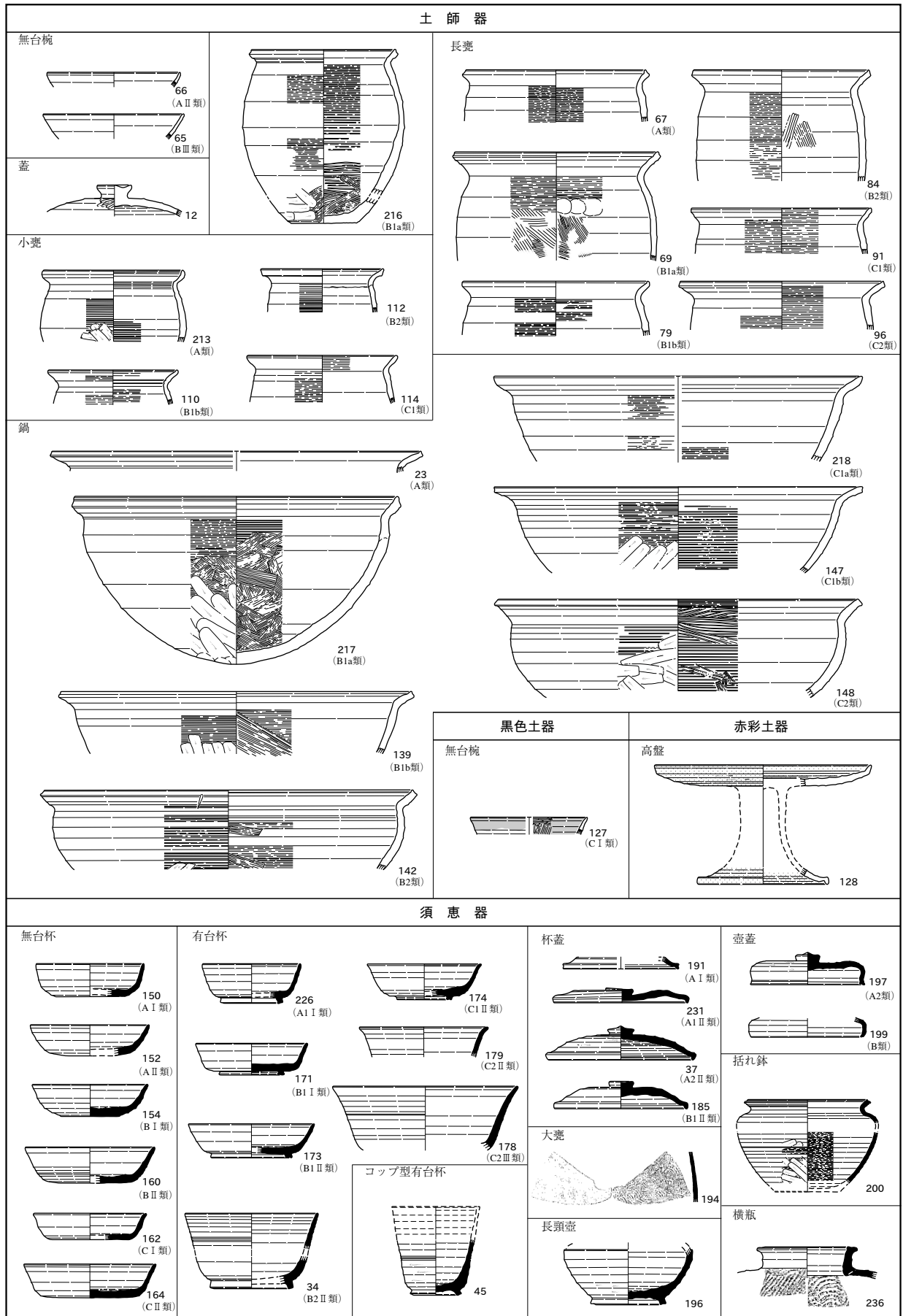
無台碗 無台の碗である。全体形が覗えるものは出土していない。形態と法量で分類した。口縁部が内傾するものがA類、直立するものがB類、外湾するものをC類とした。口径が12.5cm以下のものをI類、12.6cm以上のものをII類、15.1cm以上のものをIII類とした。製作手法の違いによる分類は、体部下半資料が無いため行っていない。

蓋 大形の宝珠状のつまみを持つ蓋が1点のみ出土した。本来は外面を丁寧に磨いた精製品である。

長甕 体部上半をロクロで成形し、下半はタタキ成形で製作される。口縁部の形態により3種類に大別した。A類は口縁端部が受け口状になる。B類は口縁部が頸部で屈曲し、口縁端部が上方に伸びるもの。端部の形態によりさらに細分した。口縁部外面が凹みながら上方に伸び、丸く収まるものをB1類、上方に伸びた口縁端部が



第5図 タタキメ・当て具痕の細分類図（柿田2001をもとに再トレース）



第6図 萱免遺跡出土土師器・黒色土器・赤彩土器・須恵器分類図(大甕 1/12、拵れ鉢 1/8、それ以外 1/6)

強く摘まれるものを B2 類とし、B1 類のうち端部が明瞭に丸いものを B1a 類、端部が不明瞭に丸いものを B1b 類とした。C 類は外反し、そのまま伸びるものである。口縁端部が丸く収まるものを C1 類、端部に面を持つものを C2 類とした。

小甕 ロクロで成形され、平底の底部を持つ。長甕と共通の分類を用いた。A 類、B1・2 類、C1 類が確認される。

鍋 体部上半はロクロで成形し、下半をタタキ成形の後、ハケメ成形で作られる。大きく開く体部を持つ。長甕と共通の分類を用いた。C1 類については口縁部先端が丸く収まるものを C1a 類とし、つまみ出されるものを C1b 類とした。A 類、B1・2 類、C1・2 類が確認される。

黒色土器 食膳具の無台碗が出土している。主に内側を黒化処理した「内黒」の土器である。

無台碗 少数のみ出土している。体部外面にはミガキが施され、口縁端部は外面も磨かれるものが多い。分類は土師器無台碗と同様である。

赤彩土器（土師器） 土師質の胎土の土器の内面あるいは内外面に赤彩された土器を一括した。

高盤 浅い皿状の体部に長脚が付属するものである。1 点のみ出土した。

須恵器 食膳具と貯蔵具がある。食膳具には無台杯・有台杯・コップ型有台杯・杯蓋がある。貯蔵具には大甕長頸壺・括れ鉢・横瓶がある。出土数は少なく、ほとんどが破片資料で全形がわかるものは出土していない。

無台杯 無台の杯である。形態と法量で分類した。口縁端部が内湾のものを A 類、直線的に立ち上がるものを B 類、底部からゆるやかに内湾気味に立ち上がり口縁端部が外反するものを C 類とした。口径が 12.5cm 以下のものを I 類、12.6cm 以上のものを II 類とした。

有台杯 有台の杯である。高台は全て貼り付け輪高台である。口縁部破片であっても、傾き等から有台杯とした資料もある。口縁部の形態分類は無台杯とほぼ同様であるが、身が浅いものを 1 類、深身のものを 2 類とした¹⁾。さらに、口径が 12.5cm 以下のものを I 類とし、口径が 12.6cm 以上のものを II 類、口径が 15.1cm 以上のものを III 類とした。2 類とした深身の有台杯の体部には幅 2mm 程度の沈線が巡る「金属器模倣形態」のものが存在する。

コップ型有台杯 杯状で身が深い、現在のコップに似た器形の杯である〔小田ほか 2006〕。体部から底部にかけての資料が 1 点出土している。

杯蓋 有台杯に伴う摘みのある蓋である。口縁部形態、摘みの形態および法量により細分を行った。口縁端部が「く」の字状に曲がるものを A 類、垂直に下がるものを B 類、外反するものを C 類とした。摘みの形態はボタン状のものを 1 類、擬宝珠型のものを 2 類とした。口径 12.5cm 以下のものを I 類、12.6cm 以上のものを II 類、15.1cm 以上のものを III 類とした。

大甕 大形で丸底の甕を一括した。破片数は多いが、全体形がわかる資料は出土していない。

長頸壺 長い頸部を持つ瓶あるいは壺を一括した。底部には高台が付く。口縁部資料は出土していない。

壺蓋 短頸壺の蓋である。体部はロクロケズリが施され、平坦気味である。端部は「く」の字に屈曲する。端部に面を持つ A 類と先端が細くなる B 類がある。

括れ鉢 口縁部が大甕のように屈曲し、底部が平底になる鉢である。

横瓶 俵状の体部に、直立する短い口縁部が付く瓶類である。

B 出土土器等各説

1) 遺構出土土器

SK3 (図版 13、写真図版 13)

土師器小甕 (1) の体部破片が 4 点出土した、内外面ともにロクロナデである。

SK4 (図版 13、写真図版 13)

土師器小甕 (2) の体部破片が 1 点出土した、外面はロクロナデ、内面にロクロナデとカキメ痕が残る。

SK14 (図版 13、写真図版 11～13)

土師器長甕 (3)・小甕 (4)・鍋 (5)、須恵器無台杯 (6)・杯蓋 (7・8) が出土している。3 は口縁部から体部のみで、B1a 類である。4 は、SX10 出土小甕と接合する。分類 B2 類、底部はヘラ切りである。5 は底部片を欠く、内外面カキメ後、外面は下半にケズリ、内面はハケメである。分類 C1 類である。6 は相当の焼歪みのある須恵器無台杯である。体部下半に 1.5mm 幅の沈線が巡る。内面に一条のヘラ記号が施される。底部はヘラ切り右回転である。7 は杯蓋の擬宝珠型の摘み部である。8 は杯蓋の体部片である。沈線が 2 条巡る。7・8 ともに還元炎焼成である。

SX1 (図版 13、写真図版 13)

土師器長甕 (9) と小甕 (10) が出土している。9 は体部破片である。外面に平行タタキメ c 類、内面に同心円当て具痕 a 類が残る。10 は内外面にロクロナデが巡る。

SX6 (図版 13～15、写真図版 13)

土師器無台椀 (11)・蓋 (12)・長甕 (13～15)・小甕 (16～22)・鍋 (23～26)、須恵器無台杯 (27～33)・有台杯 (34～36)・杯蓋 (37～42)・大甕 (43)・横瓶 (44) が出土している。11 は口縁部から体部上半が残る。土師器無台椀 B II 類である。12 は精製品の土師器椀類の蓋である。2 次焼成を受けているため、調整は不明な部分が多い。わずかに、体部外面に丁寧な磨きが見られる。摘み部はボタン状である。13～15 は長甕の口縁部資料である。13 は C1 類、14・15 は B1a 類である。16・17 は小甕の口縁部から体部の資料である。内外面ロクロナデが施される。16・17 ともに C1 類である。18～22 は小甕の底部資料である。18・21 は底部ヘラ切り、19・22 はヘラ切り後ナデ、20 は糸切りである。23～26 は鍋の口縁部から体部にかけての資料である。23 は A 類、24 は B1b 類、25 は B1a 類、26 は C1a 類である。須恵器無台杯のうち 27・28 が B II 類、31 が C I 類、29・30 が C II 類である。32・33 は底部資料で、32 には墨書されているが判読できない。28・30～33 は還元炎焼成、27・29 は酸化炎焼成である。有台杯のうち 34 が深身の B2 II 類、35 が浅身の B1 II 類、36 は底部のみでおそらく 2 類である。全て還元炎焼成である。杯蓋のうち 37 が A2 II 類、40～42 が A II 類、39 が B II 類、38 が 1 類である。42 は内面に墨痕が残り、転用硯として利用されていた痕跡がある。全て還元炎焼成である。43 は大甕の体部破片である。外面は平行タタキメ a 類で成形された後カキメが施され、内面は同心円当て具痕 c 類が残る。44 は横瓶の体部片である。外面は平行タタキメ a 類で成形され、内面は同心円当て具痕 a 類が残る。

SX10 (図版 15、写真図版 11～14)

須恵器コップ型有台杯 (45)、土師器長甕 (47～52)、小甕 (46)、鍋 (53) が出土している。45 のコップ型有台杯は体部下半から底部が出土している。推定高 10cm、推定口径 9cm 程度のコップ型を呈する有台杯と考えられる。幅 1.5mm 程度の沈線が 2 本体部下半に巡り、下半から底部にかけては削られている。金属器模倣形態の土器と考えられる。底部ヘラ切りの回転方向は右方向である。焼成は還元炎焼成である。49～52 は長甕の口縁部資料である。49 が B1a 類、50～52 が B2 類である。47・48 は長甕体部資料である。48 の外面は平行タタキメ a 類で成形され、内面は同心円当て具痕 a 類が残る。46 は小甕の体部資料で内外面にロクロナデが残る。53 は鍋の口縁部で B2 類である。

SX15 (図版 15、写真図版 14)

土師器長甕 (54) と小甕 (55) が出土している。いずれも体部破片のみで内外面にロクロナデ痕が残る。

SD9 (図版 15、写真図版 14)

須恵器無台杯 (56) が出土している。B II 類である。焼成は還元炎焼成であるが、焼きが悪く灰白色を呈する。

SD11 (図版 15、写真図版 14)

土師器長甕 (57) が出土している。体部片で内外面ともにロクロナデである。

SD13 (図版 15、写真図版 14)

須恵器有台杯 (58)、土師器長甕 (59・61)、小甕 (62)、鍋 (60) が出土している。58 の須恵器有台杯は底部

のみの出土で底径から浅身の1類と推定される。59は長甕口縁部資料でB1b類、61は体部資料で内外面ロクロナデの後に、外面にはカキメも観察される。62は小甕の体部資料である。内外面にロクロナデ痕が残る。60は鍋の体部資料である。

Pit2 (図版15、写真図版14)

須恵器大甕(63)と土師器長甕(64)が出土している。63は外面は平行タタキメc類の後カキメ、内面は同心円当て具痕c類が残る。

2) 包含層出土土器 (図版16～23、写真図版11・12・14～17)

今回の調査地点では包含層出土遺物が多数出土した。器種を網羅するように選択して図化・掲載した。土師器無台椀(65・66)・長甕(67～104)・小甕(105～126)・鍋(129～149)、黒色土器無台椀(127)、赤彩土器(土師器)高盤(128)、須恵器無台杯(150～170)・有台杯(171～183)・杯蓋(184～191)・大甕(192～195)・長頸壺(196)・壺蓋(197～199)・括れ鉢(200～202)・横瓶(203)について、以下に記す。

土師器無台椀は2点図化し、いずれも口縁部破片である。65はBⅢ類、66はAⅡ類である。長甕は38点図化した。全てロクロ成形で須恵器製作同様にタタキ技法が用いられている。完形品となる資料は無い。口径は20cm前後が多く、最大でも26cmである。67・68がA類、69～77がB1a類、78～81がB1b類、82～87がB2類、88～93がC1類、94～99がC2類である。100～103までが体部資料、104は底部資料である。71・78・88の口縁部外面に口縁部を作出したときの絞り痕が残る。100は外面カキメ、内面はカキメ、ハケメ、平行タタキメa類が残る。101は内外面に平行タタキメd類、102は外面に平行タタキメc類、内面に同心円当て具痕c類が残る。103は外面平行タタキメa類で内面は当て具痕がナデで消されて分類不明である。104は平底になる長甕の底部資料である。外面は削られている。内面に同心円当て具痕a類が残る。底部はヘラ切りされている。外面の削りによる影響で器壁は全体に薄手である。内面に当て具痕が残ることから長甕と判断したが、外面が削られており小甕の可能性も否定できない。小甕は22点図化した。全てロクロ成形で、完形品資料は無い。口径は10～16cm前後である。105がA類、106～109がB1a類、110がB1b類、111・112がB2類、113～118がC1類である。119～126が底部資料である。内面はロクロナデ、カキメが施され、外面下半には削られる資料(119～121・126)が多い。内面の底は指押さえされている資料(120～125)が見られる。鍋は21点図化した。完形となる資料は無い。口径は34～42cm前後のものが確認されている。概ね、35cm前後と40cm前後の2法量に分けられるようである。129～131と133～149は口縁部および口縁部から体部にかけての資料である。129・130・133～136がB1a類、137～140がB1b類、141～144がB2類、145がC1a類、146・147がC1b類、131・148・149がC2類である。132は底部資料である。外面にケズリ痕、内面に指押さえ痕が残る。基本的な製作技法は長甕と同様であるが、内外面にロクロナデとカキメが巡る。底部近くの資料が少ないので不明瞭な点があるが、体部下外面は叩き出された後、削られている。内面はハケメ調整が残る。長甕のように外面にタタキメ、内面に当て具痕の痕跡が明瞭に残らないことから、タタキメと当て具痕を明瞭に残す須恵器貯蔵具の製作技法など同様の製作技法は用いられていないようである。

黒色土器無台椀が1個体出土(127)している。内面は黒色処理され、内面は丁寧に磨かれている。

赤彩土器(土師器)高盤が1個体出土(128)している。県内では類例の少ない資料である。口径23.4cm、高さ推定13.0cm、底径14.0cmと復元され、内外面に赤彩されている。口縁は外反気味に立ち上がり、皿状の受台となる。脚部の大部分が失われているが、滝寺窯跡東区2号窯灰原出土の須恵器高盤〔小田^{ほか}2006〕を参考に器形復元すると、脚部底面に向かって垂下し、広がり気味に屈曲する端部にいたる。

須恵器無台杯は21点図化した。口径は11.6～14.2cm前後のものが見られ、大きく12cm前後のもの13～14cm前後の2法量が確認できる。150・151・165はAⅠ類、152・153はAⅡ類、154～156・166・167はBⅠ類、157～161・168はBⅡ類、162・163はCⅠ類、164はCⅡ類である。169・170は底部資料である。155の外面にヘラ記号「||」、169の内面にヘラ記号「▽」が残る。胎土は156がA群で

それ以外はC群である。焼成は158が酸化炎焼成で150～157、159～170が還元炎焼成である。還元炎焼成の製品のうち、灰白色を呈する焼成不足と思われる製品(150・159・161・162・164・170)が定量見られる。底部の切り離し回転方向は確認できた資料全て右回転である。有台杯は13点図化した。口径は12.0～20.0cm前後までのものが出土し、12cm前後のもの、14cm前後のもの、20cm前後の3法量が確認できた。さらに身の深さにより細分している。171はB1Ⅰ類、172・173はB1Ⅱ類、175～177はB2Ⅱ類、174はC1Ⅱ類、179はC2Ⅱ類、178はC2Ⅲ類である。180～183は底部資料である。181・183は1類、180・182は2類である。172の内面にヘラ記号「×」、181の外面にヘラ記号「///」が残る。176・178の体部には1～2条の幅1.5mm程度の沈線が入る。胎土は174が砂粒が多く入るA群で、それ以外はC群である。焼成は全て還元炎焼成である。灰白色の製品が2点(172・173)確認されている。杯蓋は8点図化した。法量は12cm前後のもの、14cm前後の2種類が確認でき、有台杯Ⅰ・Ⅱ類とそれぞれに対応すると考えられる。191がAⅠ類、184がA2Ⅱ類、188がAⅡ類、185がB1Ⅱ類、186・187・189・190がBⅡ類である。186の内面にヘラ記号「∪」が残る。胎土は185がA群でそれ以外はC群である。焼成は全て還元炎焼成である。灰白色の製品が2点(184・188)確認される。大甕は4点図化した。192が口縁部片、193～195が体部片である。192以外、全て外面は平行タタキメ、内面に当て具痕が残る。195の内面の同心円当て具痕は、工具端部1/3程度を当てている。焼成は全て還元炎焼成で、194のみ灰白色を呈する軟質な土器である。長頸壺は1点(196)図化した。体部から底部にかけての資料である。底部にヘラ記号「※」と他個体の付着物が残る。壺蓋が3点(197・198・199)出土した。197がA類、198・199がB類である。短頸壺の蓋と考えられるが、短頸壺本体は今回の調査で出土しなかった。括れ鉢は3点(200～202)図化した。200は強く屈曲した口縁を持ち、体部下半は緩く窄まりながら平底の底部にいたる資料と考えられる。体部外面下半は削られている。201は体部資料、202は底部資料である。3個体ともに還元炎焼成であるが、色調は灰白の軟質な土器である。横瓶は1点(203)図化した。体部片である。閉塞板が欠落した状態である。外面に平行タタキメa類、内面に同心円当て具痕c類が見られる。

3) 試掘調査出土土器(図版23・24、写真図版11・12・17・18)

試掘調査時(第3図)の出土遺物について今回の調査区に含まれる地点も含めて発掘を行っているため、本書に掲載する。

5トレンチ出土土器のうち須恵器括れ鉢(204)底部に掲載した。胎土は一応、還元炎焼成としたが内面は赤褐色で相当軟質である。

7トレンチ出土土器のうち土師器小甕(205)、須恵器無台杯(206)・有台杯(207)・杯蓋(208)を図化した。205はC1類に分類される、口径12.6cmの小形品である。206はBⅠ類、207はB1Ⅱ類、208はAⅡ類である。焼成は全て還元炎焼成である。

8トレンチ出土土器のうち土師器長甕(209～211)・小甕(212～216)・鍋(217・218)、須恵器無台杯(219～225)・有台杯(226～230)・杯蓋(231～234)・括れ鉢(235)・横瓶(236)を図化した。土師器長甕は全てB1a類に分類される。小甕は212・213がA類、216がB1a類、214がC1a類である。216は全体形状が覗える資料である。鍋のうち217がB1a類、218がC1a類である。217は今回の調査で唯一全体形が確認できた鍋である。外形は半球球状に復元できる。須恵器無台杯は219～221がBⅠ類、222～224がBⅡ類である。225は底部資料である。223の底部に墨書「古」が残る。胎土は221・225がA群で、それ以外はC群である。焼成は222が酸化炎焼成、それ以外が還元炎焼成で、色調が灰白色の一群である。有台杯は226がA1Ⅰ類、227がB1Ⅰ類、228がC1Ⅱ類、229が1類、230が2類である。230は有台皿の可能性もある。焼成は全て還元炎焼成である。杯蓋は231がA1Ⅱ類、232がA2Ⅱ類、234がBⅡ類である。233は端部が欠損しているため分類不明である。焼成は全て還元炎焼成で、232のみ色調が灰白色になる資料である。235は括れ鉢の体部である。頸部近くに沈線が一条残る。236は横瓶の口縁部資料である。

10 トレンチ出土土器のうち須恵器無台杯(237・239)・有台杯(238)・大甕(239)を図化した。237はAⅡ類、239は底部資料である。焼成はどちらも還元炎焼成で、239は色調が灰白色のものである。238はBⅠⅠ類である。240の大甕は外面に平行タタキメa類、内面に同心円当て具痕a類が見られる。

11 トレンチ出土土器のうち土師器長甕(241)体部片を図化した。外面に平行タタキメa類、内面に同心円当て具痕a類が見られる。

第3節 土製品、鍛冶関連遺物、石製品

土製品、鍛冶関連遺物、石製品の詳しい数値観察表は別表4に示した。

A 土製品(図版24、写真図版18)

2点(242・243)の「細型管状土錘」(関1990)が包含層より出土した。どちらも上下端に面を持たない土錘である。242は器面にケズリおよび指頭圧痕が残る。243は器面に指頭圧痕のみが残る。

B 鍛冶関連遺物(図版24、写真図版18)

鍛冶関連遺物を2点図化した。244はSX10より出土した鉄滓である。不定形で不純物が多く混入し、一部発泡している。炉壁の可能性もある。245は包含層出土の鉄滓の破片である。赤褐色を呈し、不純物が多く混じる。

C 石製品(図版24、写真図版18)

敲石(246)がSX6より1点出土した。凝灰岩製の楕円形を呈する河原石を素材としている。端部に敲击痕が残り、打面が大きく剥離している。

第4節 秋葉2丁目窯跡出土土器(図版25、写真図版19)

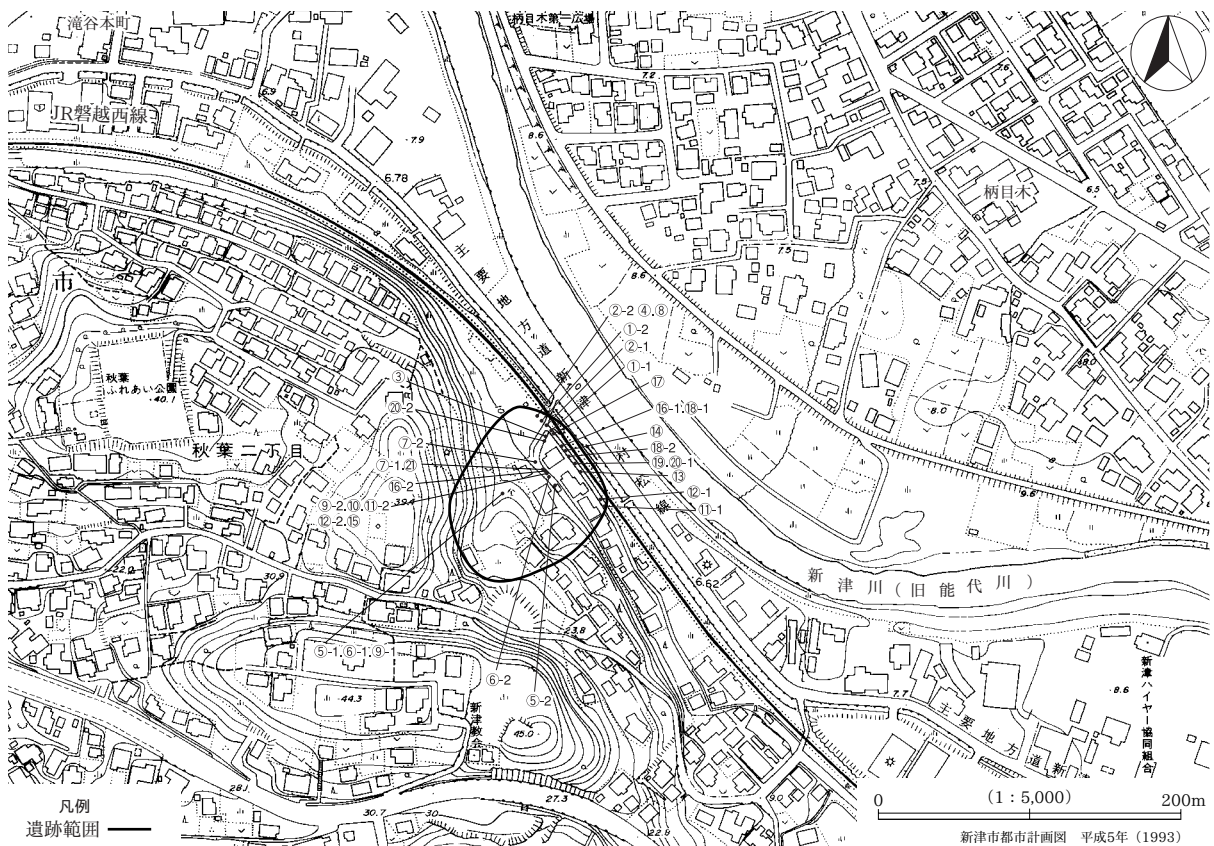
萱免遺跡の同時期の参考資料として秋葉区秋葉2丁目5670番-1ほかに所在(第2・7図)する秋葉2丁目窯跡出土土器を掲載する。秋葉2丁目窯跡は平成19年に市下水道工事中に偶然発見された窯跡である。阿賀野川支流能代川左岸から約0.3km東に位置にあり、標高10m前後の新津丘陵の末端部に位置する。萱免遺跡からは東に約1.5kmの距離にある。現在、確認されている新津丘陵窯跡群の中では、遺跡から最短距離にある須恵器窯である。出土する範囲は南北約100m、東西約80mである。現在の地表から深さ2.7mの所から大量の須恵器が出土している。幅1m弱でトレンチ状に掘られた下水道工事箇所複数の箇所から出土することから、数基以上の窯があることが推定される。幅が狭小で出土深度が深く、下水道の掘削部の両面に矢板が当てられるため、出土層位の観察は十分ではない。出土土器はコンテナ(内法54×34×20cm)10箱分で、1,972点である。詳細な遺物観察表は別表3に、出土点数・重量構成表は別表6に掲載した²⁾。出土須恵器は焼歪みや焼成不良、付着物が多く見られ、使用痕が観察されないことから窯本体あるいは灰原出土の須恵器窯跡に関わる出土遺物であると判断した。全ての土器胎土は比較的精良な土を用い石英・長石および白色凝灰岩粒が少量入り、器面は滑らかな特徴があり前述した胎土C群(新津丘陵窯跡群)の特徴と合致する。但し、杯類以外の大形の器種では若干、石英・長石の混入が目立つものがある。土師器も出土しているが、周辺の包含層資料等の混入と考えられ図化していない。以下に代表的な器種を紹介する。なお、土器分類および細分類は萱免遺跡と同様である。掲載した遺物の出土位置(別表3、第7図)は21・31の2点を除き、ほぼ1×5mの範囲内の出土である。

36点図化し、器種は無台杯(1～17)・有台杯(18・19、21～24)・杯蓋(25～27)・大甕(35・36)・長頸壺(20)・短頸壺(28～30)・壺蓋(31・32)・鉢(33)・横瓶(34)が出土している。杯類に折縁杯は確認されていない。

焼成は全て還元炎焼成である。そのうち、4・11・27・33は灰白色を呈する軟質の焼成である。無台杯は重ね焼き資料を含め17点図化した。1・2がAⅠ類、3・4がAⅡ類、5～7がBⅠ類、8～15がBⅡ類、16がCⅠ類、17がCⅡ類である。1は4点が正位の状態で癒着した状態で出土した。春日真実氏の重ね焼き分類Ⅲ類〔春日2003a〕にあたる。11・15・16なども内面の降灰の状況から正位での重ね焼き痕跡が確認できる。1・3・7・9の底部にヘラ記号「×」が残る。底部の切り離し方向は全て右回転である。有台杯は6点図化した。21はAⅠⅡ類、18はAⅡⅢ類、22～24はBⅠⅡ類、19はBⅡⅡ類である。19の体部にヘラ記号「×」が残る。22の底部に他個体の口縁部が若干ずれた状態で付着しており、無台杯と同様に正位の重ね焼き痕跡の可能性がある。杯蓋は3点図化した。25がAⅡⅡ類、26がAⅡⅢ類、27がBⅡⅡ類である。摘みは全て擬宝珠型である。25は外面の口縁部から1cmほど離れた部分に重ね焼き痕が残る、内面には無いことから春日氏の重ね焼き分類Ⅱb類にあたる。26は内面の口縁部から1cmほど離れた部分に重ね焼き痕が残る。おそらく有台杯に正位な方向で重なり焼かれた可能性がある。春日氏の重ね焼き分類のⅠ類である。分類大甕は口縁部資料2点を図化した。35の口径が53.0cm、36が38.6cmである。35は器高が推定1mを超える大形資料である。口縁端部に面を持ち、大きく外反する。長頸壺は1点図化した。20は幅1.5mm前後の沈線が2か所に巡る。短頸壺は2点図化した。内外面にロクロナデが巡り、高さ1.5cm前後の直立する口縁部が付く。28は口縁部直下の頸部外面に、幅2mm程度の焼成時に蓋が付属して焼かれた痕跡を残す。29も同じく蓋が乗せられて焼かれた痕跡が残る。壺蓋は2点図化した。短頸壺に付属する資料である。擬宝珠型の摘みを持ち、端部には面が残る。33は大形の鉢類底部である。34は横瓶の口縁部片である。

注

- 1) 有台杯の分類は本来、器高指数などを指標にするべきと考えるが、資料の制約があり、全体形を窺える資料が少ないことから、主観的に器高が低い(身が浅い)資料を1類、高い(身が深い)資料を2類とした。
- 2) 牧野耕作氏(新潟大学人文学部研究生)の集計資料を利用させて頂いた。出土点数は立会い範囲(80×50m)全ての資料を含んでおり個別の遺構を表すものではないが、参考のために示した。



第7図 秋葉2丁目築跡遺物出土地点(1/5,000)

第VI章 自然科学分析

第1節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている〔杉山 2000〕。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である〔藤原・杉山 1984〕。

B 試料と分析法

分析試料は、基本層序 F の VI a 層と VI b 層、SX6 の 4 層、SX15 の 1 層から採取された計 4 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図（第 8 図）に示す。分析法は〔杉山 2000〕と同じである。

C 分析結果

1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 2 表および第 8 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

2) 植物珪酸体の検出状況

a 基本層序 F

下位の VI b 層では、チマキザサ節型やミヤコザサ節型が比較的多く検出され、イネ、ススキ属型なども認められた。イネの密度は 1,400 個 /g と低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個 /g を下回っている。VI a 層では、イネが大幅に増加し、チマキザサ節型やミヤコザサ節型は減少している。また、ヨシ属、ネザサ節型が出現している。イネの密度は 15,100 個 /g とかなり高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、VI b 層ではチマキザサ節型、VI a 層ではイネが優勢となっている。

b SX6・SX15

SX6 の 4 層（覆土底部）では、チマキザサ節型やミヤコザサ節型が比較的多く検出され、イネ、樹木（その他）なども認められた。イネの密度は 1,300 個 /g と低い値である。SX15 の 1 層（覆土）では、イネがかなり多量に検出され、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。イネの密度は 30,800 個 /g と極めて高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、前者ではチマキザサ節型が優勢で、後者ではイネが卓越している。

D 考 察

1) 基本層序 F

下位の VI b 層の堆積当時は、ササ属（おもにチマキザサ節）を主体としたイネ科植生であったと考えられる。花

粉分析（第2節）では、森林植生が優勢な環境が推定されていることから、森林の林床植生などとしてササ属が分布していたことが想定される。なお、少量ながらイネが認められることから、周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

VI a 層の堆積当時は、おもに稲作が行われていたと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

2) SX6・SX15

SX6の4層（覆土底部）の堆積当時は、周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと考えられる。当時の遺構周辺は、ササ属（おもにチマキザサ節）を主体としたイネ科植生であったと推定される。一方、SX15の1層（覆土）では、イネがかなり多量に検出されることから、何らかの形で稲藁（イネの茎葉）が集積されていたことや、周辺で利用されていた稲藁に由来する可能性が考えられる。稲藁の利用としては、屋根材、敷物、藁製品（俵、縄、草履等）など多様な用途が想定される。

第2表 植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果

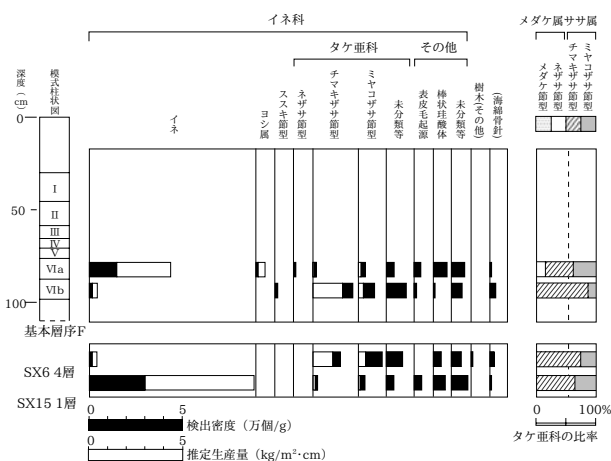
検出密度（単位：×100個/g）		基本層序F		SX6	SX15
分類群	学名	13D5・10		11D9	13D9
		VI a層	VI b層	4層	1層
イネ科	Gramineae				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	151	14	13	308
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		7		
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>		7		
タケ亜科	Bambusoideae				
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		7		
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	14	217	148	21
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	29	79	121	27
未分類等	Others	36	101	81	34
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin	29	7		34
棒状珪酸体	Rod-shaped	72	7	40	62
未分類等	Others	65	51	47	82
樹木起源	Arboreal				
その他	Others			7	
(海綿骨針)	Sponge	7	29	20	7
植物珪酸体総数	Total	411	484	458	568

おもな分類群の推定生産量（単位：kg / m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	4.45	0.42	0.40	9.06
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.46			
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.09			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03			
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.11	1.62	1.11	0.15
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.09	0.24	0.36	0.08

タケ亜科の比率（%）

ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	15			
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	47	87	75	65
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	38	13	25	35

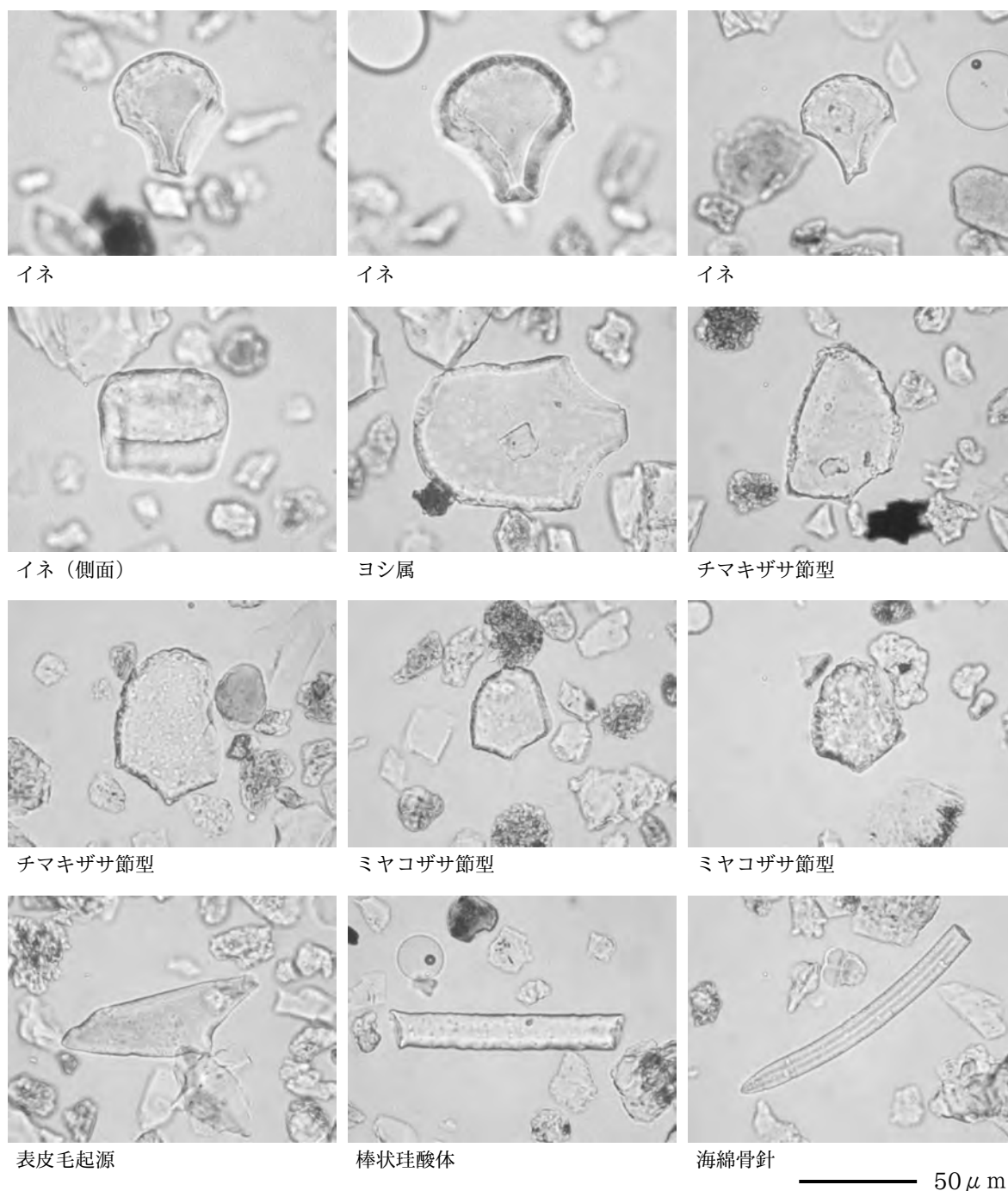


第8図 植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果

第2節 花粉分析

A はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。



第9図 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

B 試料と分析法

分析試料は、基本層序 F の VI a 層と VI b 層から採取された計 2 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図（第 10 図）に示す。分析方法は中村〔中村 1973・1974・1977〕の方法に従う。

C 分析結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 21、樹木花粉と草本花粉を含むもの 3、草本花粉 14、シダ植物孢子 2 形態の計 40 である。分析結果を第 3 表に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

2) 花粉群集の特徴

下位のVI b層では、樹木花粉が約70%を占め、トチノキとハンノキ属が優占し、クリ、スギ、コナラ属コナラ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが伴われる。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)、ヨモギ属が優勢で、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科などが伴われる。また、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科も認められた。

VI a層では、樹木花粉の占める割合が約40%と減少し、草本花粉の割合が高くなる。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)が大幅に増加し、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属も増加している。樹木花粉では、スギが増加し、トチノキは大幅に減少している。

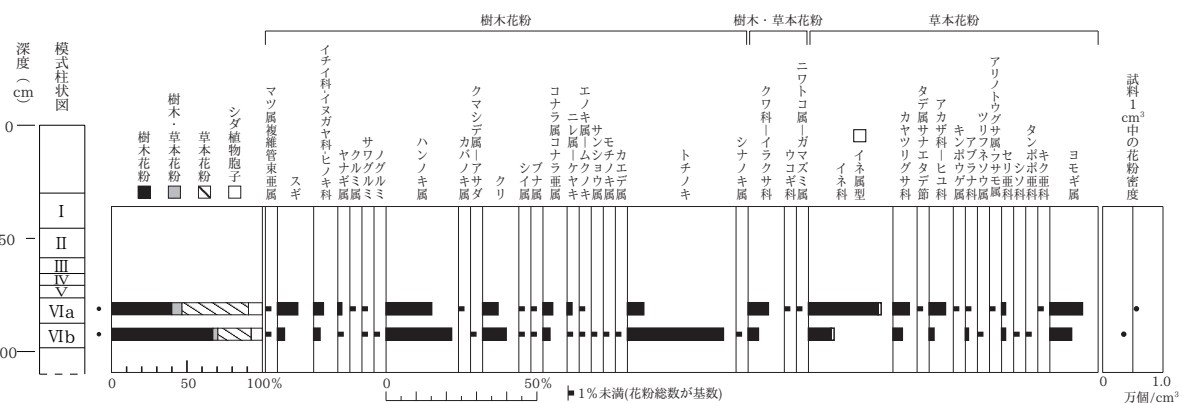
D 花粉分析から推定される植生と環境

下位のVI b層の堆積当時は、周囲にハンノキ属の湿地林やトチノキなどの水辺林が分布しており、遺跡周辺にはクリ、ナラ類(コナラ属コナラ亜属)などの落葉広葉樹林、およびスギ林などが分布していたと考えられる。また、森林の縁辺部などにはイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類が生育していたと推定される。なお、少量ながらイネ属型が認められることから、周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

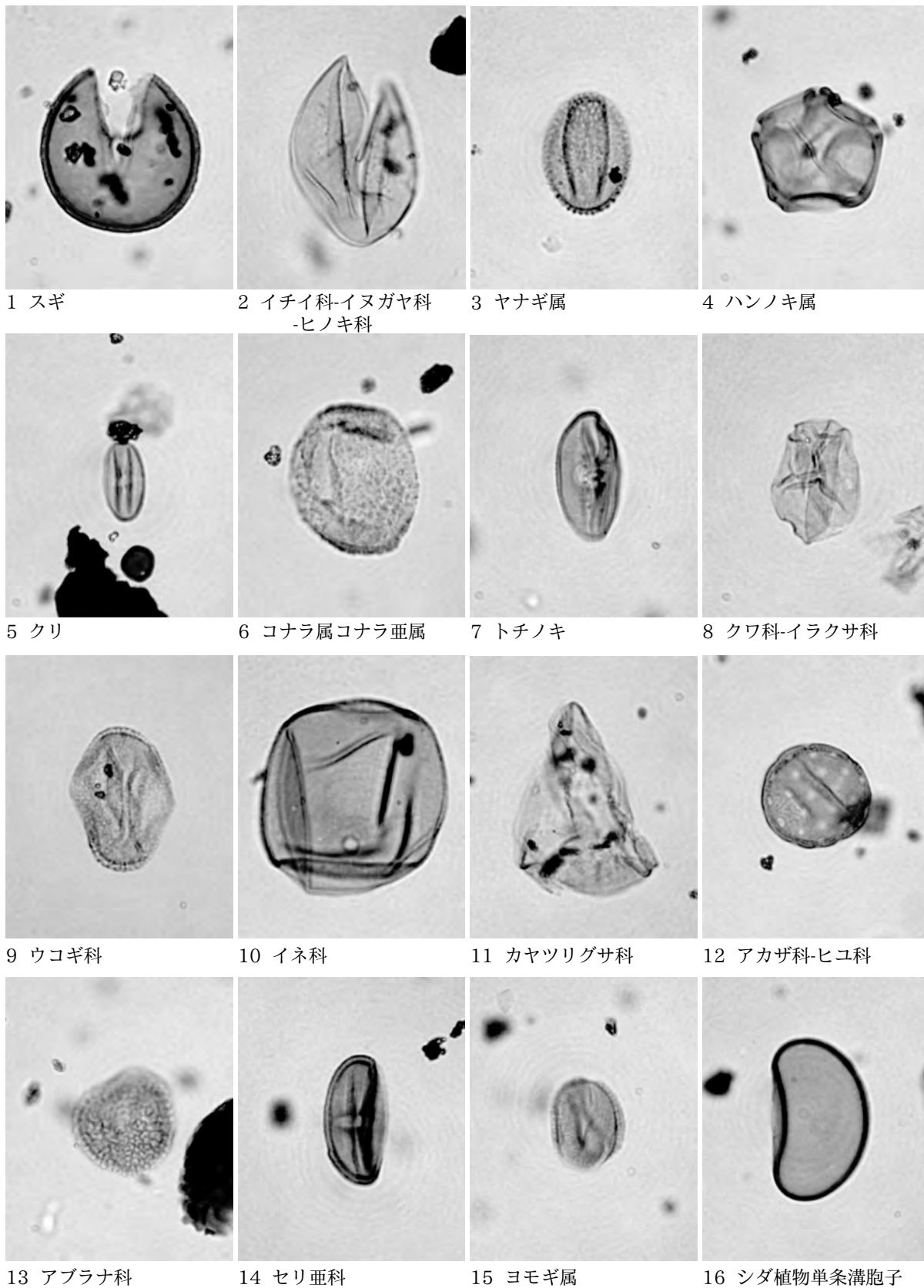
VI a層の時期には、おもにイネ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科などの草本類が生育していたと考えられ、トチノキなどの水辺林は大幅に減少したと推定される。また、少量ながらイネ属型が認められることから、周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

第3表 遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	基本層序 F	
			13D5-10グリッド	VI a層 VI b層
Arboreal pollen		樹木花粉		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	3	1
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	25	9
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	12	8
<i>Salix</i>		ヤナギ属	5	1
<i>Juglans</i>		クルミ属	1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ	1	2
<i>Platycarya strobilacea</i>		ノグルミ		1
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	56	84
<i>Betula</i>		カバノキ属	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ		1
<i>Castanea crenata</i>		クリ	19	30
<i>Castanopsis</i>		シイ属	1	2
<i>Fagus</i>		ブナ属	1	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	12	9
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	6	3
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	1	1
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属		1
<i>Ilex</i>		モチノキ属		1
<i>Acer</i>		カエデ属		1
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	20	123
<i>Tilia</i>		シナノキ属		1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	25	13
Araliaceae		ウコギ科	1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	1	
Nonarboreal pollen		草本花粉		
Gramineae		イネ科	86	29
<i>Oryza type</i>		イネ属型	2	4
Cyperaceae		カヤツリグサ科	20	12
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタ節	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	20	6
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属	1	
Cruciferae		アブラナ科	3	4
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属		3
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属-フサモ属	1	
Apiodeae		セリ亜科	5	5
Labiatae		シソ科		1
Lactucoeidae		タンポポ亜科		1
Asterodeae		キク亜科	2	
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	40	28
Fern spore		シダ植物胞子		
Monolate type spore		単条溝胞子	31	22
Trilate type spore		三条溝胞子	7	9
Arboreal pollen		樹木花粉	164	281
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	27	13
Nonarboreal pollen		草本花粉	181	93
Total pollen		花粉総数	372	387
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	5.6	3.5
			×10 ³	×10 ³
Unknown pollen		未同定花粉	7	20
Fern spore		シダ植物胞子	38	31
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	(-)	(-)



第10図 基本層序Fにおける花粉ダイアグラム



— 10 μm

第11図 花粉・孢子

第Ⅶ章 総 括

第 1 節 萱免遺跡の遺構について

萱免遺跡では土坑 4 基、性格不明遺構 4 基、溝 4 基、小土坑 3 基が検出されている。遺構からの出土遺物はいずれも 8 世紀中葉から 9 世紀前葉の時間幅（第Ⅶ章第 2 節参照）を持つが、遺構間で明確な時期差は認められない。従って、ある程度限定される期間内に形成されたものと考えられる。特に遺構確認面がⅥ層中である SK3・SK4・SX1 の出土遺物と、Ⅶ層が遺構確認面であるその他の遺構からの出土遺物をみてもはっきりとした時期差はみられなかった。このことはⅥ層が、比較的短期間で堆積したとも言えるのではなかろうか。

全遺構のうち切り合いが認められたものは SK3 と SK4 のみであり、SK3 を SK4 が切っている。この重複関係については確実な前後関係は判明しているが、遺物からはそれほどの時間差があるものとは認められず、短期間で形成されたものと思われる。

性格不明遺構には大小の規模がある。大形のもの SX6 と SX10 である。いずれも調査区外に伸びるため全貌は不明である。両者ともこの遺構に伴うような小土坑は認められず、また何らかの付属する施設のようなものも認められなかった。遺物量は全遺構の中で SX6 が最多である。

溝については、いずれの溝も東西方向に伸びている。主軸方向と遺物からみてもほぼ同期内の遺構であろう。また、調査区内でこれらの溝と対応する溝が検出されていないことから、北に曲がるという事はない。東側に直進する形で溝が伸びるか、南側に曲がるか、途中で止まるかのいずれかであろうが、調査区外のため正確には不明である。

遺構全体をみると第Ⅳ章第 3 節でも述べたが、10D・10E・11D・12D・13D グリッドのやや標高の高い所に遺構が多く分布している。包含層の小グリッド別遺物重量分布図（第 12 図）で見ると、調査区東側の標高 3.7m 以下の所や、調査区南側の標高 3.5m 以下の所では遺物はほとんどみつからない。このことから標高のやや高い所を中心に生活していた事が窺える。しかし、一方では同じ標高前後であっても東側の 10F グリッド付近では遺構が分布していない。一概には言えないが、東側は遺跡の端付近を示しているのかもしれない。また、自然科学分析の結果（第Ⅵ章第 1・2 節参照）から、周辺での稲作の可能性や、水辺林や湿地などの存在についても報告があり、標高の低い方や、調査区東側は稲作を行なっていたために遺構が形成されなかった、もしくは森林あるいは湿地帯が広がっていたとも考えられるが、推測の域を出ない。

今回の調査では明確な建物跡といえる遺構は確認できなかった。また、井戸など生活に必要な遺構も確認されていない。調査区が狭く全容を知る事はできなかったが、遺構の種類や分布、遺物の分布から集落域の一部と考えられる。

第 2 節 萱免遺跡の奈良・平安時代の土器について

発掘調査によって、小面積ではあるが豊富な遺物が出土した。本稿では周辺地域の土器編年を参考にして、萱免遺跡出土土器の編年的位置を示す。遺構の一括遺物は、残念ながら現代の建造物による攪乱や調査面積の制約から有用のものは少ない。その中から比較的遺物量が豊富であった SX6 を取り上げて器種構成および食膳具の法量について第 12・13 図に示した。SX6 は長軸 3.71m で遺構の約半分が調査区外にのび、復元される形状は隅丸方形あるいは楕円と考えられる。遺物の出土層位は、4 層に分層されるうちの最上層である 1 層からの出土

が多い。堆積状況はレンズ状に堆積する自然堆積と考えられ、遺構埋没の最終段階で遺棄された遺物が大部分である。

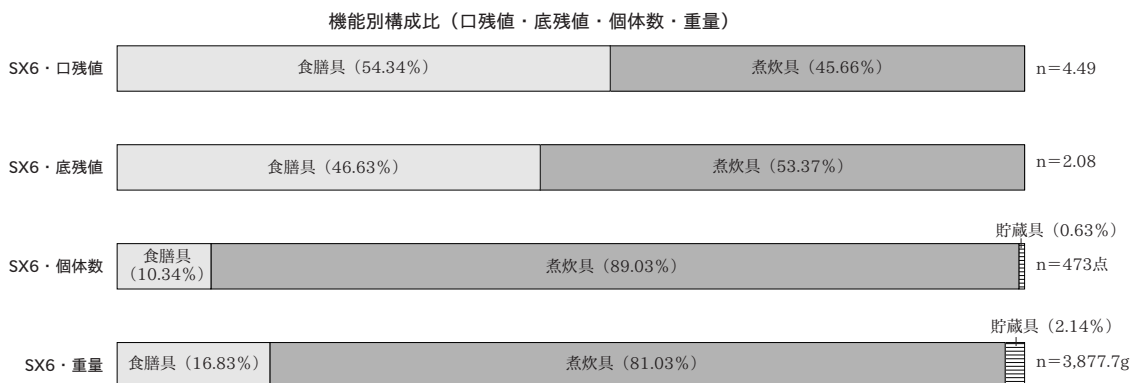
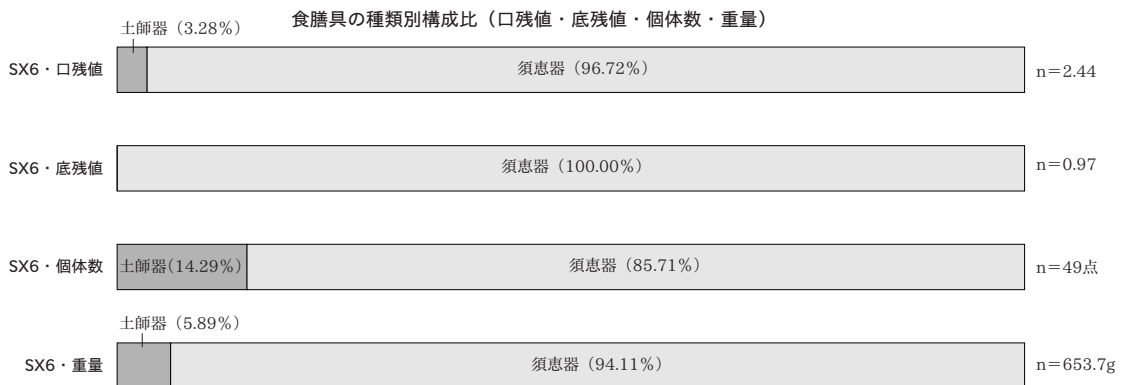
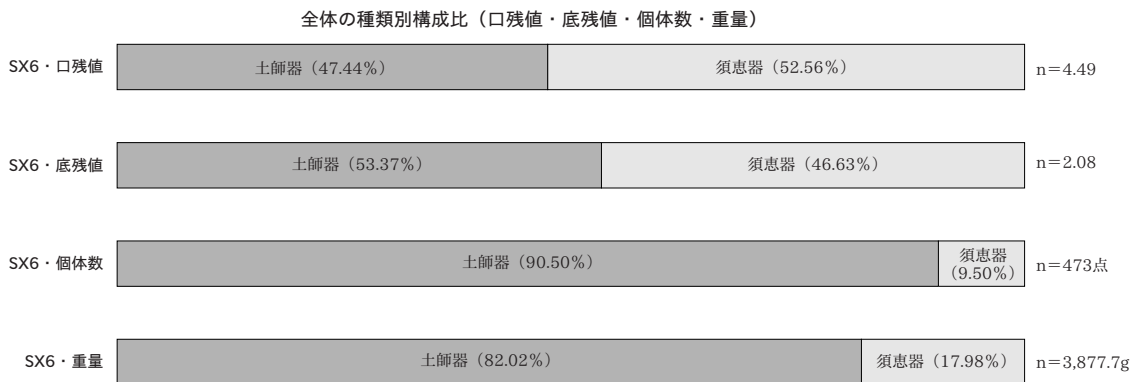
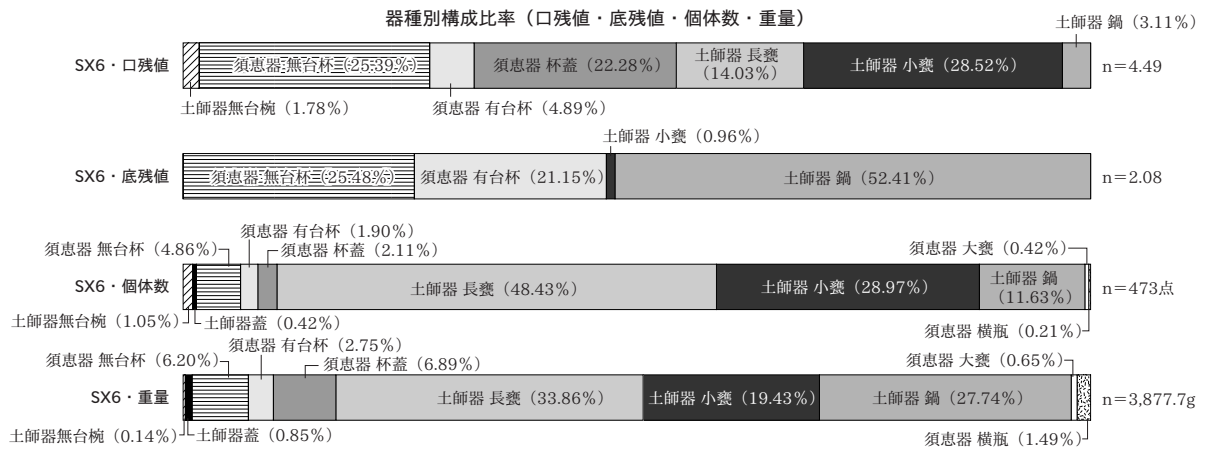
第12図に示した構成比率は、SX6の口縁部残存率を基本に、参考のために底部残存率・個体数・重量を示した。器種別構成比率を見ると土師器蓋、須恵器大甕・横瓶は口縁部片が無いいため、口縁部残存率には反映されない。食膳具は須恵器無台杯・有台杯・杯蓋の比率が高く、合わせて口縁部残存率で52.56%と全体の半分強の比率を占める。煮炊具は長甕・小甕・鍋が口縁部残存率で47.44%を占め全体の半分弱の比率である。食膳具には一部に磨耗痕が、煮炊具の多くにはスス・コゲなどの使用痕が残り、実際使用されている。土器焼成遺構の遺物ではない。食膳具の中でも種類別構成比は須恵器が口縁部残存率で96.72%と土師器に比べて非常に高いのが特徴的である。包含層出土の食膳具でも同様の傾向を示している。図化できた土師器無台碗が2点、黒色土器無台碗が1点しかなく、それ以外は須恵器である。このことは、時期的な特徴を現しているものと考えられる。出土した須恵器の胎土は全器種ともにC群の新津丘陵産に限定される。

次に8・9世紀編年研究について振り返ると新潟県下越地方では、坂井秀弥氏、春日真実氏などにより編年案が示されている〔坂井^{ほか}1989、坂井1994、春日^{ほか}2004、春日1999・2005など〕。萱免遺跡近隣の地域では9世紀代の編年を中心に筆者や渡邊朋和氏、春日氏などによって検討されている〔立木^{ほか}1999、渡邊^{ほか}2001、春日^{ほか}2003aなど〕。その中でも、近年では須恵器産地別の遺跡での出土動向が、編年の鍵となっている〔春日2005〕。以下に、新津丘陵産須恵器の出土動向についてまとめる。

新津丘陵産の須恵器は秋葉区長沼遺跡〔渡邊1991〕出土の7世紀第4四半世紀から8世紀第2四半世紀¹⁾の須恵器が新津丘陵産の可能性が示されており〔春日1995〕、対応する窯跡は未発見であるが、このころに生産が開始されたと考えられる。春日氏の編年〔春日1999〕ではⅡ2期～Ⅲ2期（以下、春日○期と記す）である。新津丘陵周辺で調査されている窯跡では8世紀代第2～3四半世紀頃（春日Ⅳ1期）には五泉市山崎窯跡〔川上1981〕が比定されている〔春日1999〕。それ以降については公表された資料が少なく、窯跡資料については不明瞭な点が多い。新津丘陵近隣平野部の集落遺跡の調査成果で新津丘陵産の須恵器の出土傾向を確認すると、長沼遺跡以降の春日Ⅳ期の資料は五泉市新保北遺跡〔野水^{ほか}2003〕で出土している。8世紀第3四半世紀から9世紀第1四半世紀頃（春日Ⅳ2・3期）が主体である。須恵器は新津丘陵産の須恵器が大部分である。この時期から全県的に佐渡産の須恵器が流入しているが、新津丘陵近隣では明確に確認できない²⁾。次に秋葉区沖ノ羽遺跡〔細野^{ほか}2002、春日^{ほか}2003a〕では9世紀第1～2四半世紀頃のⅤ1期には新津丘陵産の須恵器が定量を占め、佐渡産も多く流入している。続く、9世紀第2四半世紀頃のⅤ2期には、須恵器産地の比率は佐渡産が新津丘陵産に若干勝る状況である。同じくⅤ2期の秋葉区細池寺道上遺跡〔渡邊^{ほか}2001〕では、土師器生産地に近く食膳具に占める須恵器の割合が少ないが須恵器の比率は佐渡産に比べて、若干新津丘陵産が多い程度である。続く9世紀第3・4四半世紀頃（春日Ⅵ1～3期）の秋葉区中谷内遺跡〔立木^{ほか}1999〕では須恵器食膳具は佐渡産が多数を占め、新津丘陵産あるいは阿賀北産が少数含まれる。10世紀代に入ると、秋葉区沖ノ羽遺跡〔立木・澤野・八藤後^{ほか}2008〕のうち2004年度調査区1区では10世紀第1四半世紀頃（春日Ⅶ1期）には食膳具では須恵器が少量となり、その中でも産地はほとんどが佐渡産となり貯蔵具を除いて新津丘陵産はほとんど確認できない。

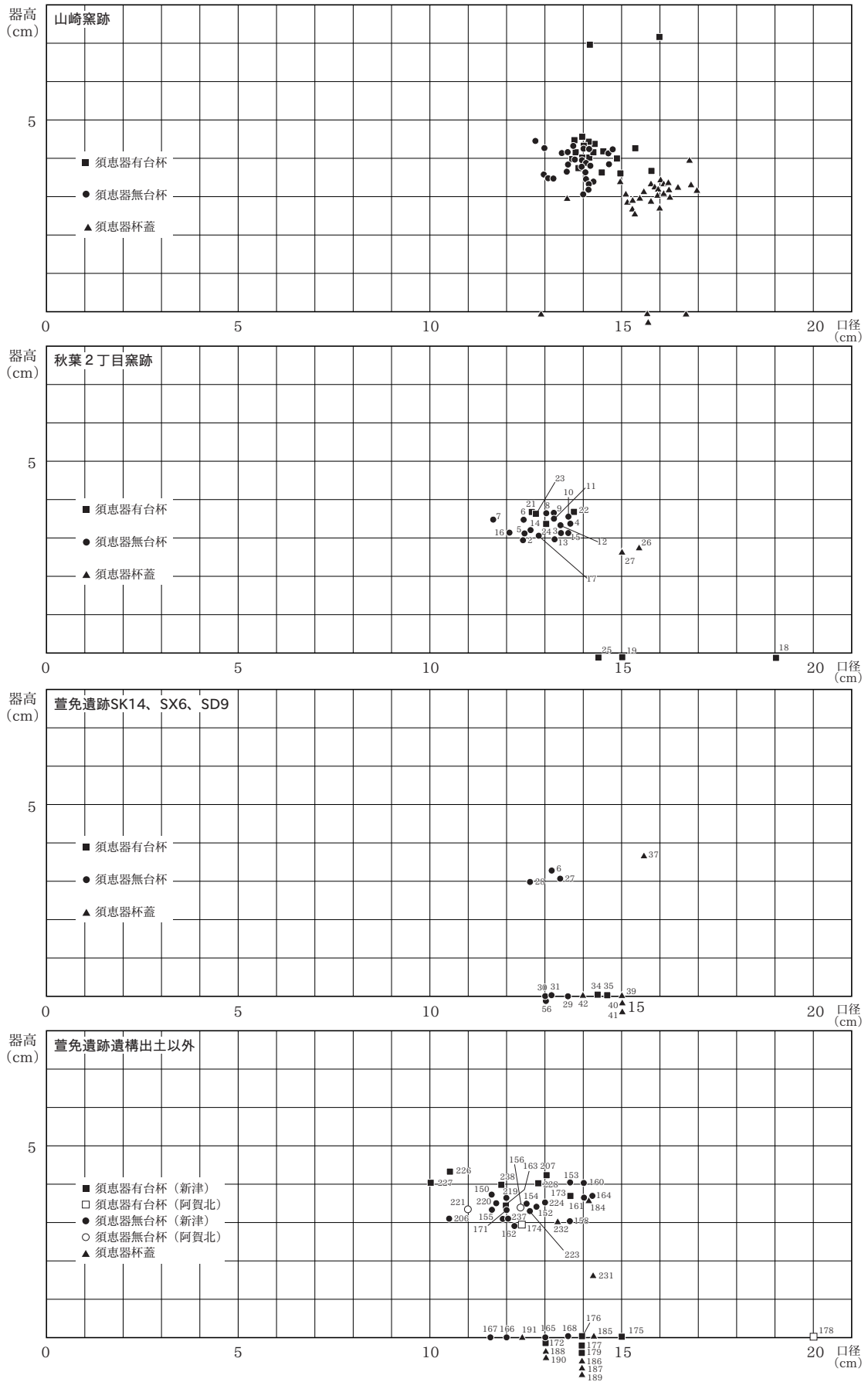
以上に、新津丘陵産須恵器の出土動向を網羅的に見てきたが、まとめると7世紀第4四半世紀（春日Ⅱ2期）に生産が開始され、8世紀第3～4四半世紀（春日Ⅳ1期）から9世紀第2四半世紀（春日Ⅴ2期）までが生産のピークであると考えられる。ただし、8世紀第4四半世紀（春日Ⅳ3期）から流入が予想される佐渡産須恵器の比率が9世紀第1～2四半世紀（春日Ⅴ1期）から徐々に増し、9世紀第3四半世紀（春日Ⅵ1期）には佐渡産須恵器が大勢を占め、10世紀第1四半世紀（春日Ⅶ1期）には新津丘陵産須恵器は生産を中止あるいは極小規模の生産が行われ、終焉を迎えていく。

では、萱免遺跡の時期的な位置付けであるが、SX6出土遺物に代表されるように、食膳具に須恵器の比率が高く土師器の比率が非常に寡少な点に注目したい。春日Ⅴ1期には土師器無台碗が秋葉区沖ノ羽遺跡〔細野^{ほか}



第 12 図 萱免遺跡 SX6 器種組成・種類別構成・機能別構成図

第2節 萱免遺跡の奈良・平安時代の土器について



第13図 山崎窯跡、秋葉2丁目窯跡、萱免遺跡出土食膳具の量分布図

2002)などで定量確認でき、おそらく時代が古くなるほど土師器の食膳具の出土量が減少することを考慮に入れば、萱免遺跡のほうが古いといえよう。さらに、須恵器の産地は新津丘陵産がほとんどで、一部阿賀北産があるが佐渡産は皆無であることも萱免遺跡の方が沖ノ羽遺跡などより古いと位置付けられる理由となる。この2点のことから、春日Ⅴ1期以前の可能性が高くなる。次に須恵器食膳具の法量分布を確認する(第13図)。対象とした遺跡は山崎窯跡〔川上1981〕と、本書に掲載した秋葉2丁目窯跡と萱免遺跡出土遺物である。山崎窯跡の須恵器食膳具のうち特徴的なのは、口径15～17cm前後の杯蓋が多量に出土している点である。おそらくこれに対応する有台杯の存在も予想され、明らかに他に比べて大形の法量のものが定量存在する。また、無台杯も13～15cmの法量が多い。器高は3～5cmにおさまるが、4cm以上の背高の資料が定量確認できる。それに対して今回図化した秋葉2丁目窯跡資料³⁾は、有台杯の口径が12～13cmのものと14～15cm前後のものと19cmの大形のものが1点のみであり、中でも、小形品の多さが目立つ。さらに無台杯は12cm前後から14cmまでの幅でおさまり、明らかに山崎窯跡よりも小形化の傾向が見て取れる。山崎窯跡は春日Ⅳ1期に対比されており〔春日1999〕、秋葉2丁目窯跡はそれ以降の時期であろうと考えられる。春日Ⅲ期からⅣ期の3段階区分(春日Ⅳ1～3期)への変化は須恵器杯類の「口径の縮小傾向にある」〔春日1999〕と説明されている。これに当てはめるとおそらく、秋葉2丁目窯跡資料は山崎窯跡より後出的な傾向が読み取れる。さらに時期を限定すれば金属器模倣形態の須恵器が確認されることと、春日Ⅴ期には見られない大形の杯類が残存することから春日Ⅳ2期が主体で、一部Ⅳ3期まで下ると考えられる。このことを定点として萱免遺跡出土遺物の編年的位置を考えると、第13図の法量分布図に示したとおり口径15cm以上の杯蓋が1点と20cmの有台杯が確認できるが、概ね15cm以下である。無台杯は11.5～14cm前後におさまるものが多く、小形のものが目立つ。このことから秋葉2丁目窯跡の様相に近く、先に述べた佐渡産の須恵器の欠如などからⅣ2あるいは3期、一部小形の有台杯(226・227)はⅤ1期に位置付けられると考える。また、他の器種から考えても赤彩土器の高盤の存在や、土師器鍋の底部近くの処理がハケメとケズリによって成されることなどは春日Ⅴ期以前の特徴と考えられ、その時期とすることを支持しよう。また、SX6は中でも須恵器無台杯の中に薄手のもの(27)が確認できることから春日Ⅳ3期としておきたい。

第3節 萱免遺跡の性格

萱免遺跡からは、調査面積の制約から明確な住居跡は未検出であるが、調査面積に対して大量の土器が出土していることから、集落の一部であったと考えられる。また、自然科学分析の結果、稲藁が遺構内から多量に検出され、近隣での稲作が予想される。調査区南側に向かって低湿地化しておりこちらの方向に水田が広がる可能性が高い。また遺跡からは焼歪みや焼成不良の須恵器食膳具が出土している。明らかに使用痕の残る須恵器を利用しており、普通の集落遺跡出土須恵器と傾向が異なる。このことは、萱免遺跡が窯跡から近く土器が無選別の状態で搬入されたか、住民が須恵器窯経営に直接的に係わっており、出荷できない二級品を自家使用したかの2点の可能性がある。それは、遺跡近隣を流れる能代川を用いた須恵器・土師器の内水面交通を利用した物流〔坂井1996〕と共に大いに問題となる。

注

- 1) 実年代は、近年の春日真実氏の年代観〔春日ほか2008〕に従った。
- 2) 春日真実氏の論考〔春日2005〕によると、聖籠町山三賀Ⅱ遺跡SI339、長岡市下ノ西遺跡SK504・SB71、今池遺跡SD321など、春日Ⅳ3期の遺構から佐渡産須恵器有台杯・無台杯が出土しており、概ね8世紀第4四半世紀以降に全県的に本州側に流入していることが確認できる。
- 3) 本書では秋葉2丁目窯跡資料として36点図化した。時間的な都合で悉皆的な調査はできなかったが、概ね器種の・法量的な偏りがないように選択を行い、出土遺物の傾向が抽出できたと考えている。

引用・参考文献

- ア 朝岡政康 2008 『結七島遺跡Ⅳ 第13・15・17次調査－荻川駅東土地区画整理事業に伴う結七島遺跡第7～9次発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会
- 甘粕 健・川村浩司^{ほか} 1992 『古津八幡山古墳Ⅰ 1991年測量調査報告書』 新津市教育委員会
- イ 諫山えりか 2007 『居屋敷跡遺跡 第3次調査－県営地盤沈下対策事業新潟南部5期地区沢海揚水機場建設事業に伴う居屋敷跡遺跡第3次発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会
- 石川智紀^{ほか} 1994 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅰ (A地区)』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤 崇 1998 『松山窯跡 新潟県北蒲原郡黒川村大字塩沢地内における古代窯跡の発掘調査報告書』 黒川村教育委員会
- 伊藤秀和 2001 『鬼倉遺跡－国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書－』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2005 『馬越遺跡－国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書－』 加茂市教育委員会
- 今井さやか 2007 『日水遺跡 第3次調査－鍋田土地区画整理事業に伴う日水遺跡発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会
- ウ 植田 真・遠竹陽一郎^{ほか} 2003 『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 新津市教育委員会
- 潮田憲幸 2008 『諏訪畑遺跡 第3次調査－老人健康保険施設「秋葉の郷」建設にともなう発掘調査報告書－』 新津市教育委員会
- 内堀信雄 1988 「須恵器甕に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1994 「一郡一窯体制について」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- オ 小田由美子^{ほか} 2006 『上越自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅥ 滝寺古窯跡群 大貫古窯跡群』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- カ 柿田祐二 2001 「須恵器甕の叩き目から」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会』第8号 新潟考古学談話会
- 春日真実 1995 「越後・佐渡における8世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997a 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1999 「第4章古代 第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院
- 春日真実 2003a 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅲ (C地区)』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2003b 「消費遺跡出土佐渡小泊産須恵器のロクロ回転方向－越後出土の資料を中心に」『研究紀要』第4号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について－「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に－」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 春日真実^{ほか} 1996 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 江内遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実^{ほか} 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 春日真実^{ほか} 2008 『一般国道8号糸魚川バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 六反田南遺跡・前波南遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・笹澤正史 1999 「越後・佐渡の様相」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 加藤 学・荒川隆史 1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川上貞雄 1981 『山崎須恵窯跡』 五泉市教育委員会
- 川上貞雄 1982 『中の山遺跡発掘調査報告書』 亀田町教育委員会
- 川上貞雄・遠藤孝司 1983 『平遺跡緊急発掘調査報告書』 新津市教育委員会

- 川上貞雄 1992 『川口甲遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 川上貞雄 1994 『八幡山遺跡Ⅰ 遺構編』 新津市教育委員会
- 川上貞雄 1995 『舟戸遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 川上貞雄 1996 『金津丘陵製鉄遺跡群 居村B・D地区』 新津市教育委員会
- 川上貞雄 1997 『上浦A遺跡 新津市工業団地第2期工事地内発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 川上貞雄・木村宗文・鈴木郁夫 1989 『新津市史』資料編第1巻 原始・古代・中世 新津市
- キ 北野博司 1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 北村 淳・菊池康一郎ほか 2004 『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 木村宗文 1989 「資料解説—古代越後国と蒲原郡」『新津市史』資料編第1巻 原始・古代・中世 新津市
- コ 小池義人ほか 1994 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 細池遺跡 寺道上遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林 存 1952 『新津市誌』 新津市
- 古山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』 農林水産技術会議事務所監修
- サ 坂井秀弥 1988a 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通—8～10世紀を中心として—」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥 1988b 「古代のごはんは蒸した『飯』であった」『新潟考古学談話会会報』第2号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1989a 「第七章まとめ 2 奈良・平安時代の土器」『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟県国道工事事務所
- 坂井秀弥 1989b 「北陸型土器器長甕の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1990a 「山三賀Ⅱ遺跡からみた阿賀北地方の古代土器」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1990b 「古代ロクロ土器器長甕の二系譜と須恵器との関係」『新潟考古学談話会会報』第6号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1994 「庁と館、集落と屋敷—東国古代遺跡における館の形成—」『城と館を掘る・読む—古代から中世へ—』山川出版社
- 坂井秀弥 1996 「水辺の古代官衛遺跡—越後平野の内水面・舟運・漁業」『越と古代の北陸』 名著出版
- 坂井秀弥 1999 「第四章古代 第1節総論」『新潟県の考古学』 高志書院
- 坂井秀弥ほか 1984 『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟県国道工事事務所
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂上有紀 2003 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 上浦遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笹澤正史 1998 「Ⅷ.付編 高田平野における平安時代前半期の食膳具について」『保坂遺跡発掘調査報告書』 上越市教育委員会
- 笹澤正史 2001 「須恵器瓶類の口縁頸部接合痕跡」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 笹澤正史ほか 1997 『保坂遺跡発掘調査報告書』 上越市教育委員会
- セ 関 雅之 1990 「古代細型管状土鍾考」『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
- タ 高野裕子・渡邊朋和 2003 『川口乙遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 田嶋明人 1986 「考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田中一廣・丹下昌之ほか 2004 『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 新津市教育委員会
- 田中 靖 1996 『門新遺跡 外割田地区』 和島村教育委員会
- 田中 靖ほか 1995 『門新遺跡』 和島村教育委員会
- ツ 立木宏明・渡邊朋和ほか 1998 『細池遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明ほか 1999 『中谷内遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明ほか 2000 『川根遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明・高野裕子ほか 2002 『内野遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子ほか 2003 『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 新津市教育委員会

- 立木宏明・澤野慶子^{ほか} 2004a 『愛宕澤遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子^{ほか} 2004b 『山王浦遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子^{ほか} 2005 『沖ノ羽遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 新津市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子・八藤後智人^{ほか} 2008 『沖ノ羽遺跡Ⅳ 第15次調査－県営圃場整備事業（担い手育成型）満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第8次発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- ト 土橋由理子^{ほか} 1999 『国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 牛道遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 中川成夫・倉田芳郎 1956 『新津田家七本松須恵器窯跡発掘調査報告書』 北方文化博物館
- 長澤展生^{ほか} 2002 『無頭遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- ニ 新潟古代土器研究会 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』
- 新潟市国際文化歴史文化課 2007 『新新潟市史双書2 新潟市の遺跡』 新潟市
- 新潟市史編さん原始古代中世史会 1994 『新潟市史』資料編1 原始古代中世 新潟市
- ノ 野水晃子^{ほか} 2003 『能代川関係発掘調査報告書Ⅰ 新保北遺跡』 五泉市教育委員会・(株)吉田建設
- フ 藤塚 明・小池邦明・渡邊朋和 1982 『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』 新潟市教育委員会
- 古庄浩明^{ほか} 2003 『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 新津市教育委員会
- ホ 星野信明^{ほか} 1996 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅱ (B地区)』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細野高伯^{ほか} 2002 『沖ノ羽遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- ヤ 山崎 天 1999a 『橋田B遺跡』 五泉市教育委員会
- 山崎 天 1999b 『小実山遺跡』 五泉市教育委員会
- ヨ 吉井雅勇^{ほか} 1999 『元山窯跡群 平成9・10年度町内遺跡試掘確認調査報告書』 荒川町教育委員会
- 吉井雅勇^{ほか} 2002 『鴨侍遺跡－一級河川乙日川(烏川工区)統合一級河川整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 荒川町教育委員会
- 米沢 康 1965 「大化前代における越の史的位罫」『信濃』17-1 信濃史学会
- 米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32-6 信濃史学会
- ワ 渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1994a 『八幡山遺跡発掘調査報告書－平成5年度範囲確認調査－』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1994b 『平成5年度 新潟市内遺跡確認調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1999 「第4章第4節第3項製鉄」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 渡邊朋和^{ほか} 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 居村遺跡E・A・C地点、大入遺跡A地点』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和^{ほか} 1998 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ(分析・考察編)』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和^{ほか} 2001 『寺道上遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和^{ほか} 2002 『中谷内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明^{ほか} 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明^{ほか} 2004 『八幡山遺跡群発掘調査報告書－第11・12・13・14次調査－』 新津市教育委員会

第VI章 引用・参考文献

- カ 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法』 角川書店 p.248-262
- シ 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』 60p
- ス 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社 p.189-213
- ナ 中村 純 1973 『花粉分析』 古今書院 p.82-110
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として」『第四紀研究』13 p.187-193
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p.21-30
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p
- フ 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17 p.73-85

図版 No.	報告書 No.	遺構名	出土位置 グリッド	層位	種別	器種	分類	法量 (cm)			底径 指数	底径 指数	状態	胎土 含有物	産地	色調	焼成	手法				遺存率 全体	付着物		時期	備考	
								口径	底径	高さ								外面	内面	底部	口縁部		内面	外面			
21	152	10E23		VI	須臾器	無台杯	A II	12.8	7.6	3.4	27	59	普通	石・長・白	新津 明青灰 (5B7/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		6/36	16/36	14/36			IV 2-3	
21	153	10E23		VI	須臾器	無台杯	A II	13.6	8.6	4.0	29	63	普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	18/36	24/36	23/36			IV 2-3	
21	154	13D10		VIa	須臾器	無台杯	B I	12.5	6.4	3.8	28	51	普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ヘラ切り	右	8/36	36/36	28/36			IV 2-3	体部下半から底部と内面中央磨耗	
21	155	11D8		VI	須臾器	無台杯	B I	11.6	6.6	3.3	28	57	普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	4/36	15/36	9/36			IV 2-3	次々ヌキ、体部外面へラ記号「 」
21	156	12D13		VI	須臾器	無台杯	B I	12.4	7.8	3.4	27	63	粗	石・長・チ・白	新津 灰白 (5Y7/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		2/36	4/36				IV 2-3	体部下半磨耗
21	157	10E23		VI	須臾器	無台杯	B II	13.0					普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			7/36					IV 2-3	
21	158	12D13		VI	須臾器	無台杯	B II	13.6	8.0	3.0	22	59	普通	石・長・焼・白	新津 不灰白 (7.5YR7/3)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			3/36	7/36	5/36			IV 2-3	
21	159	10E23		VI	須臾器	無台杯	B II	13.6					普通	石・長・白	新津 灰白 (10YR8/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			3/36					IV 2-3	
21	160	12D3		VI	須臾器	無台杯	B II	14.0	7.5	4.0	29	54	普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	6/36	17/36	12/36			IV 2-3	体部下半から底部磨耗
21	161	10D20		VI	須臾器	無台杯	B II	14.0	8.0	3.6	26	57	普通	石・長・白	新津 灰白 (5Y8/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	5/36	12/36	15/36			IV 2-3	人為的打かき、体部下半から底部磨耗
21	162	10D23		VI	須臾器	無台杯	C I	12.2	8.2	2.9	24	67	普通	石・長・焼・白	新津 浅黄緑 (10YR8/3)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		13/36	12/36	13/36			IV 2-3	
21	163	10D20		VI	須臾器	無台杯	C I	12.0	7.2	3.3	28	60	普通	石・長・白	新津 明青灰 5P84/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	3/36	36/36	20/36			IV 2-3	
21	164	10E16		VI	須臾器	無台杯	C II	14.2	9.0	3.7	26	63	粗	石・長・白	新津 浅黄緑 (10YR8/3)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	3/36	9/36	10/36			IV 2-3	
21	165	10E16		VI	須臾器	無台杯	A I	13.0					粗	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			7/36					IV 2-3	
21	166	12D13		VI	須臾器	無台杯	B I	(12.0)					普通	石・長・白	新津 青灰 (5B5/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			1/36					IV 2-3	
21	167	12D3		VI	須臾器	無台杯	B I	11.6					普通	石・長・白	新津 灰白 (10YR7/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36					IV 2-3	灯明皿に転用
21	168	12D24		VI	須臾器	無台杯	B II	13.6					普通	石・長・白	新津 明青灰 (5B7/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36					IV 2-3	
21	169	12D24		VI	須臾器	無台杯			8.0				普通	石・長・白	新津 灰白 (10B6G/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	9/36	36/36	17/36			IV 2-3	内面へラ記号「▽」
21	170	13D9		VI	須臾器	無台杯			7.2				粗	石・長・白	新津 灰白 (5Y8/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	9/36	36/36	16/36			IV 2-3	
21	171	12D24		VI	須臾器	有台杯	B1 I	12.0	7.0	3.4	28	58	普通	石・長・白・海	新津 明青灰 (5B4/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	17/36	11/36	17/36			IV 2-3	体部下半磨耗
21	172	10E23		VI	須臾器	有台杯	B1 II	13.0					普通	石・長・白	新津 灰白 (2.5Y8/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	8/36	16/36				IV 2-3	内面へラ記号
22	173	13D5・14		VI	須臾器	有台杯	B1 II	13.6	9.0	3.7	27	66	普通	石・長・白	新津 明黄灰 (7.5YR7/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		3/36	3/36	6/36			IV 2-3	
22	174	12D9・13D14		VI	須臾器	有台杯	C1 II	12.4	6.0	3.9	31	48	普通	石・長・黄	新津 灰白 (5Y7/1)	還元	ロクロナデ	ケズリ	ヘラ切り		3/36	11/36	9/36			IV 2-3	
22	175	12D24		VI	須臾器	有台杯	B2						普通	石・長・白	新津 明青灰 (5B4/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			2/36					IV 2-3	
22	176	11D8		VI	須臾器	有台杯	B2 II	14.0					普通	石・長・白	新津 明青灰 (5B4/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			3/36					IV 2-3	
22	177	12D9・13D9		VI	須臾器	有台杯	B2 II	14.0					普通	石・長・白	新津 青灰 (5P86/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			8/36					IV 2-3	外面火だすき
22	178	12D24		VI	須臾器	有台杯	C2 III	20.0					普通	石・長・白	新津 青灰 (5B5/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36					IV 2-3	
22	179	12D13		VI	須臾器	有台杯	C2 II	14.0					普通	石・長・白	新津 青灰 (5B5/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			3/36					IV 2-3	
22	180	10E23		VI	須臾器	有台杯	2		8.6				普通	石・長・黄・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	19/36	12/36				IV 2-3	自然磨
22	181	10E17		VI	須臾器	有台杯	1		6.8				普通	石・長・焼・白	新津 青灰 (5P86/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	34/36					IV 2-3	外面へラ記号「//」
22	182	10D20		VI	須臾器	有台杯	2		8.5				普通	石・長・焼	新津 青灰 (5P86/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			8/36					IV 2-3	
22	183	12D13		VI	須臾器	有台杯	1						普通	石・長・白	新津 青灰 (5B5/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ							IV 2-3		
22	184	11D8		VI	須臾器	杯蓋	A2 II	14.0		3.6	26		粗	石・長・チ・白	新津 灰白 (10YR7/1)	還元	ロクロナデ	ケズリ			8/36		10/36			IV 2-3	
22	185	12D24		VI	須臾器	杯蓋	B1 II	14.2					普通	石・長・チ・白	新津 灰白 (5B7/1)	還元	ロクロナデ	ナデ			9/36		12/36			IV 2-3	
22	186	10E23		VI	須臾器	杯蓋	B II	14.0					普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			18/36		16/36			IV 2-3	内面へラ記号「\」
22	187	13D5		VI	須臾器	杯蓋	B II	14.0					普通	石・長・白	新津 灰 (N6/7)	還元	ロクロナデ	ケズリ			5/36					IV 2-3	
22	188	11D13		VI	須臾器	杯蓋	A II	13.0					普通	石・長・白	新津 灰白 (10YR7/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36		1/36			IV 2-3	
22	189	11D3		VI	須臾器	杯蓋	B II	14.0					普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36		2/36			IV 2-3	
22	190	11D9		VI	須臾器	杯蓋	B II	13.0					普通	石・長・白	新津 青灰 (5P86/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			6/36		2/36			IV 2-3	自然磨
22	191	10D19		VI	須臾器	杯蓋	A I	(12.4)					普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			2/36					IV 2-3	自然磨
22	192	12D24		VI	須臾器	大甕		23.0					普通	石・長・白	新津 灰 (N3/7)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			3/36					IV 2-3	焼ブクレ
22	193	10D20		VI	須臾器	大甕							普通	石・長・白	新津 青灰 (5B6/1)	還元	タタキメ	カキメ	Ha	当て具痕						IV 2-3	
22	194	10E16・17・21・23・24		VI	須臾器	大甕							精	石・黄・白	新津 灰白 (7.5Y8/1)	還元	タタキメ		Hc	当て具痕						IV 2-3	
22	195	12D13		VI	須臾器	大甕							精	石・長・白	新津 青灰 (5P81/7/1)	還元	タタキメ		Hc	当て具痕						IV 2-3	
22	196	13D9・14		VI	須臾器	長頸甕		8.1					普通	石・長・白	新津 青灰 (5P86/1)	還元	ロクロナデ	ケズリ	ヘラ切り	右	27/36					IV 2-3	底部へラ記号「*」
22	197	10E23		VI	須臾器	壺蓋	A2	12.4					普通	石・長・白	新津 青灰 (5P86/1)	還元	ロクロナデ	ケズリ			3/36					IV 2-3	自然磨
22	198	10D20		VI	須臾器	壺蓋	B						普通	石・長・白	新津 青灰 (5P86/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ							IV 2-3		
22	199	13D4		VI	須臾器	壺蓋	B	22.0					普通	石・長・白	新津 灰 (N6/7)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			3/36					IV 2-3	
22	200	10D23		VI	須臾器	拵れ鉢		13.0					普通	石・長・チ・焼	新津 灰白 (10YR7/1)	還元	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ	カキメ			3/36			IV 2-3	
22	201	12D24		VI	須臾器	拵れ鉢							普通	石・長・白	新津 灰白 (5Y8/1)	還元	ロクロナデ	カキメ			ロクロナデ	カキメ	ハケメ			IV 2-3	
22	202	13D9		VI	須臾器	拵れ鉢		10.0					普通	石・長・白	新津 灰白 (5Y8/1)	還元	ケズリ			ハケメ			6/36			IV 2-3	
22	203	12D24		VI	須臾器	横腹																					

別表 3 秋葉 2 丁目窯跡古代土器観察表

Table with columns: 図版 No., 報告書 No., 出土番地, 層位, 種別, 器種, 分類, 法量 (cm), 口径, 底径, 器高, 径高指数, 底径指数, 状態, 胎土, 含有物, 産地, 色調, 焼成, 手法 (外面, 内面), 遺存率 (口縁部, 底部, 全体), 付着物 (外面, 内面), 時期, 備考.

別表 4 萱免遺跡土製品・石製品・鍛冶関連遺物観察表

Table with columns: 図版 No., 報告書 No., 遺構名, 出土位置, 層位, 時代, 器種, 石材, 長さ (mm), 幅 (mm), 厚さ (mm), 重量 (g), 備考.

別表 5 萱免遺跡遺構出土古代土器器種構成率

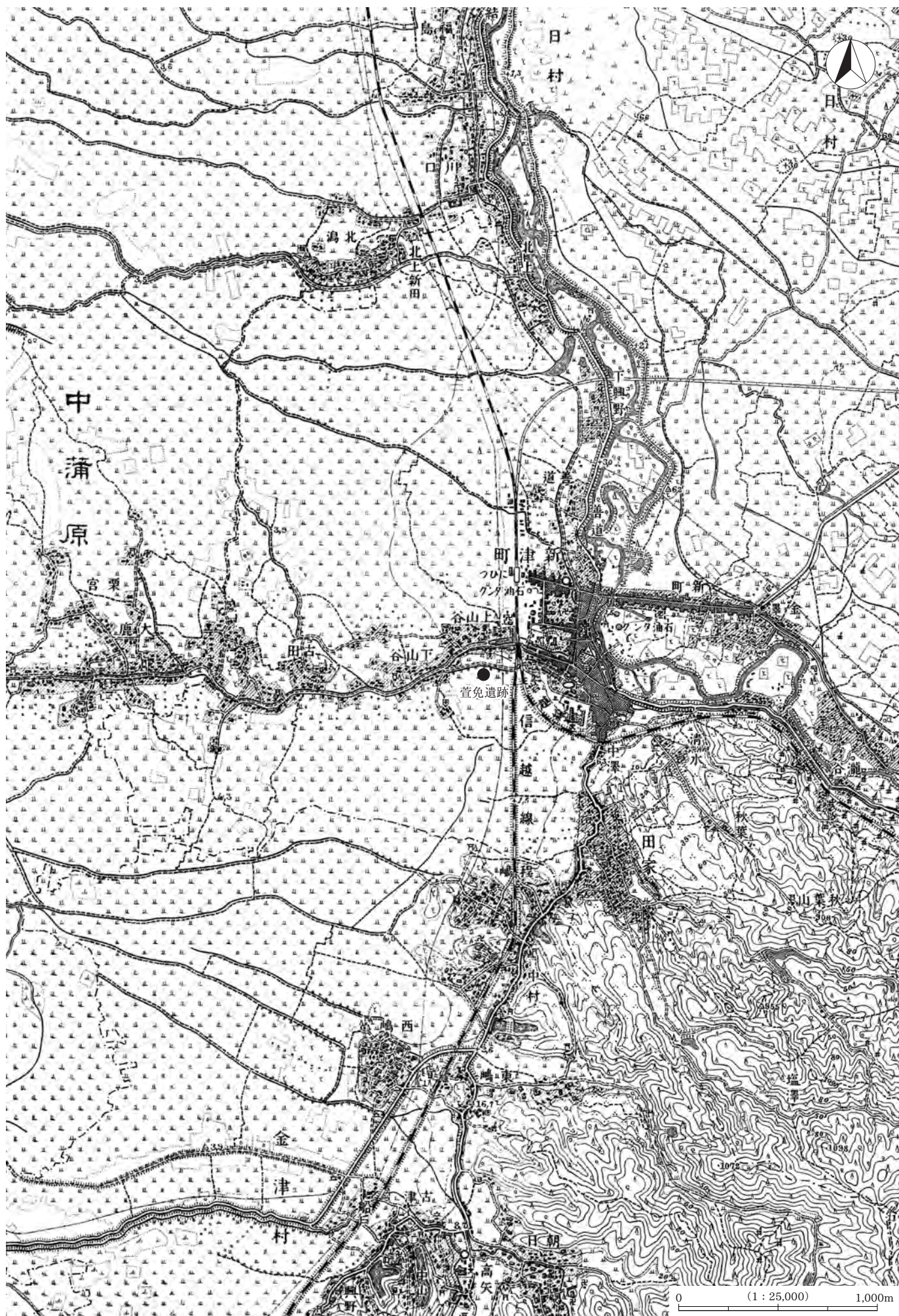
Table showing pottery type composition rates for various sites (SK3, SK4, SK14, SK1, SK6, SK10, SK15, SD9, SD11, SD13, Ph2). Columns include site name, type, and percentage.

1 平安時代の遺構から出土した土器（土製品・黒色土器・青磁器）の構成比率を示した表である。
2 土器の目録別口縁部・底径部・全体（口径100mm・厚さ100mm）をそれぞれ用いた構成比率を示した表である。また、併せて口縁部・底径部を示した。
3 口縁部・底径部比率によって得られた数値は7/36を示し、それぞれ口縁部・底径部・全体を示した。

別表 6 秋葉 2 丁目窯跡出土古代土器点数・重量組成表

Table showing pottery point and weight composition for Akiba 2-chome kiln site. Columns include type, number of points, weight, and percentage.

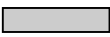

圖 版



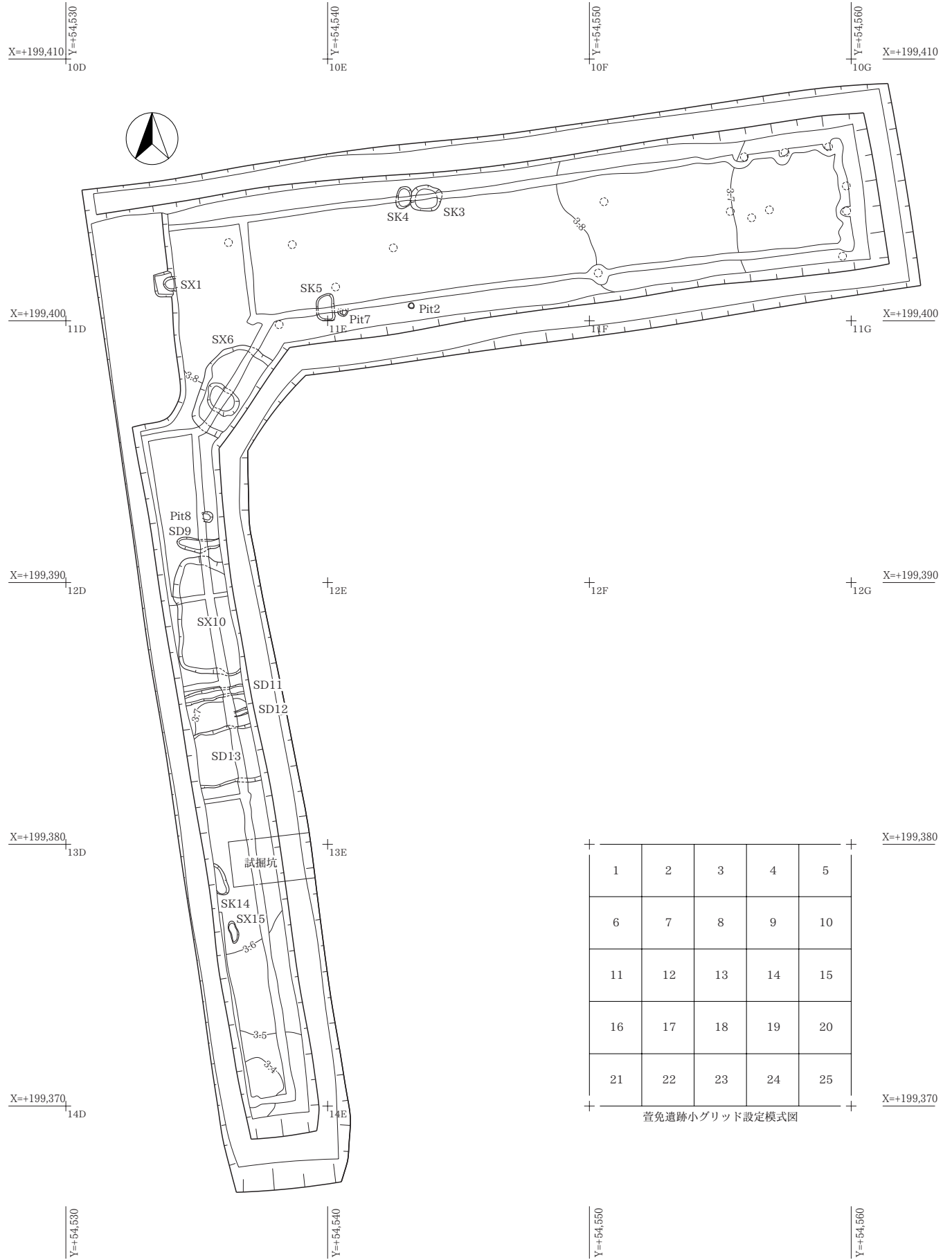




凡例

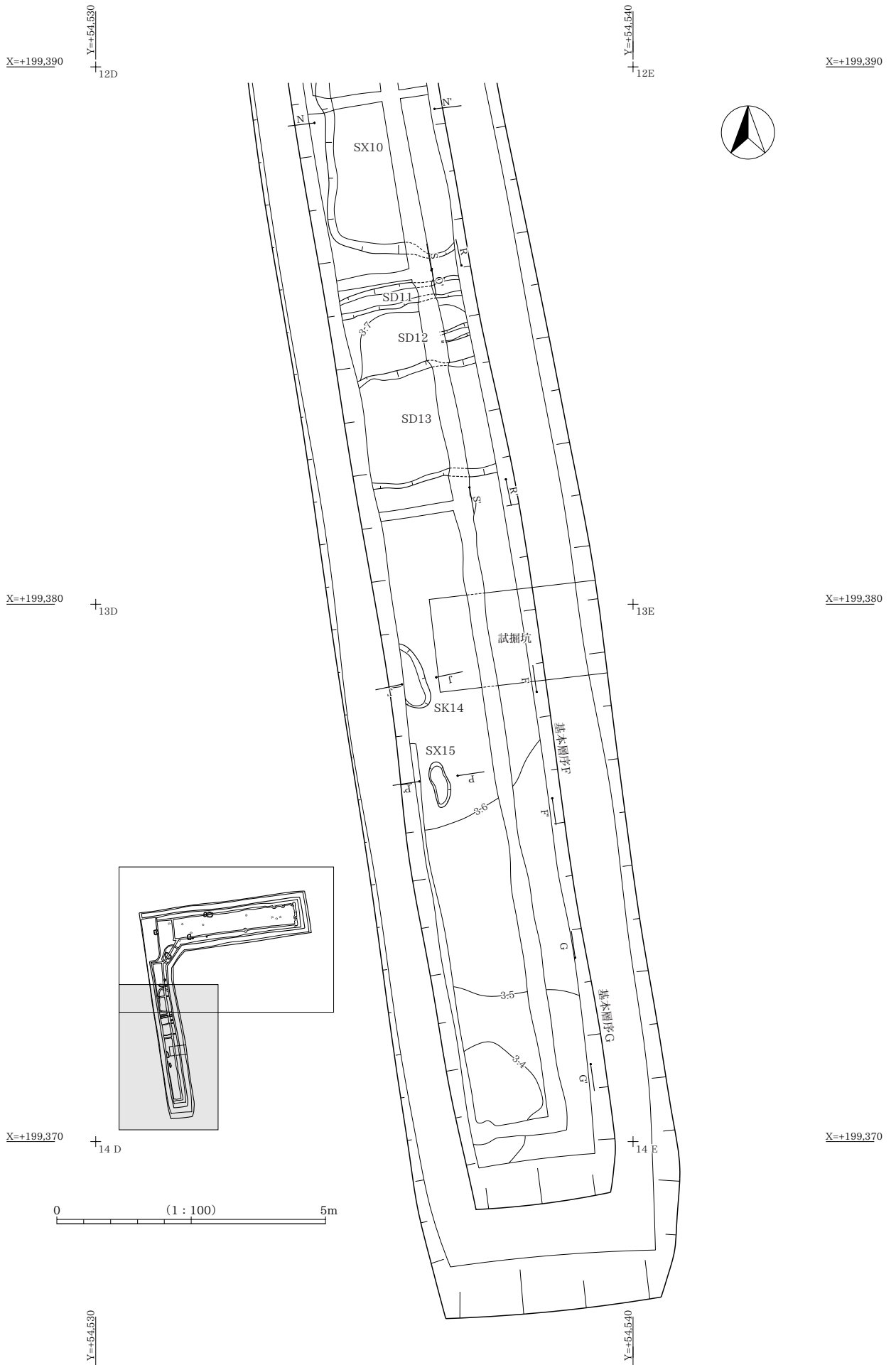
-  発掘調査範囲
-  道路造成計画図

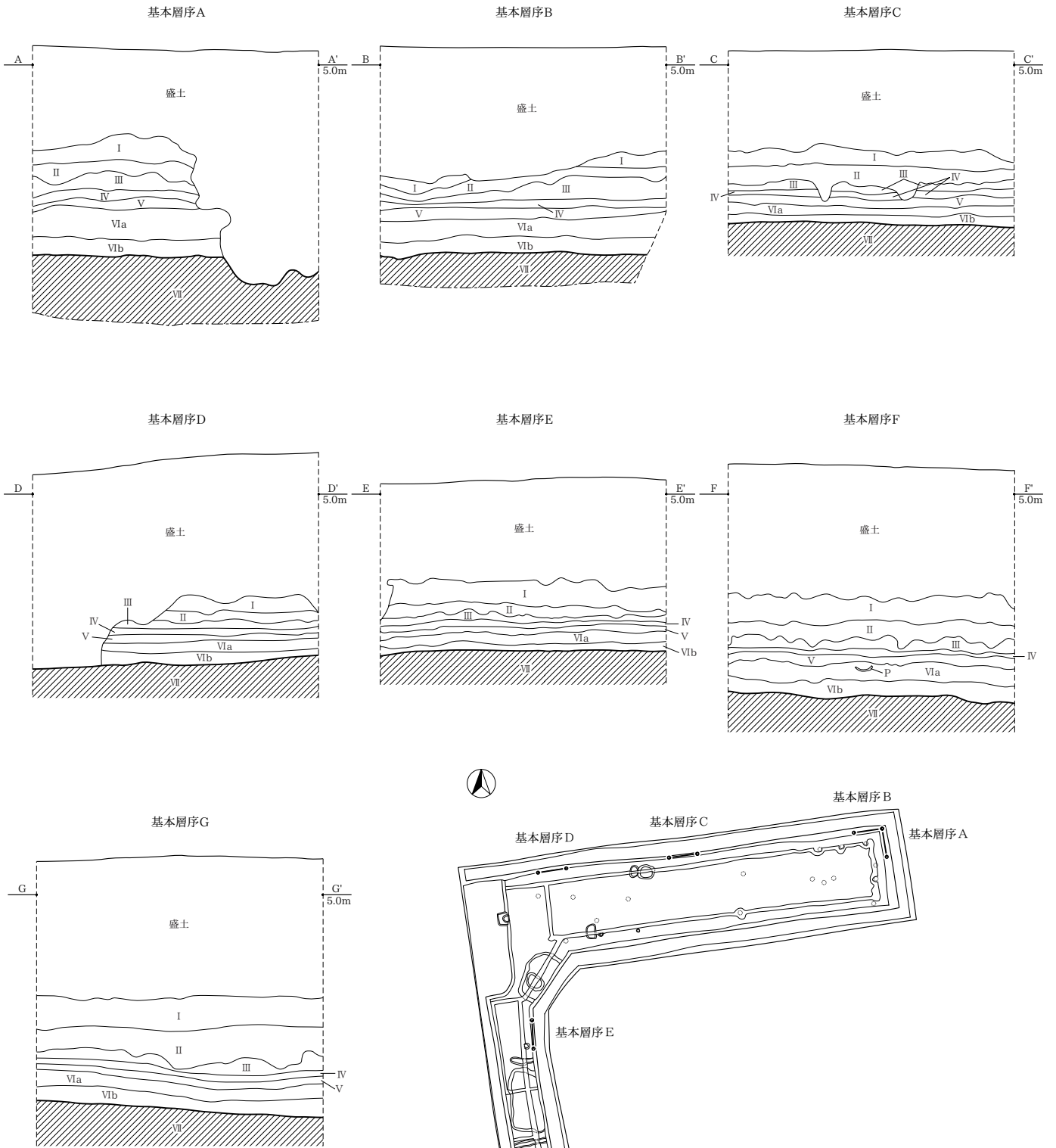
0 (1 : 1,000) 50m



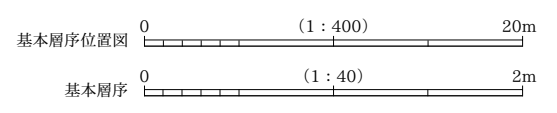
+					+	X=+199,380
	1	2	3	4	5	
	6	7	8	9	10	
	11	12	13	14	15	
	16	17	18	19	20	
	21	22	23	24	25	
+						X=+199,370

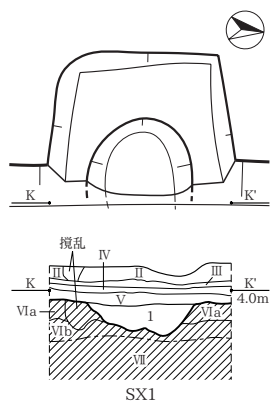
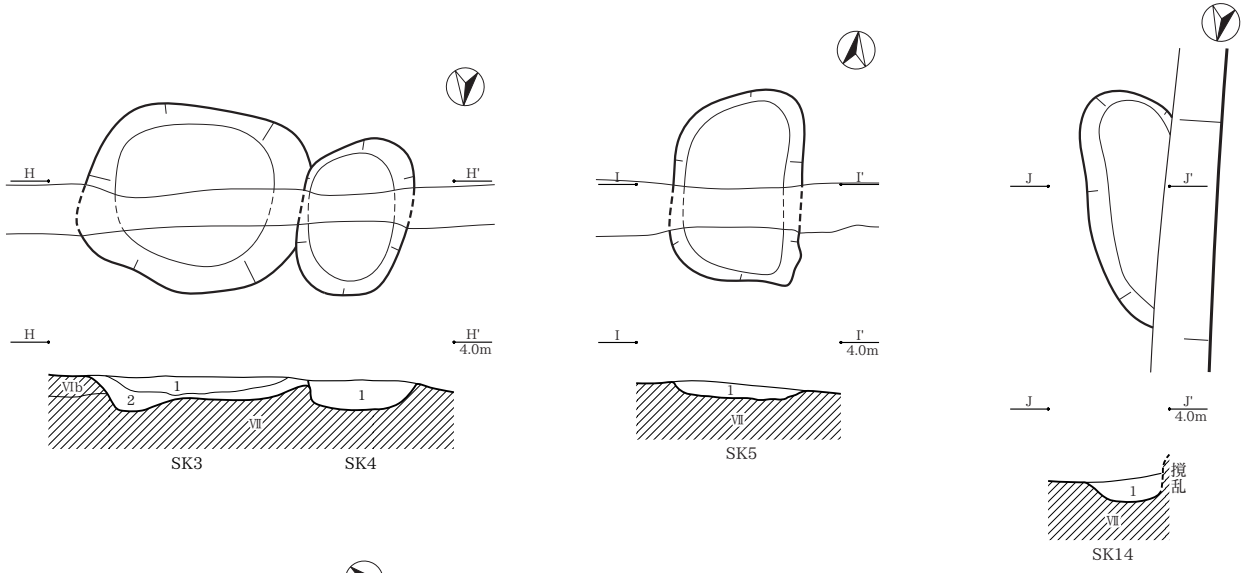
萱免遺跡小グリッド設定模式図



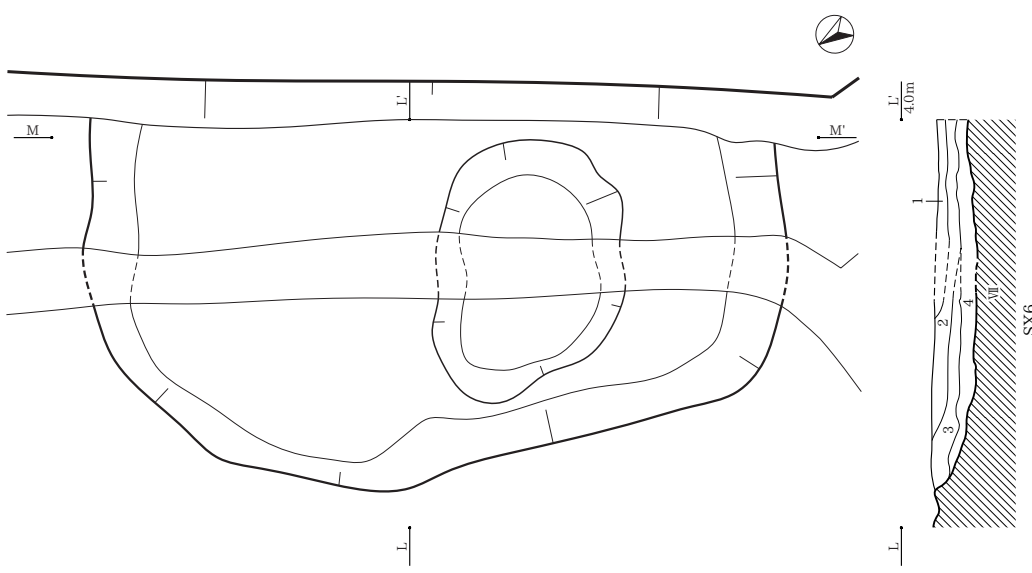


- 共通基本土層**
- I 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性弱く、しまり弱い。褐鉄鉱が輪状に入る。(旧水田耕作土)
 - II 褐灰色シルト (10YR4/1) 粘性弱く、しまり弱い。褐鉄鉱が輪状に入る。(旧水田前床土)
 - III 灰色シルト (7.5YR5/1) 粘性ややあり、しまりややあり。無遺物層。
 - IV 灰オリーブ色シルト (7.5YR4/2) 粘性ややあり、しまりややあり。無遺物層。
 - V 灰色シルト (7.5YR5/1) III層と比べて多少粘性が強く、しまりややあり。無遺物層。
 - VIa オリーブ灰色シルト (2.5GY5/1) 粘性ややあり、しまりややあり。径5mmの炭化物が少量入る。奈良・平安時代遺物包含層。
 - VIb 暗オリーブ灰色シルト (2.5GY4/1) VIa層に比べて若干粘性が強く、しまりややあり。径5~10mmの炭化物が部分的に多く入る。奈良・平安時代遺物包含層。
 - VII 灰色シルト (10Y4/1) 粘性が非常に強く、しまりややあり。一部砂層の部分あり。無遺物層。地山。

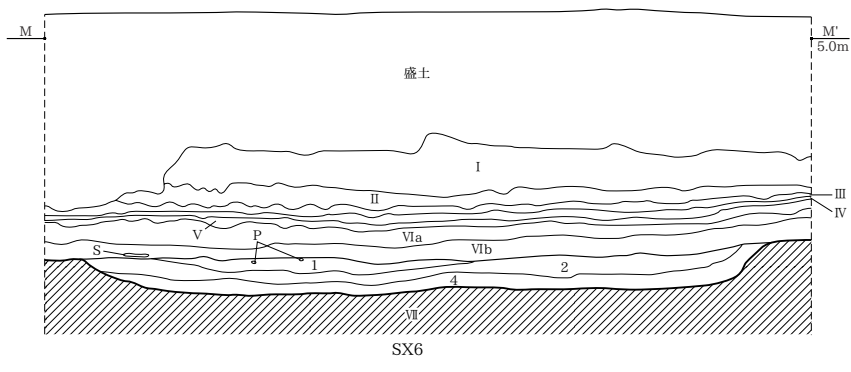


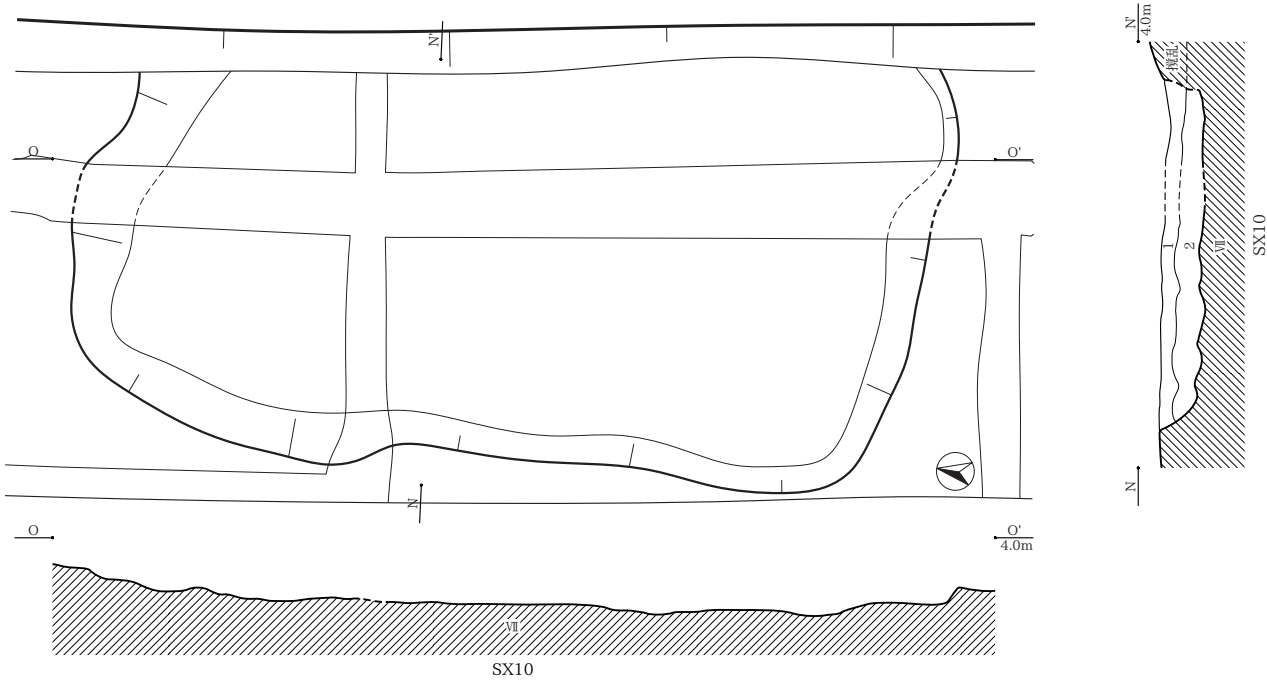


- SK3**
 1 褐灰色粘質シルト (10Y4/1) 粘性強く、しまりややあり。径5mmの炭化物が少量混じる。
 2 灰黄褐色粘質シルト (10Y5/2) 粘性強く、しまりややあり。径5~10mmの炭化物が少量混じる。
- SK4**
 1 褐灰色粘質シルト (7.5YR4/1) 粘性強く、しまりややあり。径5mmの炭化物が少量混じる。
- SK5**
 1 灰色粘質土 (N5/) 粘性強く、しまりややあり。炭化物が少量混じる。
- SK14**
 1 褐灰色粘質シルト (10YR4/1) 粘性強く、しまりややあり。径10mmの炭化物がまばらに混じる。
- SX1**
 1 褐灰色粘質土 (10Y4/1) 粘性強く、しまりあり。炭化物が層の中程に帯状に混じる。

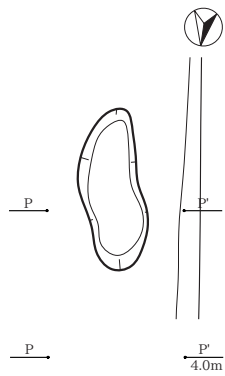


- SX6**
 1 灰色シルト (N4/) 粘性強く、しまりあり。径10mmの炭化物が少量混じる。
 2 灰色シルト (N4/) 粘性強く、しまりあり。径10mmの炭化物が多量に混じる。
 3 灰色シルト (N5/) 粘性ややあり、しまりややあり。炭化物粒が極少量混じる。
 4 灰色シルト (N6/) 粘性強く、しまりややあり。径5mmの炭化物が少量混じる。

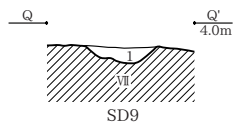




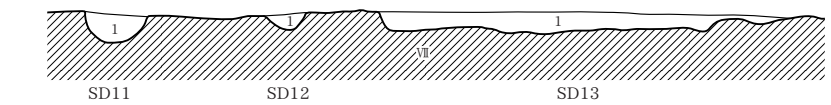
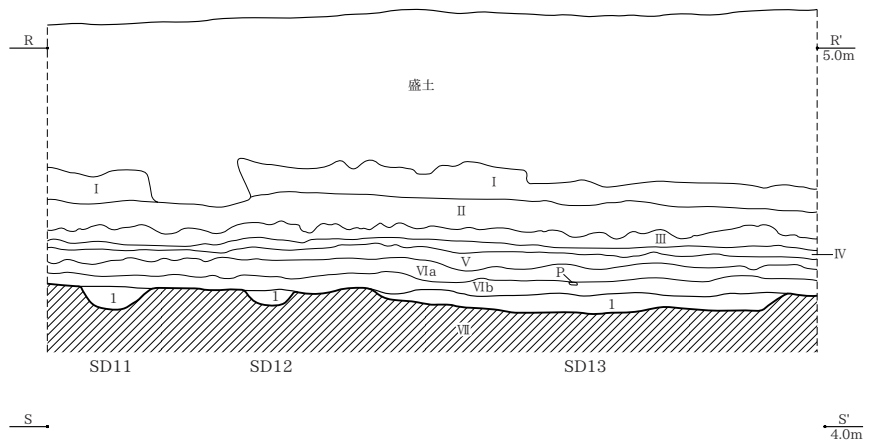
SX10
 1 灰色粘質土 (N5/) 粘性強く、しまりややあり。径5mmの炭化物がまばらに混じる。
 2 オリーブ灰色シルト (2.5GY5/1) 粘性・しまりとも1層よりやや弱い。径5mmの炭化物が1層より多くまばらに混じる。



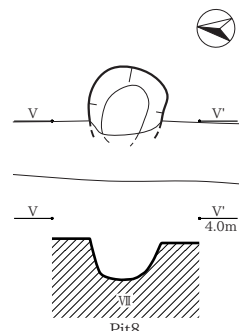
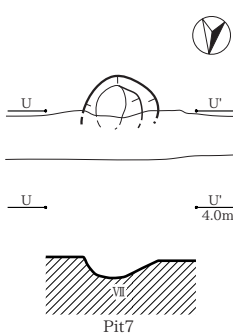
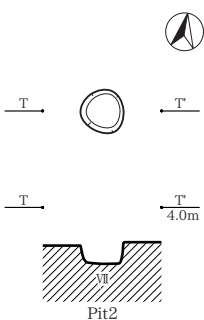
SX15
 1 灰色粘質シルト (N5/) 粘性強く、しまりあり。径5mm~10mmの炭化物がやや多く混じる。

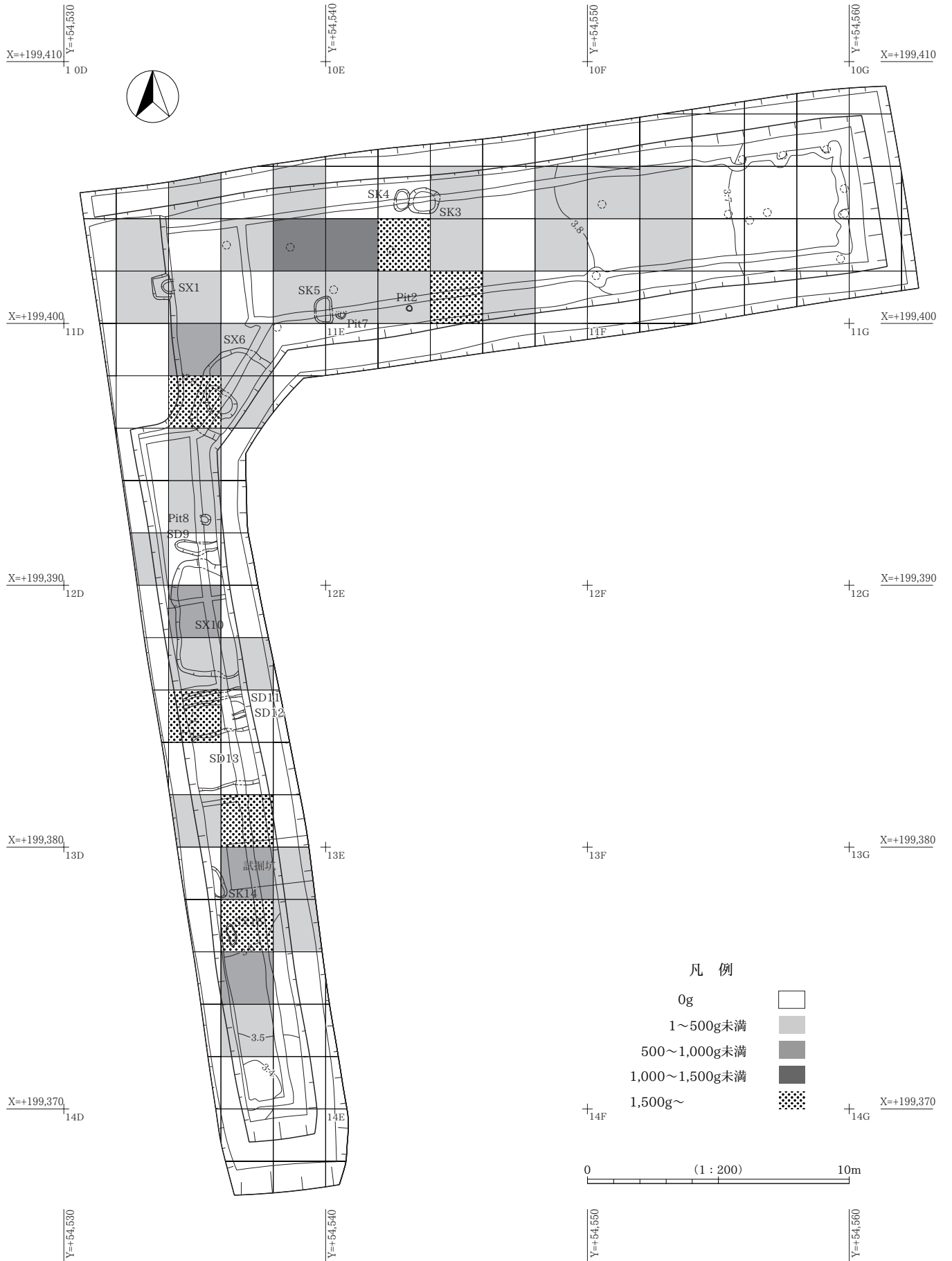


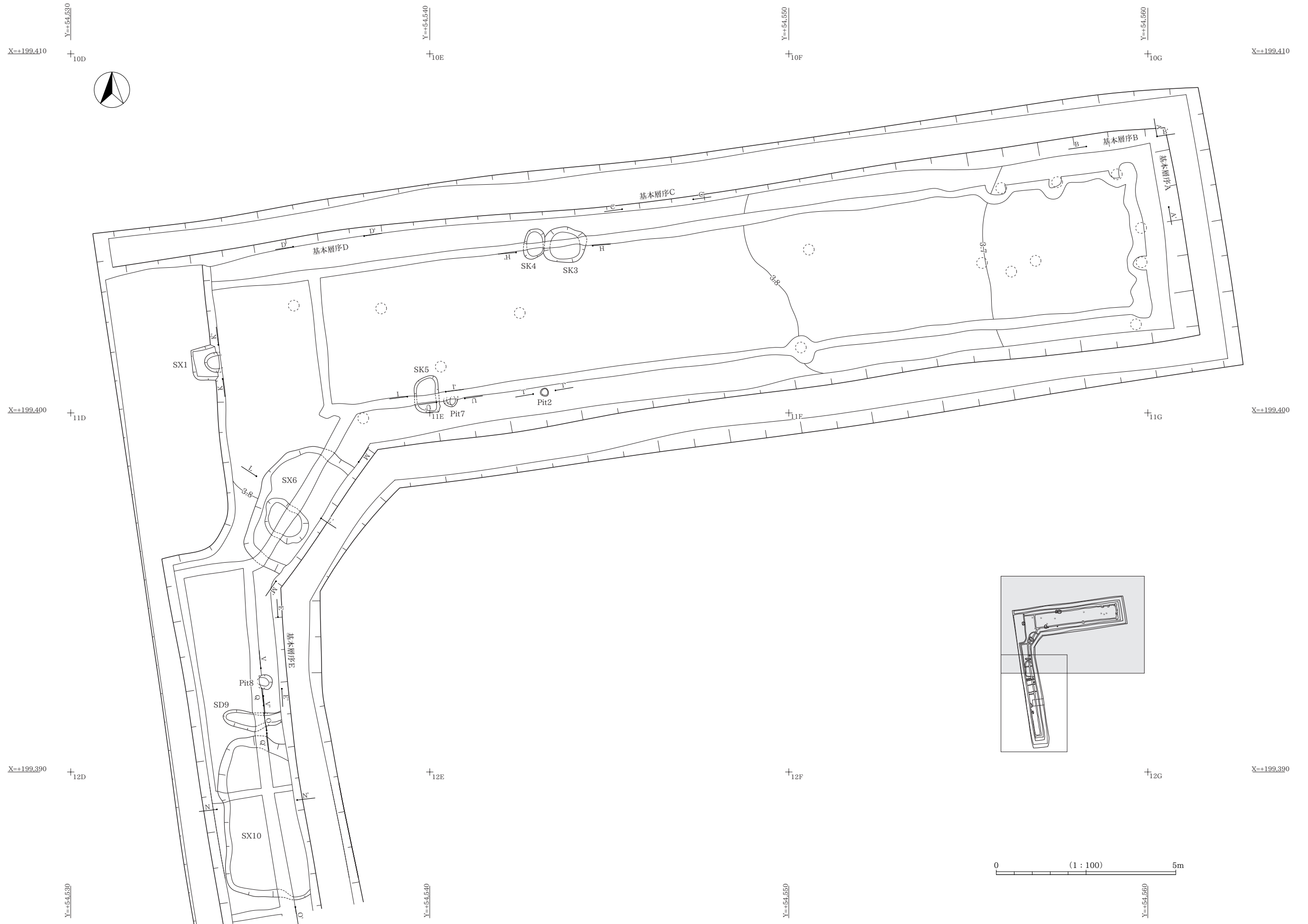
SD9
 1 灰色粘質土 (N5/) 粘性強く、しまりややあり。径5~10mmの炭化物がまばらに混じる。



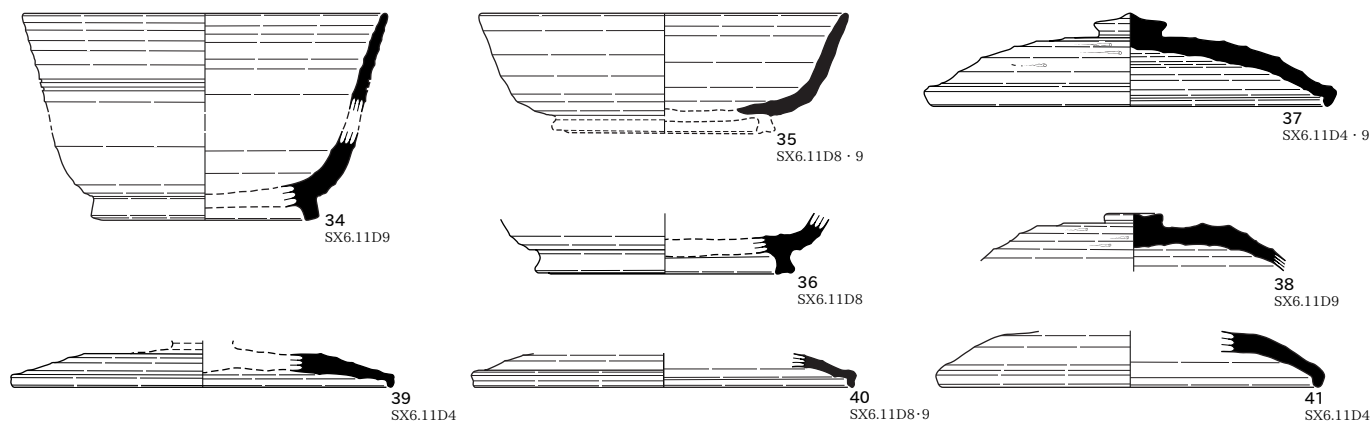
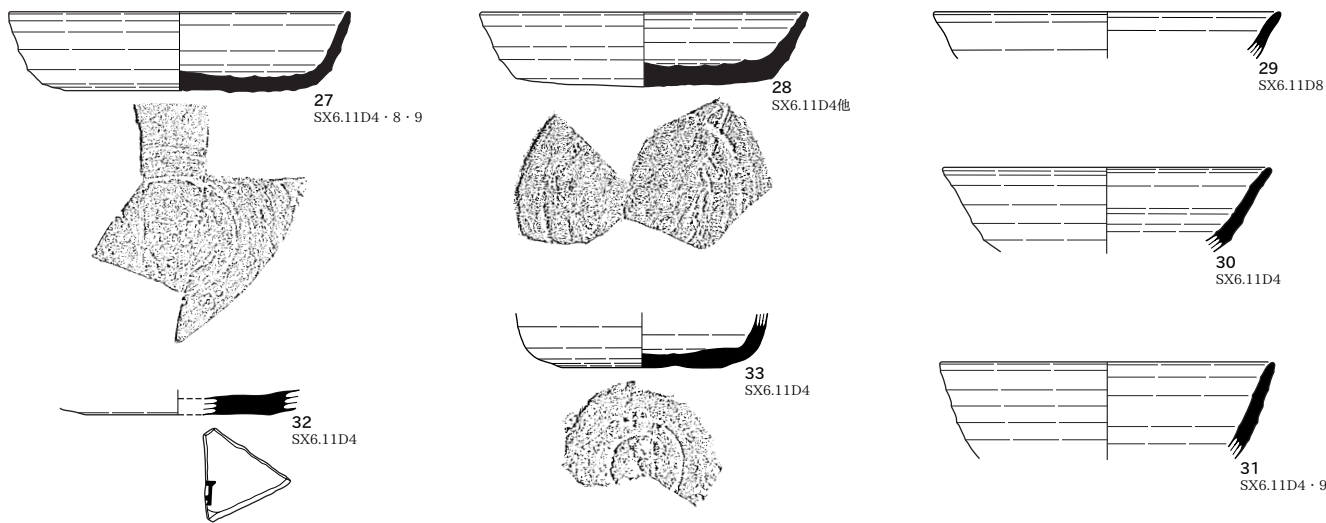
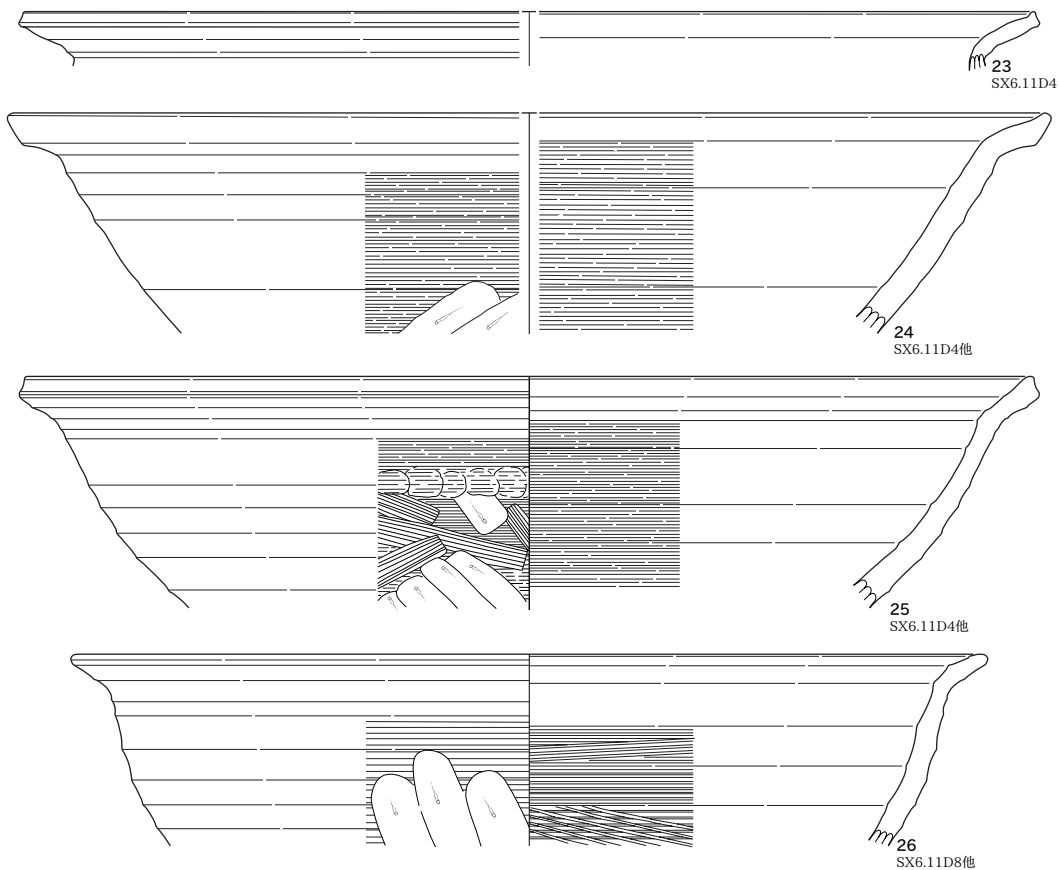
SD11
 1 灰色粘質土 (N5/) 粘性強く、しまりややあり。径5~10mmの炭化物がまばらに混じる。
SD12
 1 褐色粘質土 (10YR5/1) 粘性強く、しまりややあり。炭化物粒が少量混じる。
SD13
 1 灰色粘質土 (N5/) 粘性強く、しまりややあり。径5~10mmの炭化物がまばらに混じる。





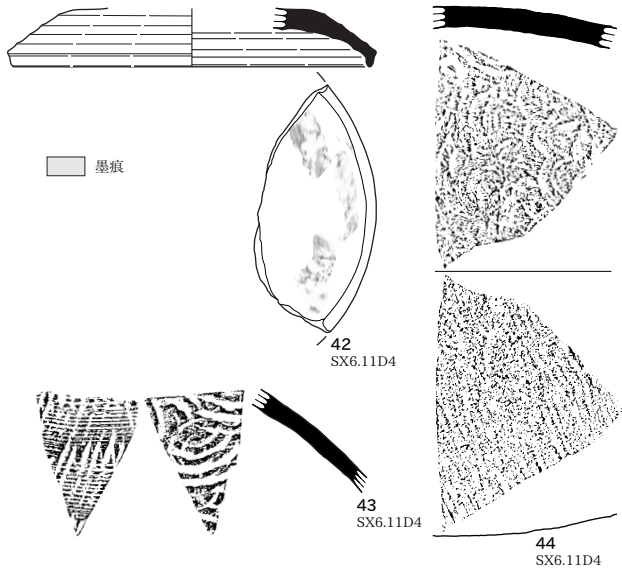


SX6 (23~41)

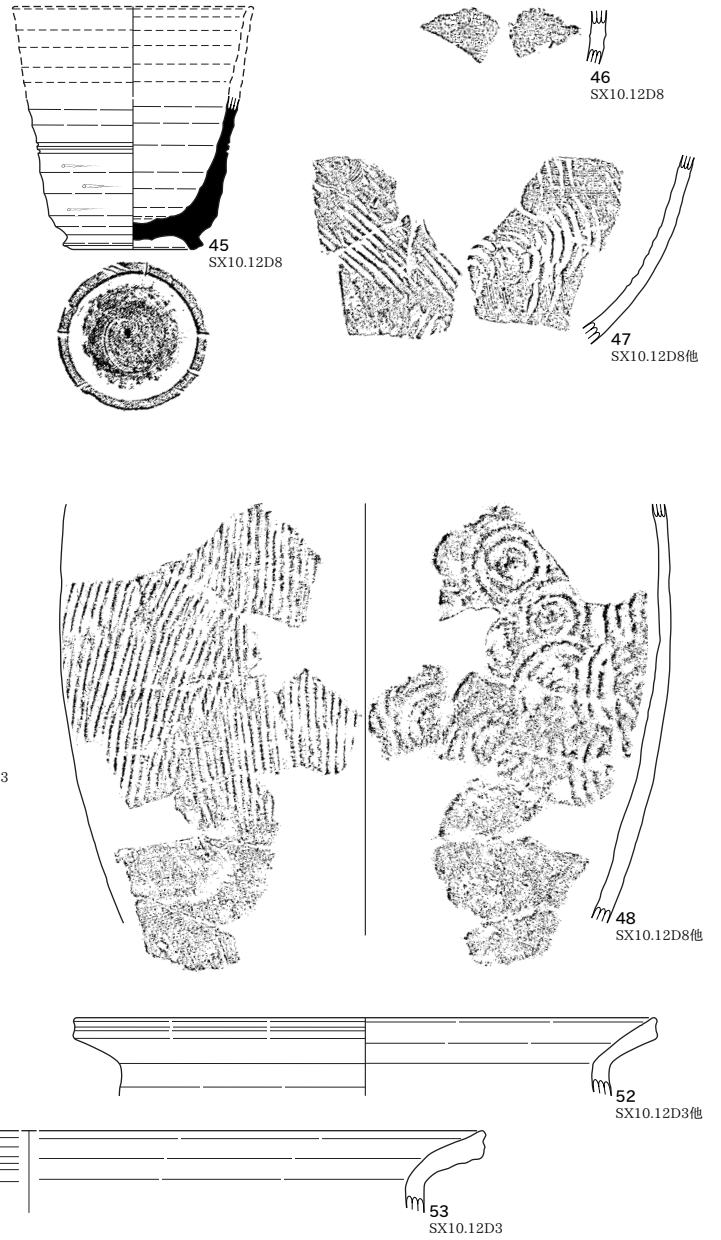


0 (1:3) 10cm

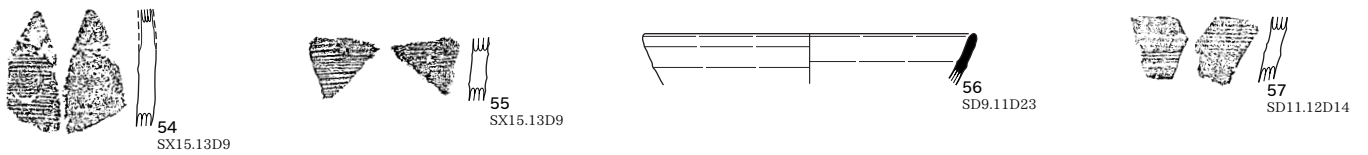
SX6 (42~44)



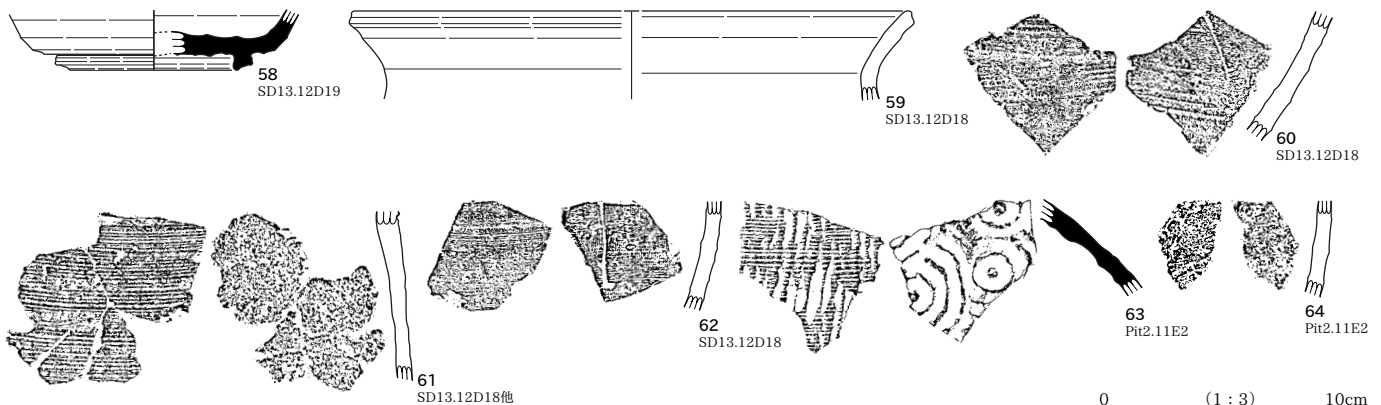
SX10 (45~53)



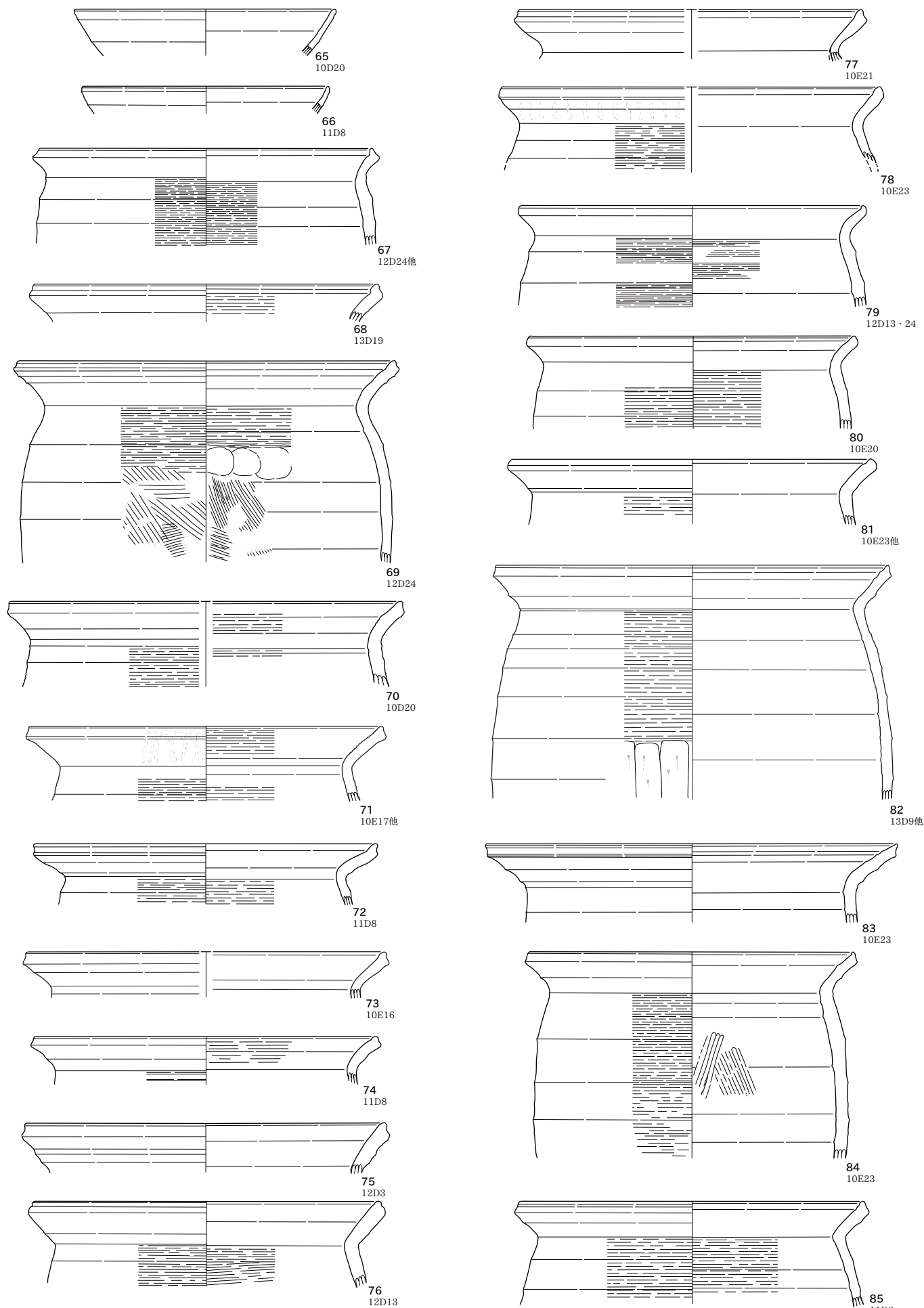
SX15 (54 · 55) 、SD9 (56) 、SD11 (57)



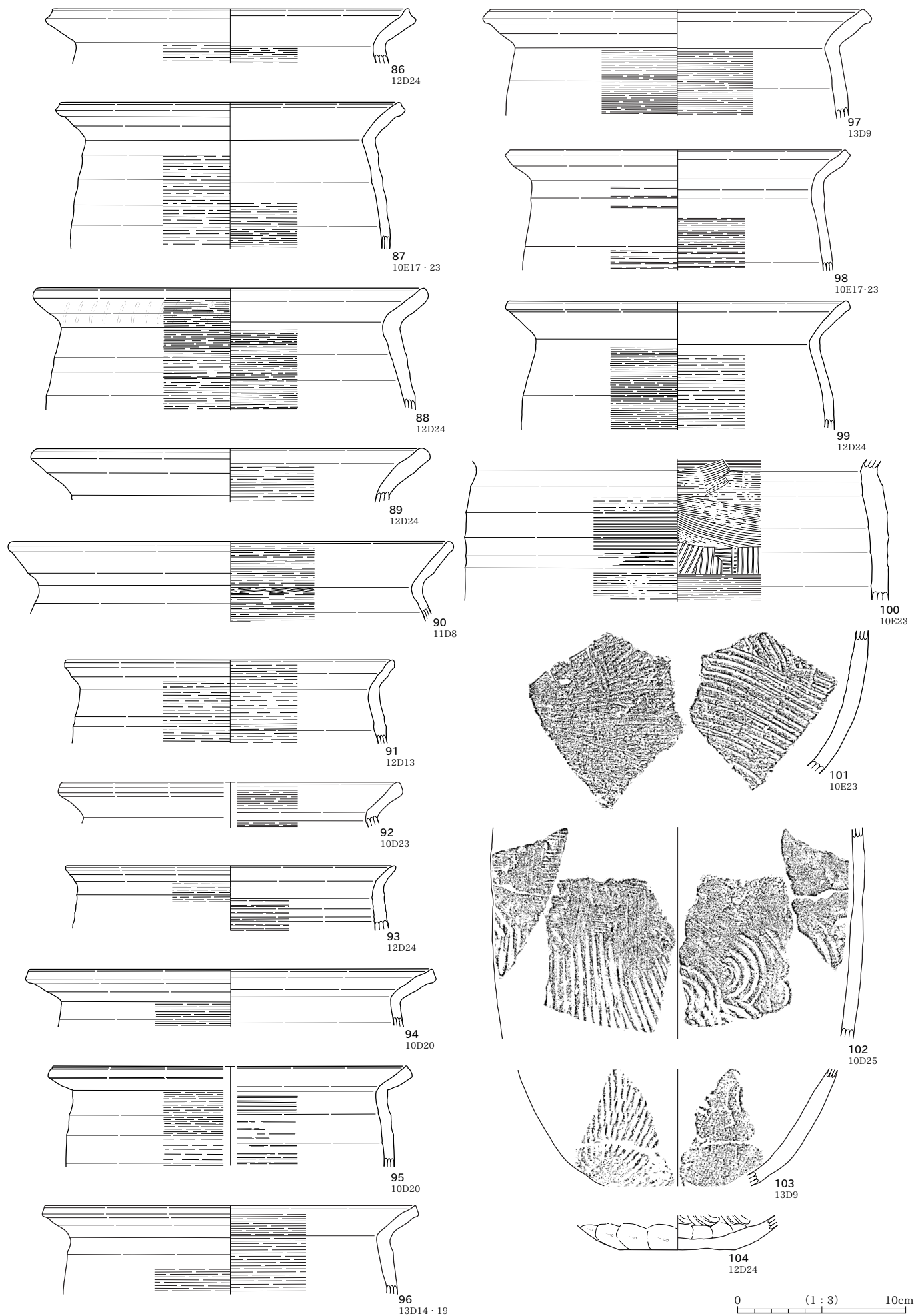
SD13 (58~62) 、Pit2 (63 · 64)



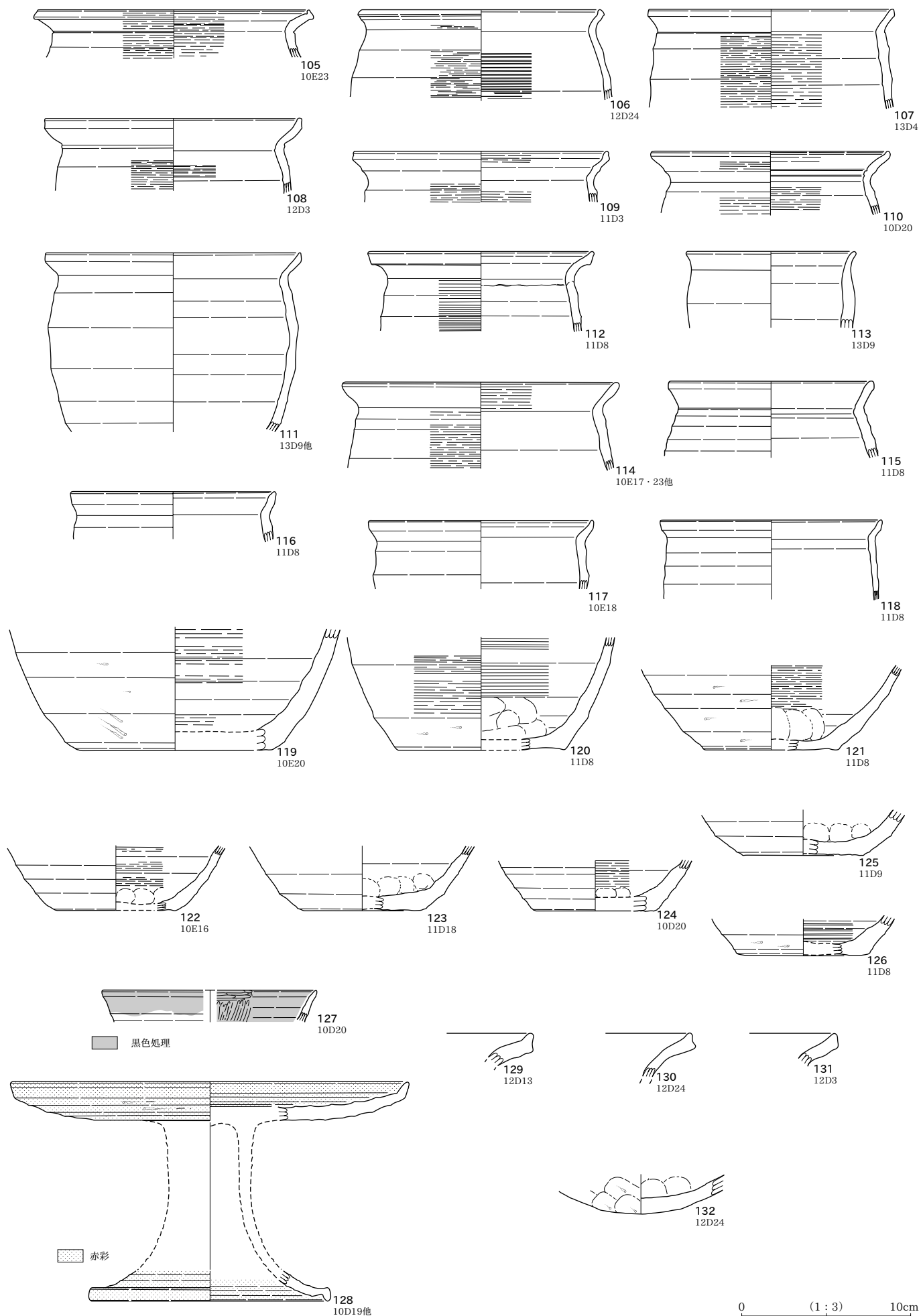
包含層 (65~85)



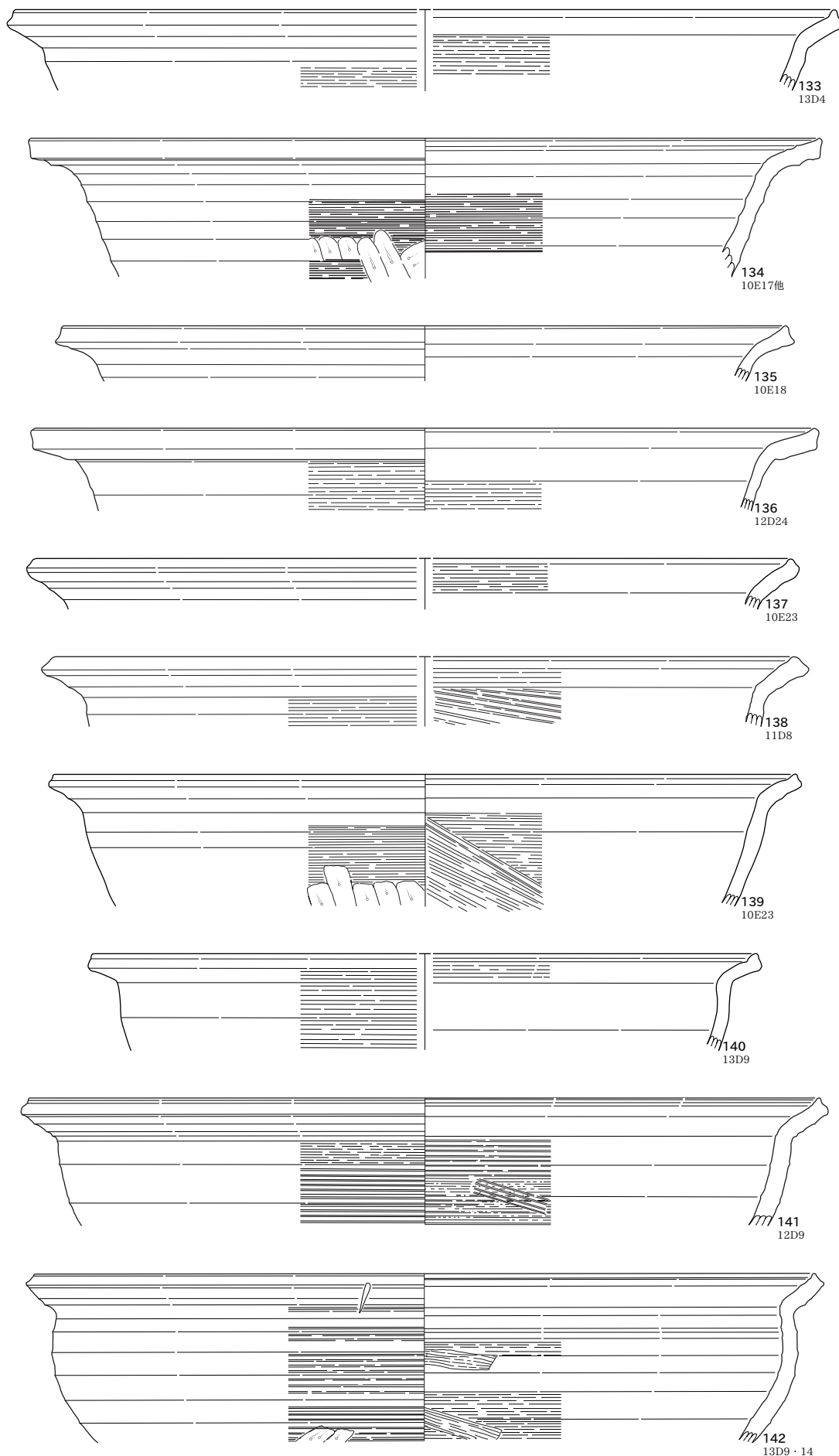
包含層 (86~104)



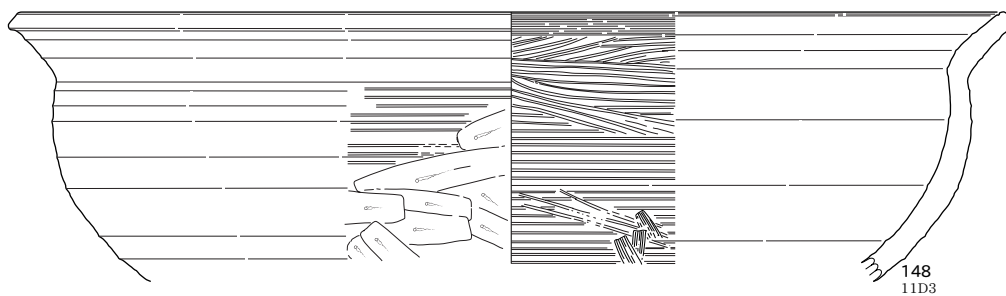
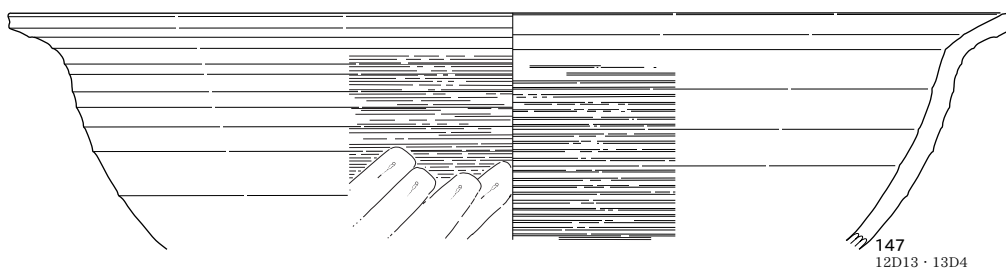
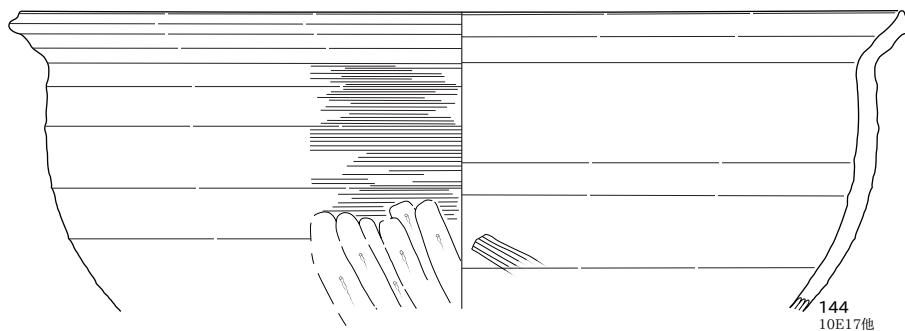
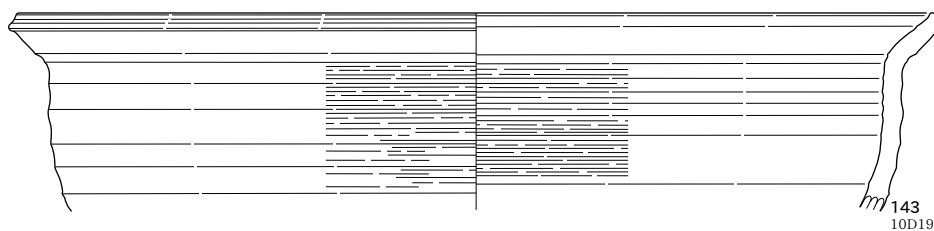
包含層 (105~132)



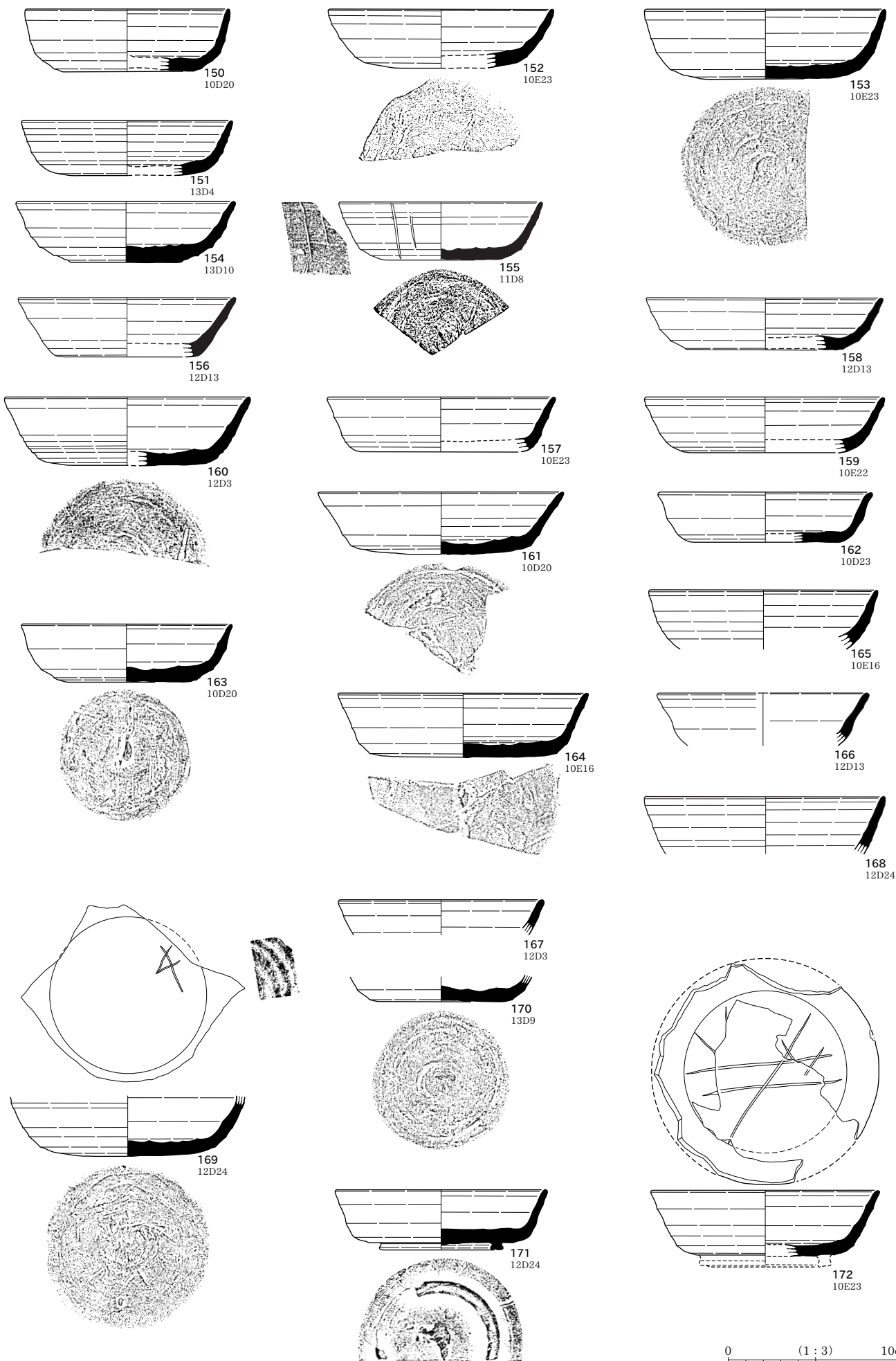
包含層 (133~142)



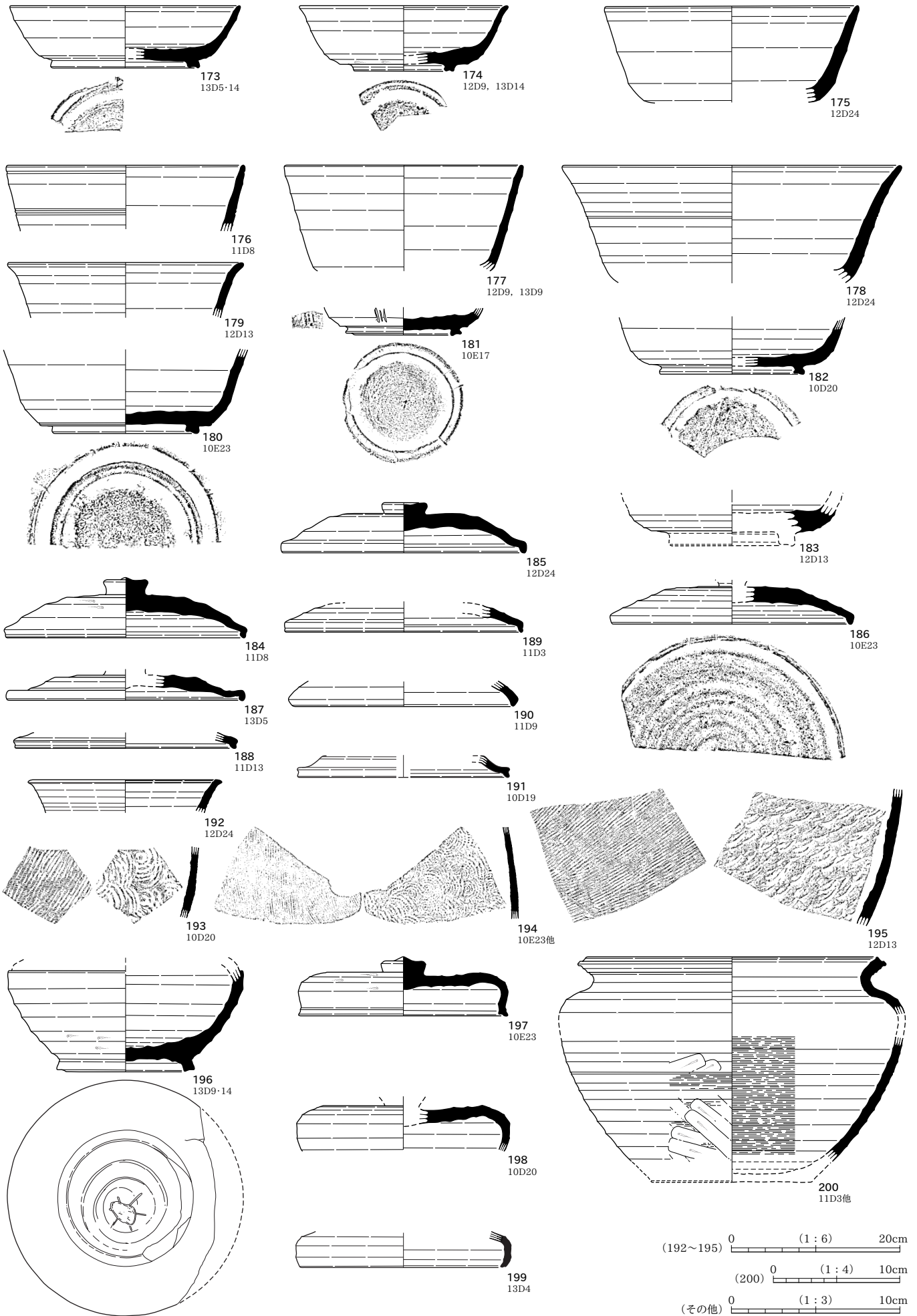
包含層 (143~149)



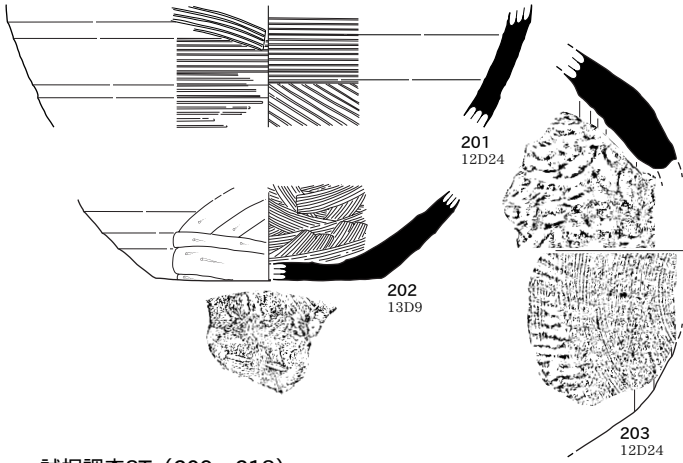
包含層 (150~172)



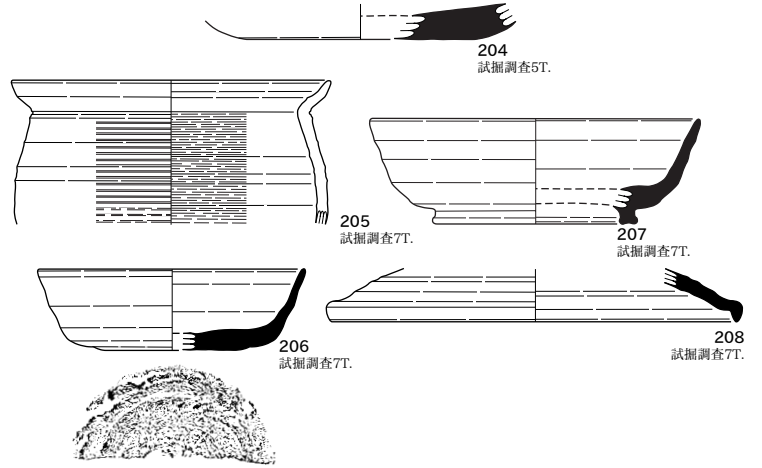
包含層 (173~200)



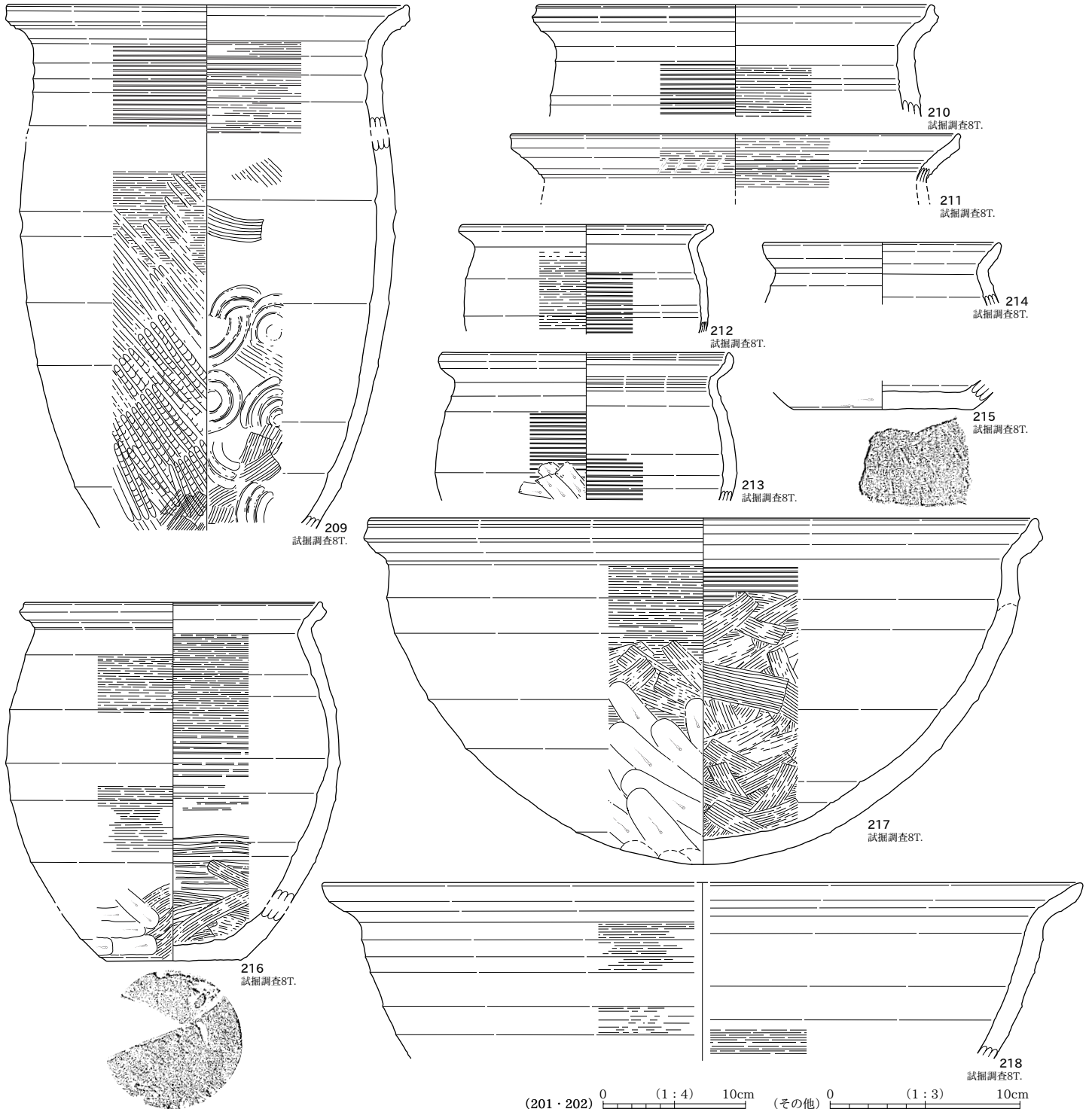
包含層 (201~203)



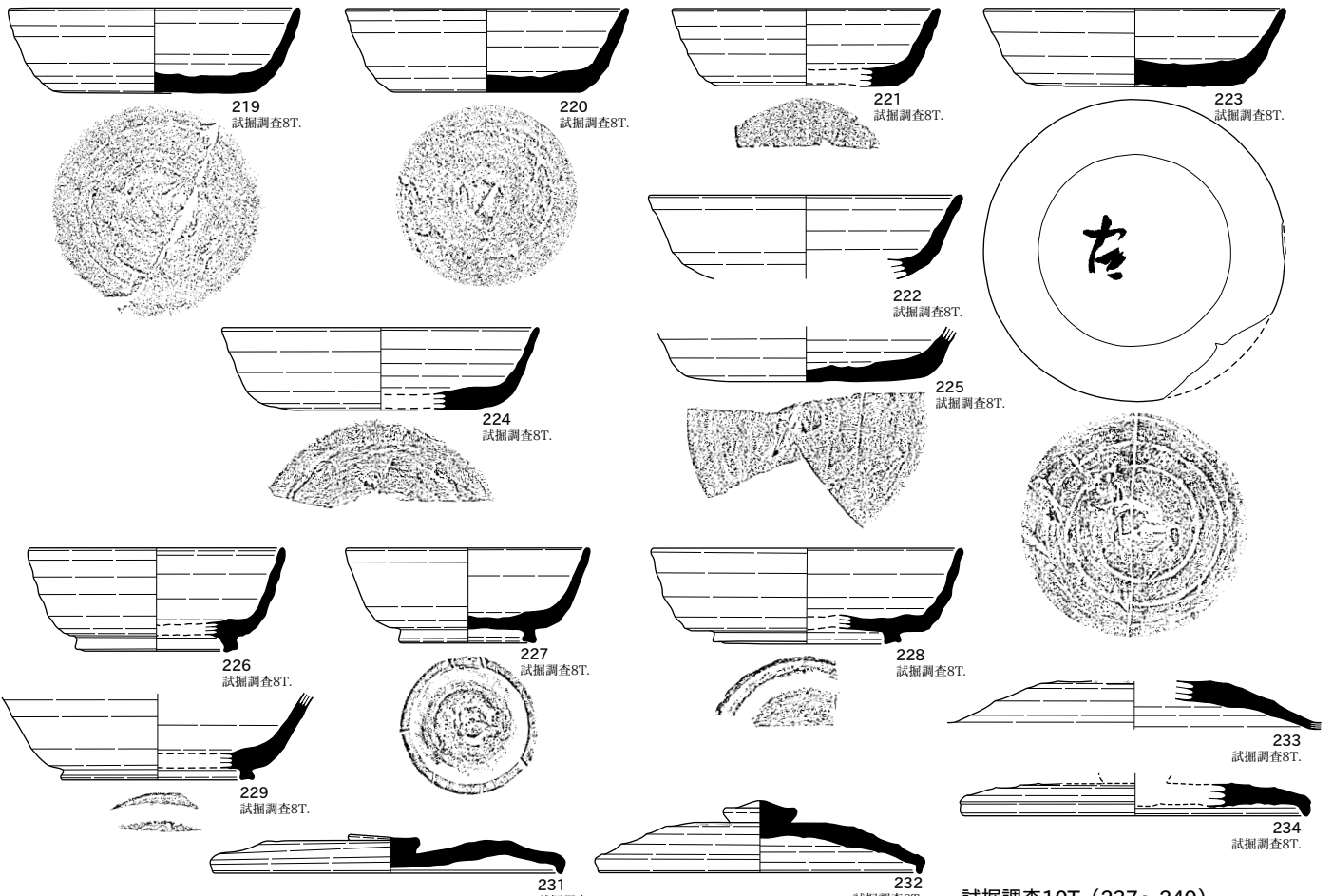
試掘調査5T (204)、試掘調査7T (205~208)



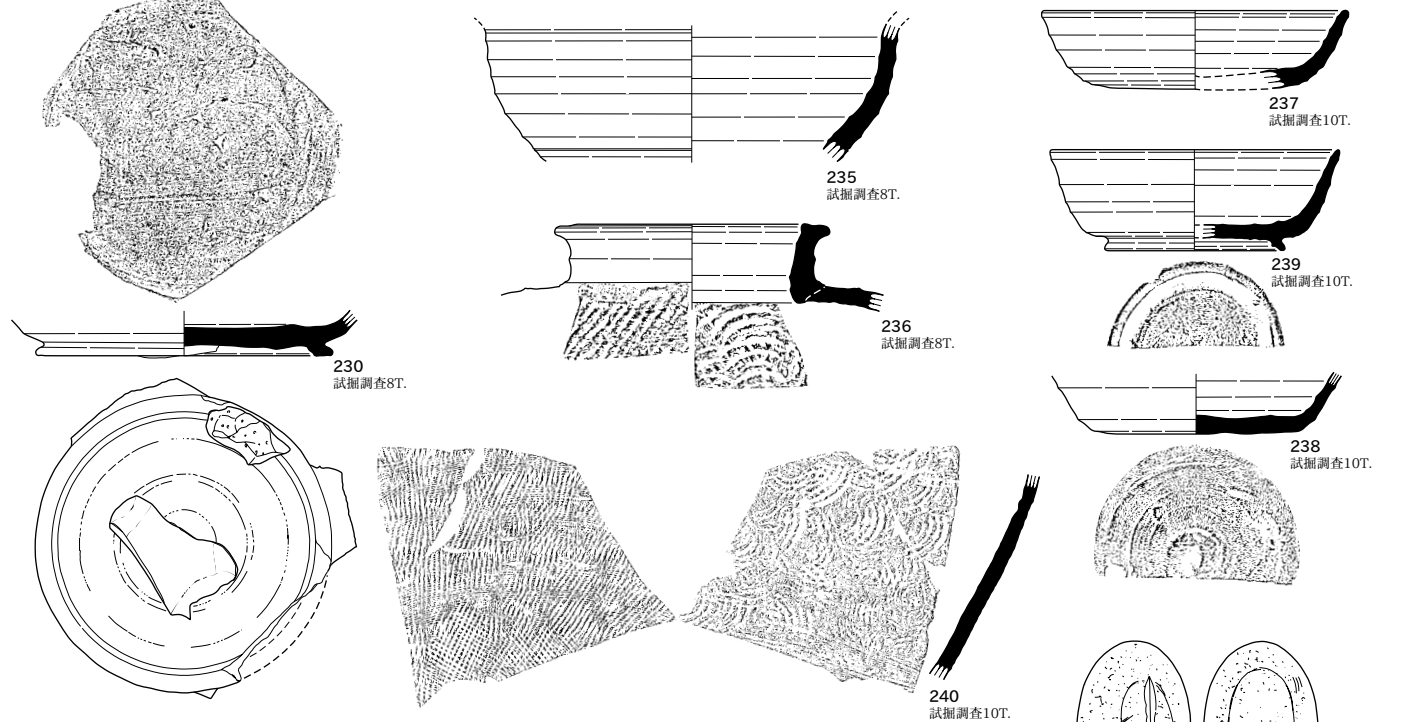
試掘調査8T (209~218)



試掘調査8T (219~236)

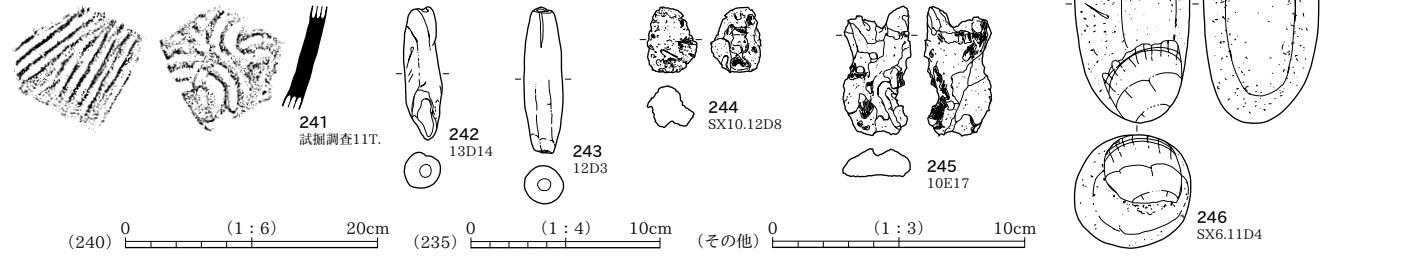


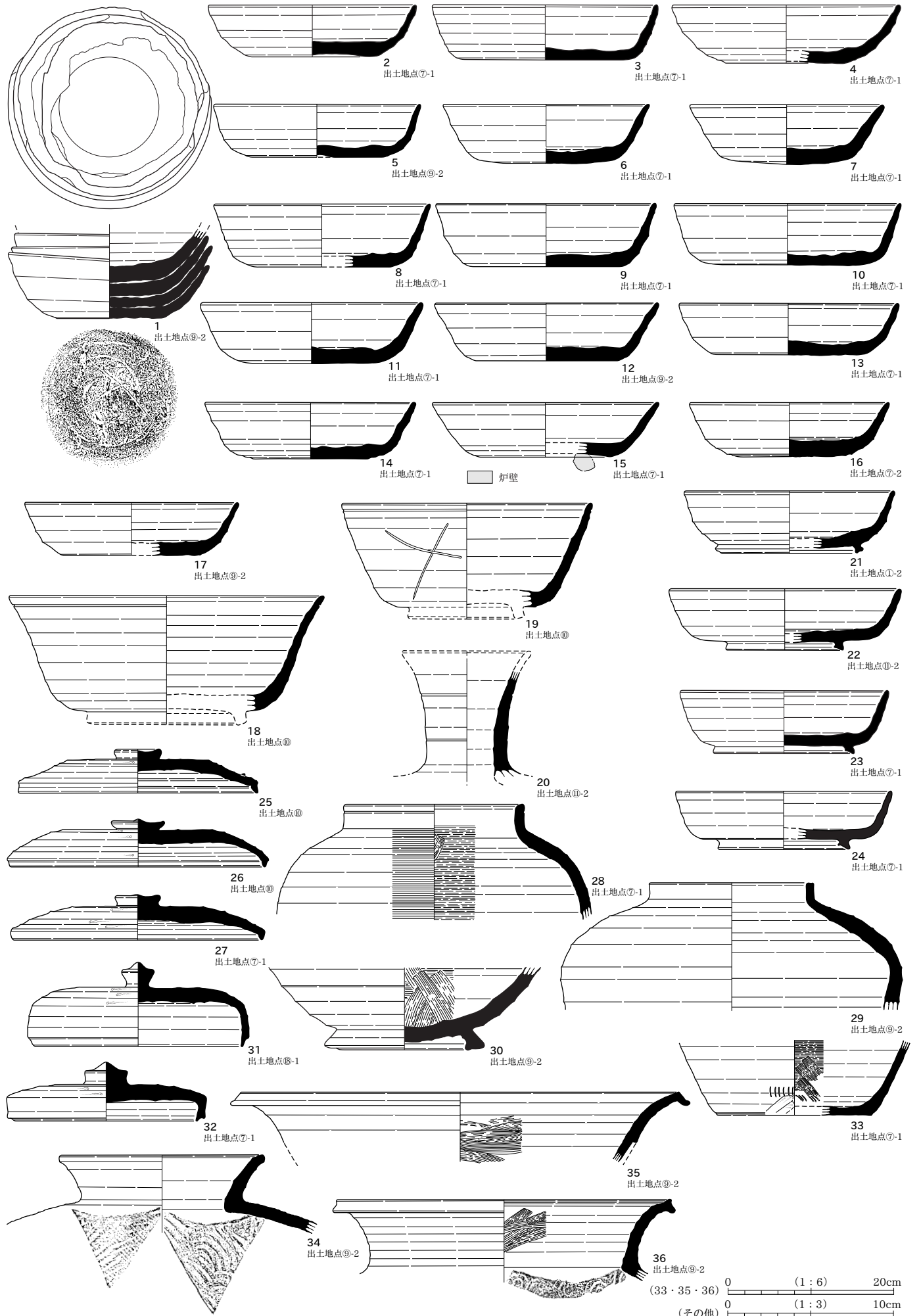
試掘調査10T (237~240)



試掘調査11T (241)

土製品 (242・243)、鍛冶関連遺物 (244・245)、石製品 (246)









菅免遺跡

主要地方道新津・村松線



萱免遺跡周辺空中写真3（北西→南東）



萱免遺跡周辺空中写真4（北→南）



萱免遺跡全景空中写真1（上が北）



萱免遺跡全景空中写真2（左が北）



完掘状況（北→南）



完掘状況（南→北）



完掘状況 (東→西)



基本層序 A



基本層序 B



基本層序 C



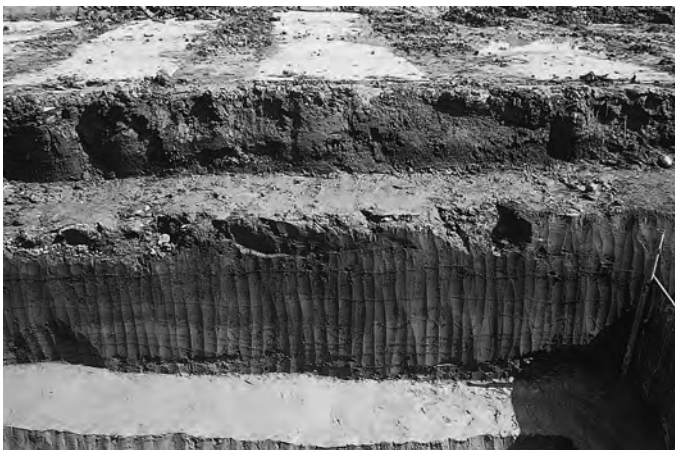
基本層序 D



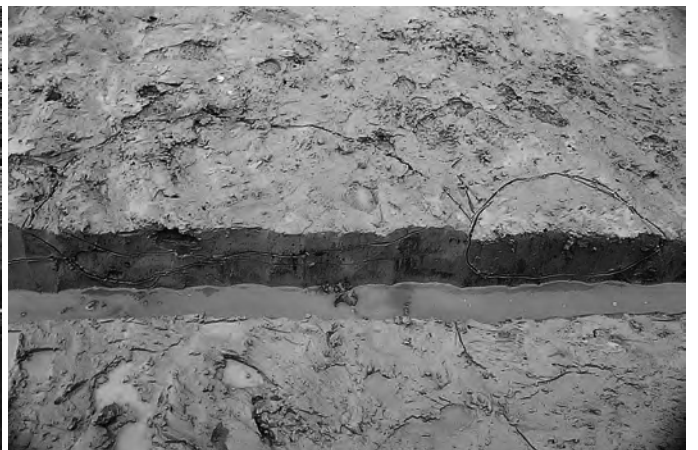
基本層序 E



基本層序 F



基本層序 G



SK3・SK4 土層断面 (北→南)



SK3・SK4 完掘状況 (北→南)



SK5 土層断面 (南→北)



SK5 完掘状況 (南→北)



SK14 土層断面 (北→南)



SK14 完掘状況 (北→南)



SX1 土層断面 (東→西)



SX1 完掘状況 (東→西)



SX6 土層断面 (北西→南東)



SX6 土層断面 (南西→北東)



SX6 完掘状況 (北西→南東)



SX10 土層断面 (南→北)



SX10 完掘状況 (西→東)



SX15 土層断面 (北→南)



SX15 完掘状況 (北→南)



SD9 土層断面 (西→東)



SD9・Pit8 完掘状況 (西→東)



SD11・SD12・SD13 土層断面 (西→東)



SD11・SD12・SD13 完掘状況 (西→東)



Pit2 完掘状況 (南→北)



Pit7 完掘状況 (北→南)

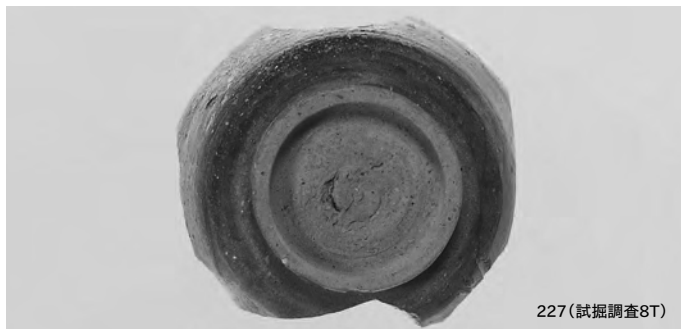
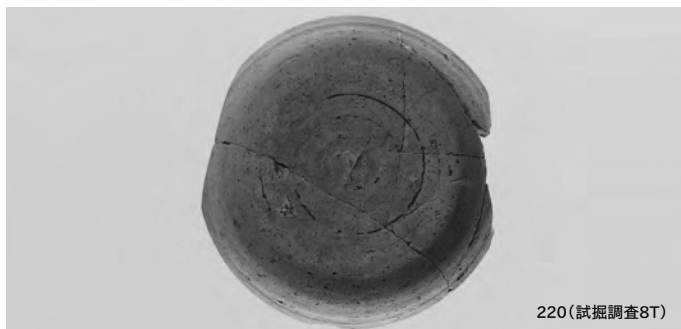
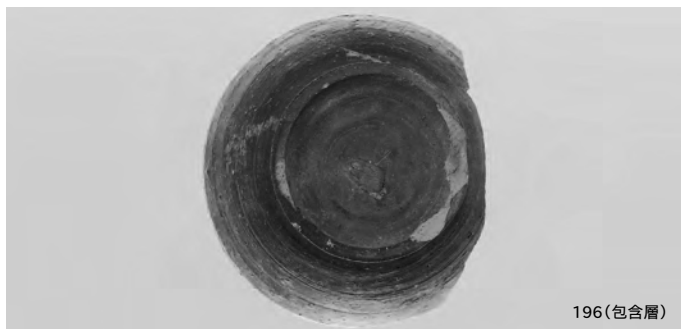
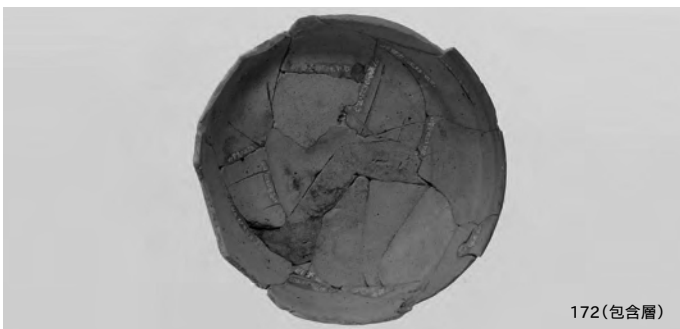
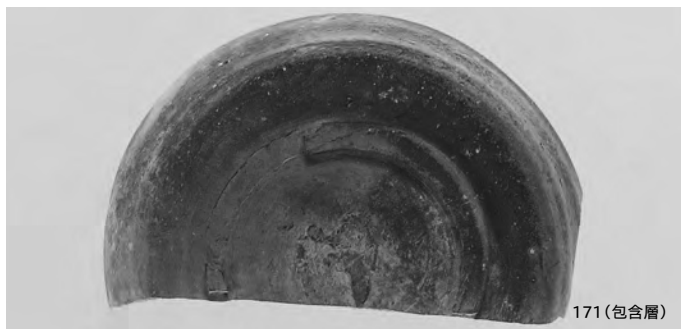
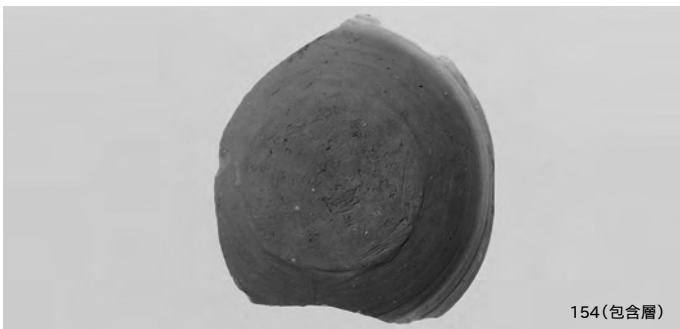
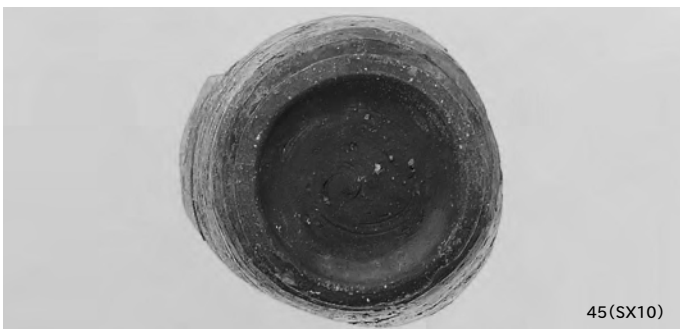
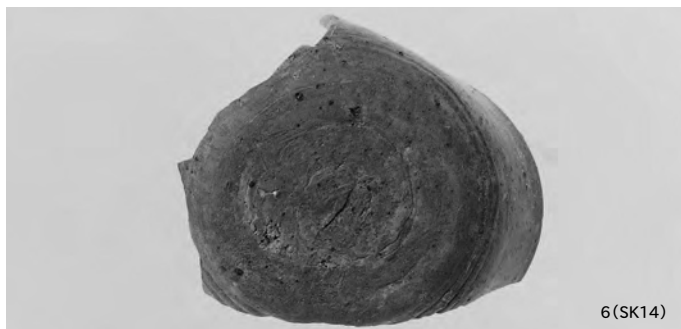


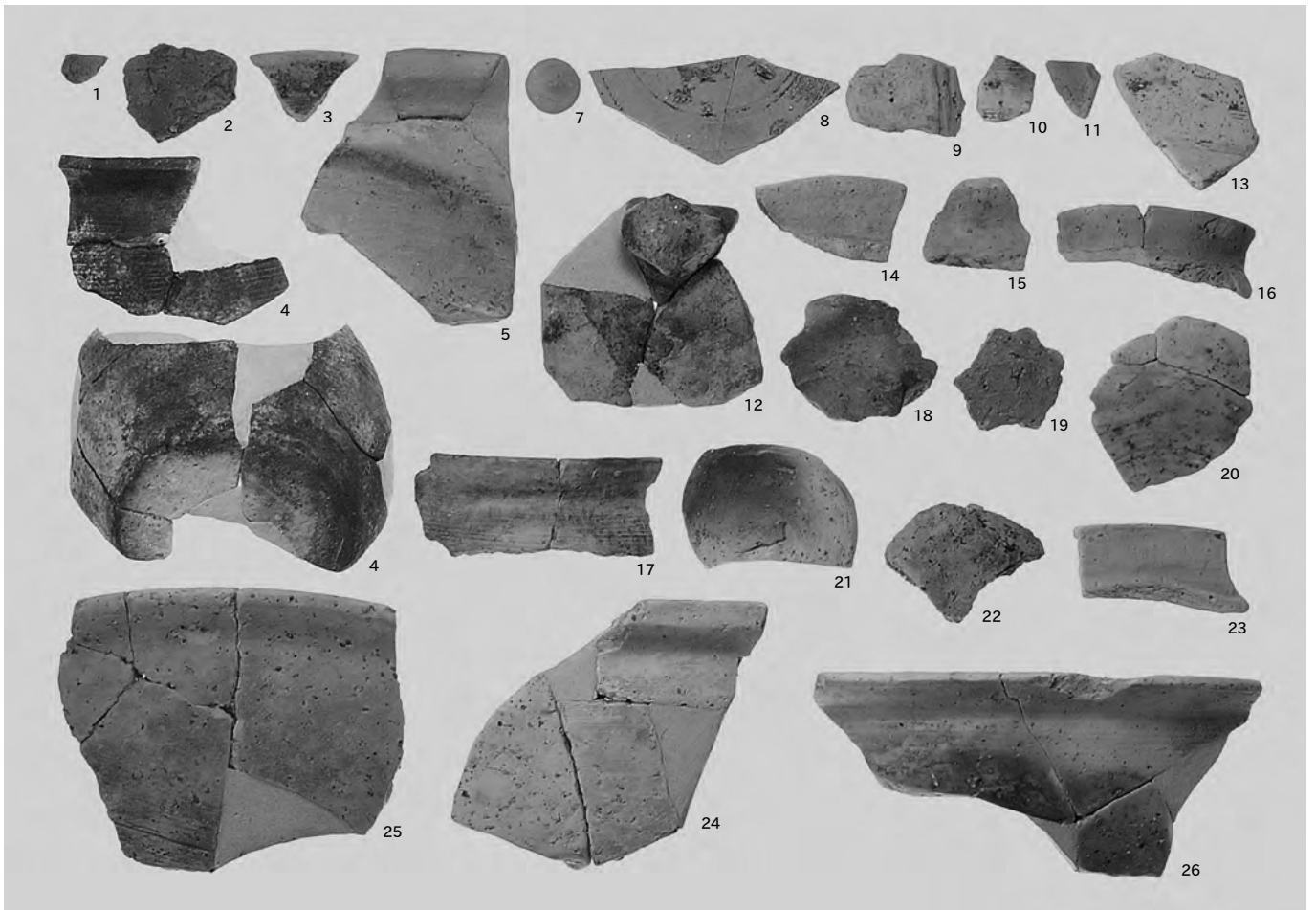
萱免遺跡出土土師器



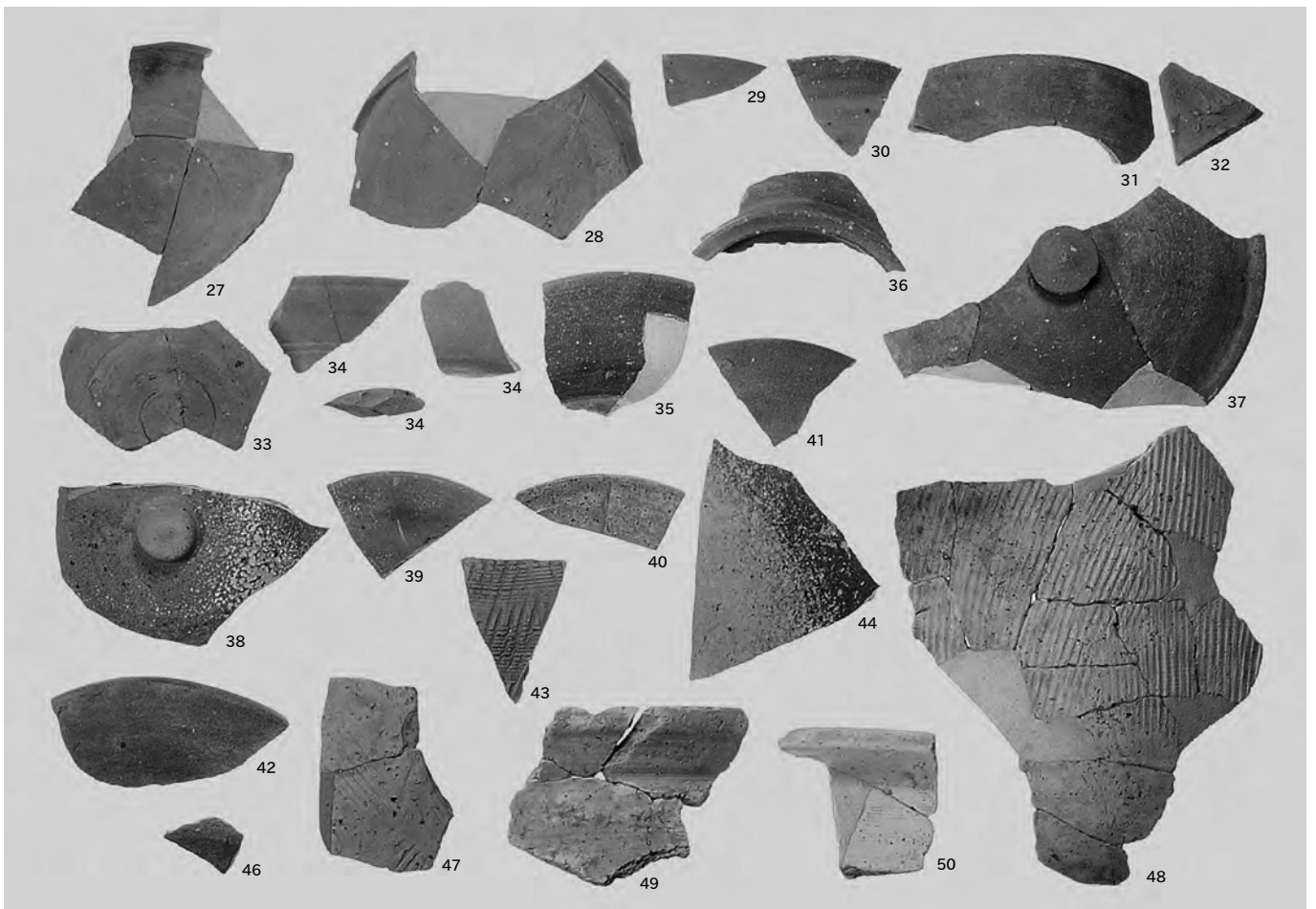
萱免遺跡出土須恵器



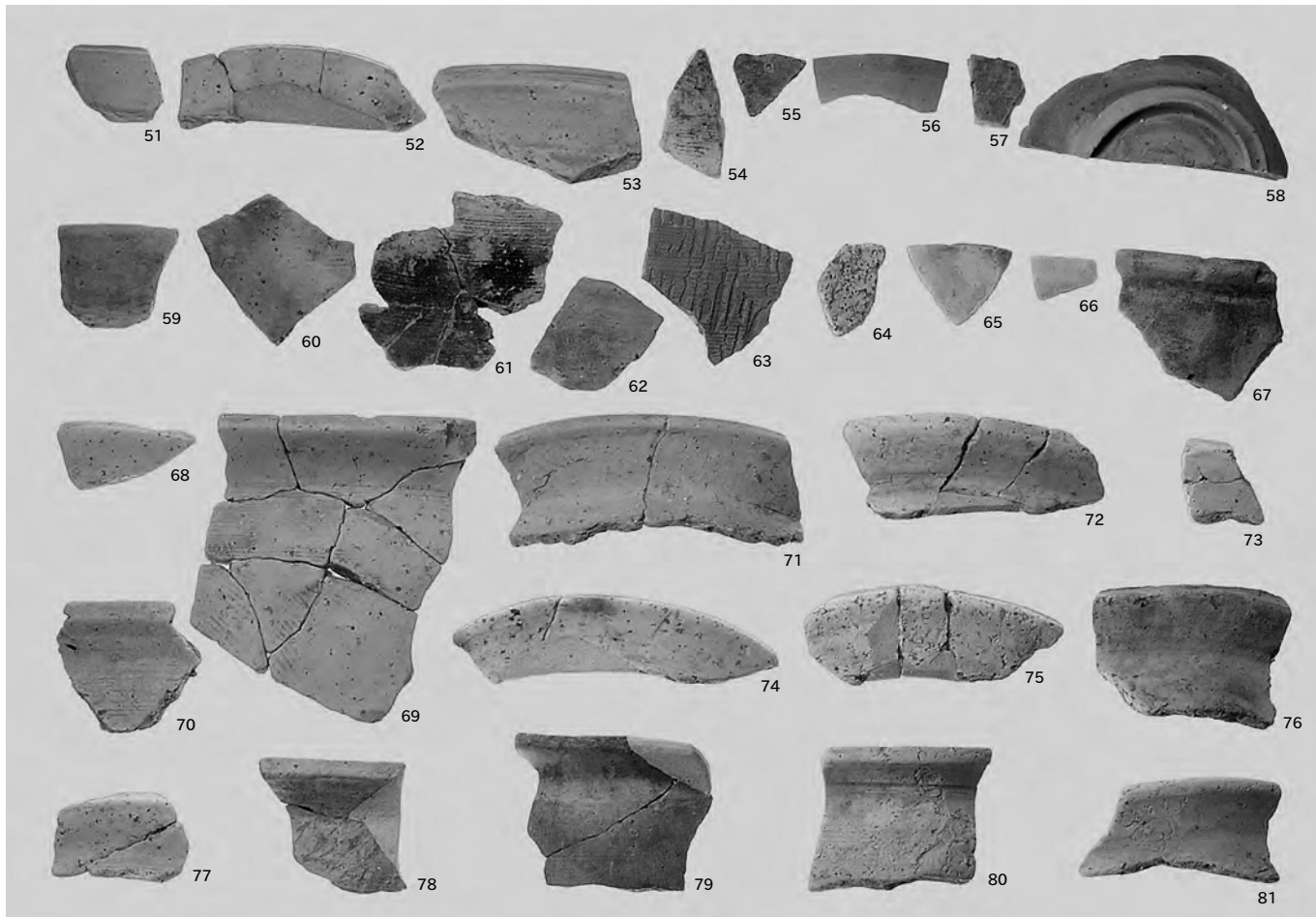




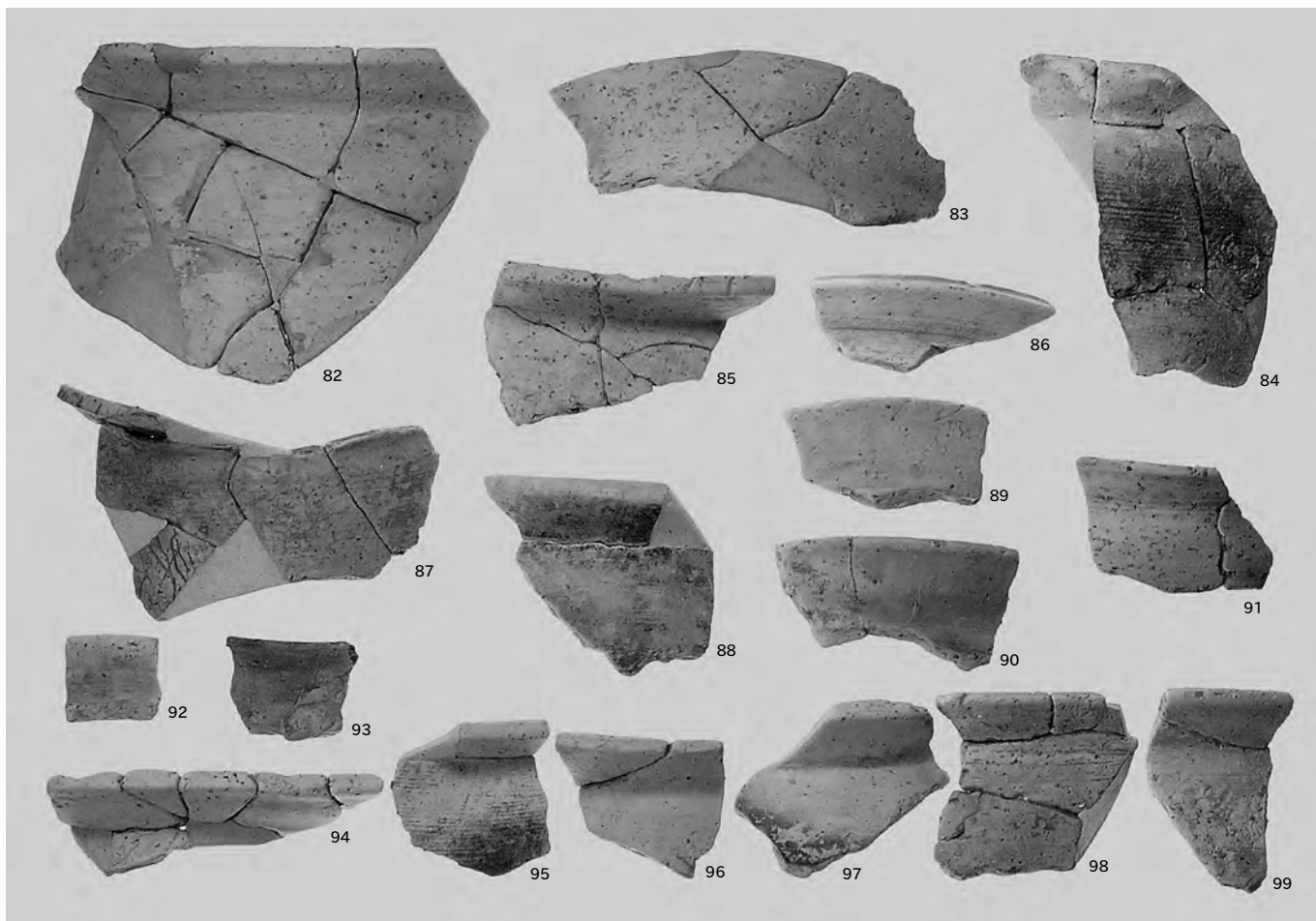
SK3(1).SK4(2).SK14(3~5·7·8).SX1(9·10).SX6(11~26)



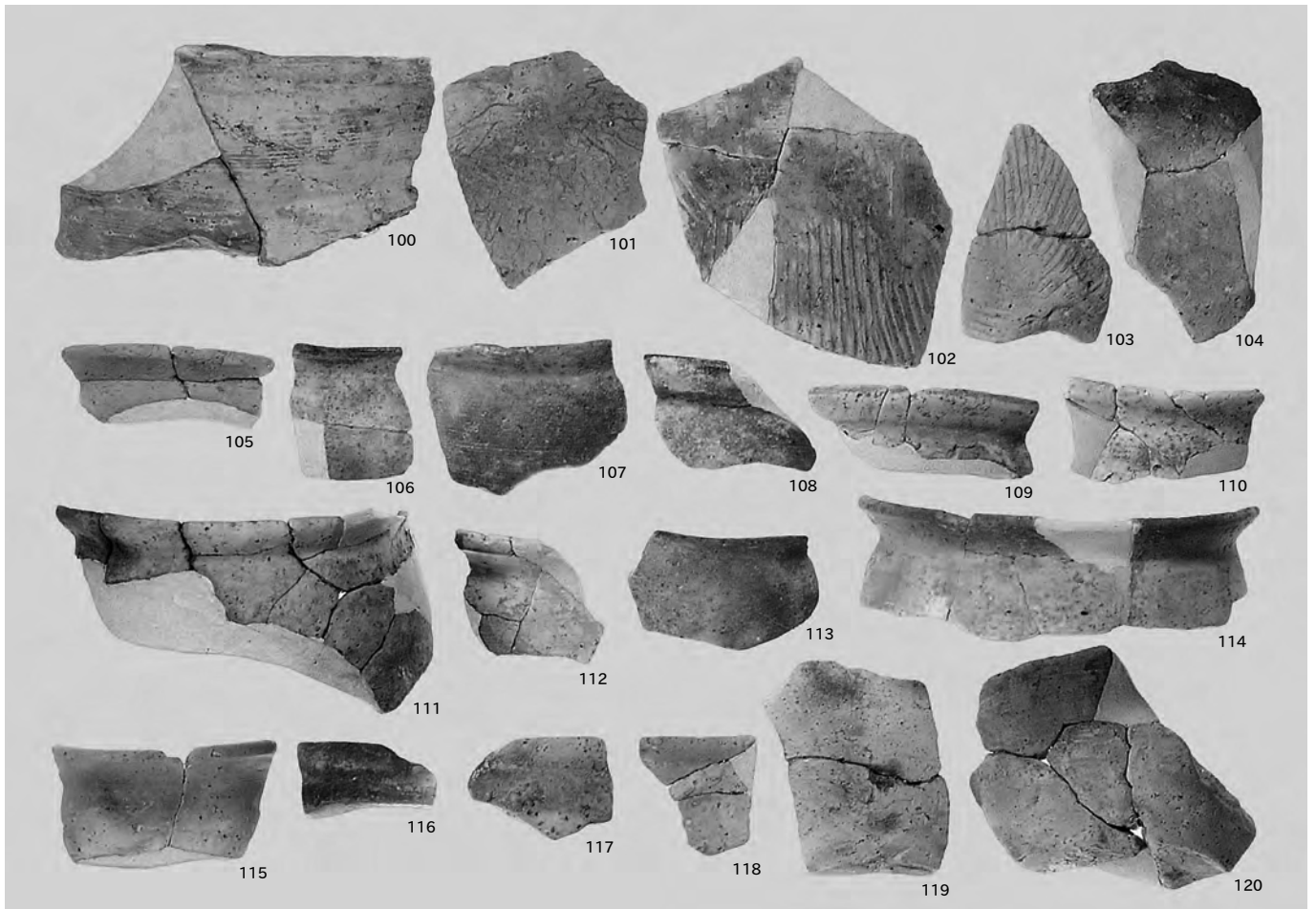
SX6(27~44).SX10(46~50)



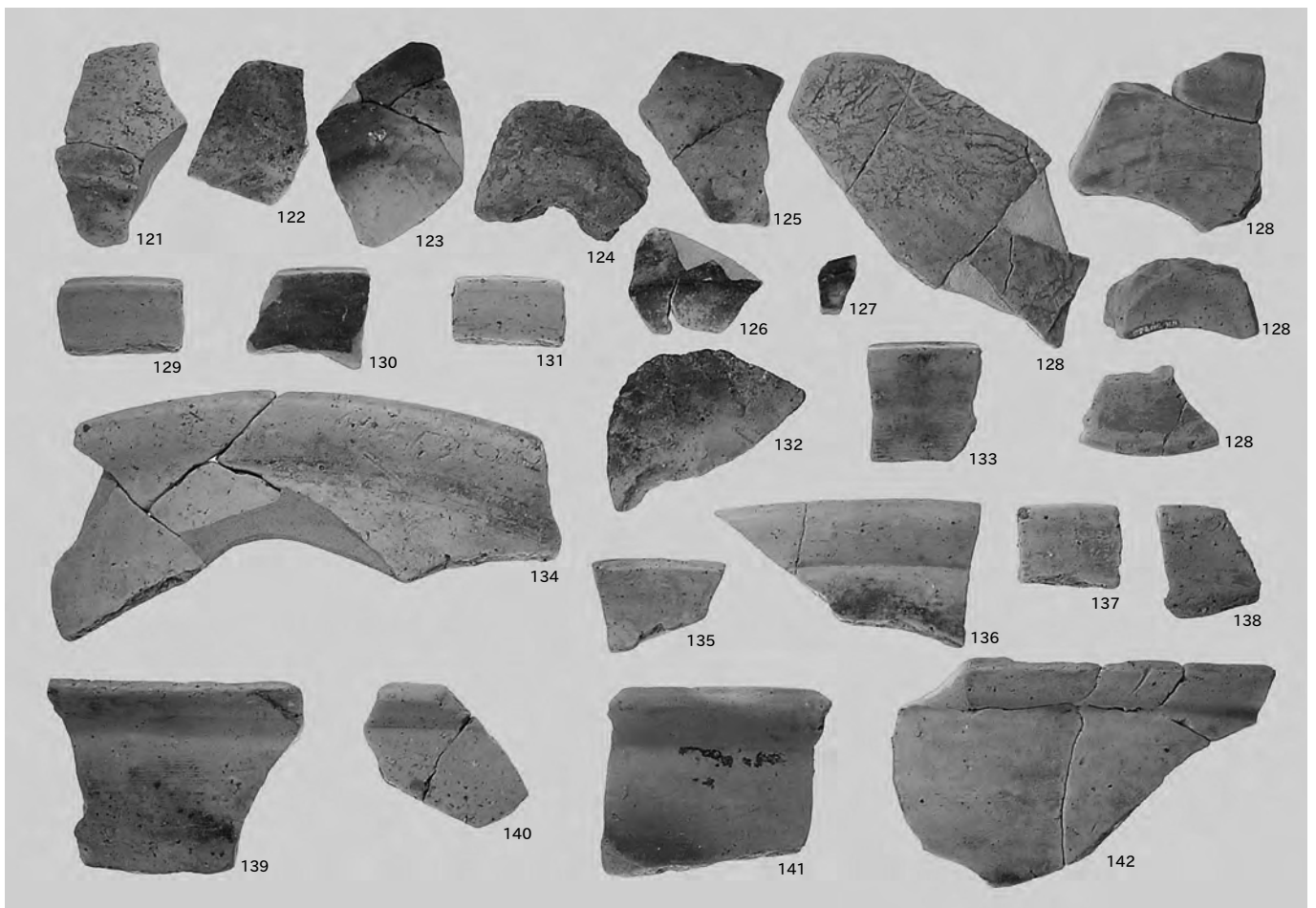
SX10(51~53).SX15(54·55).SD9(56).SD11(57).SD13(58~62).Pit2(63·64).包含層(65~81)



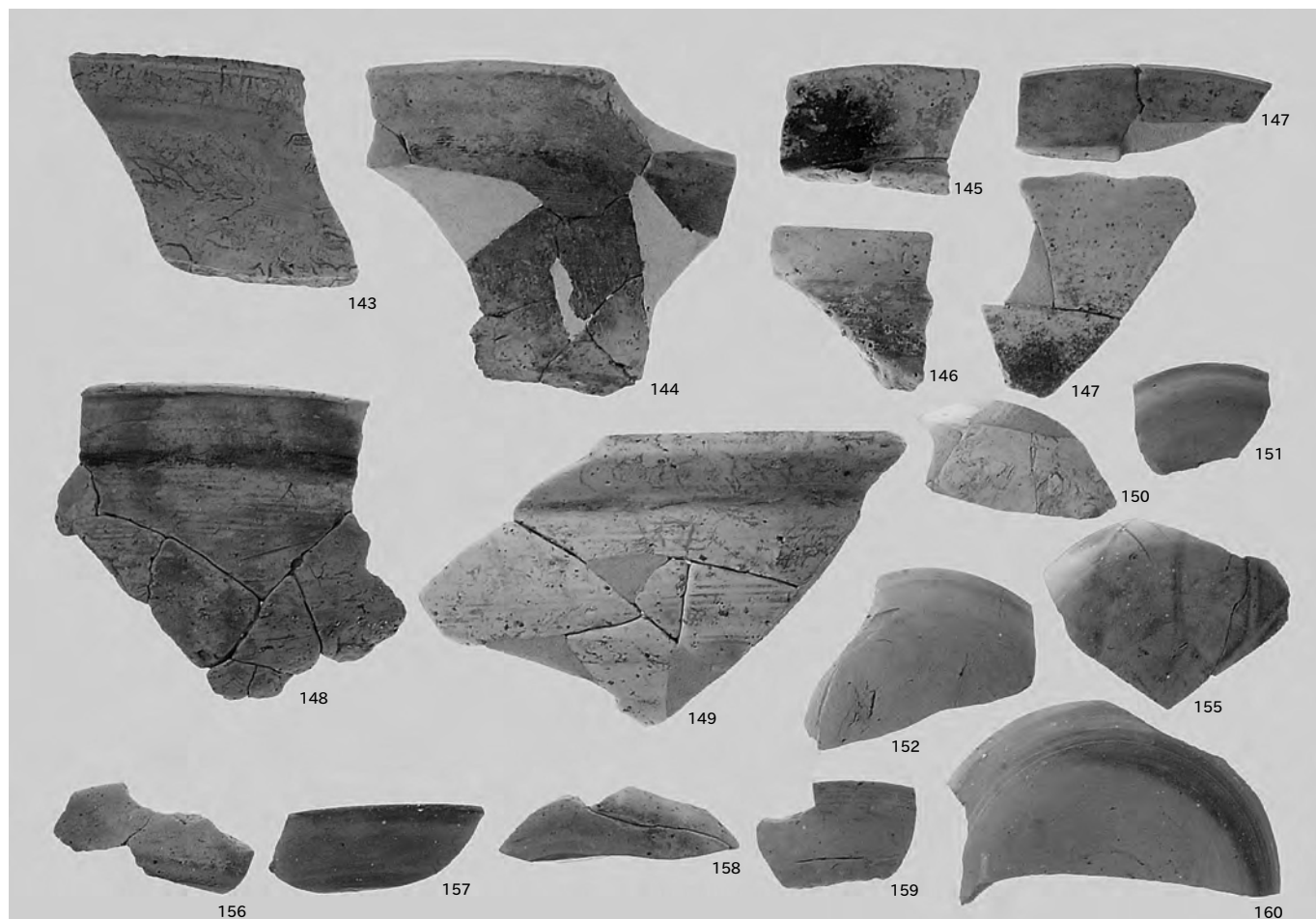
包含層(82~99)



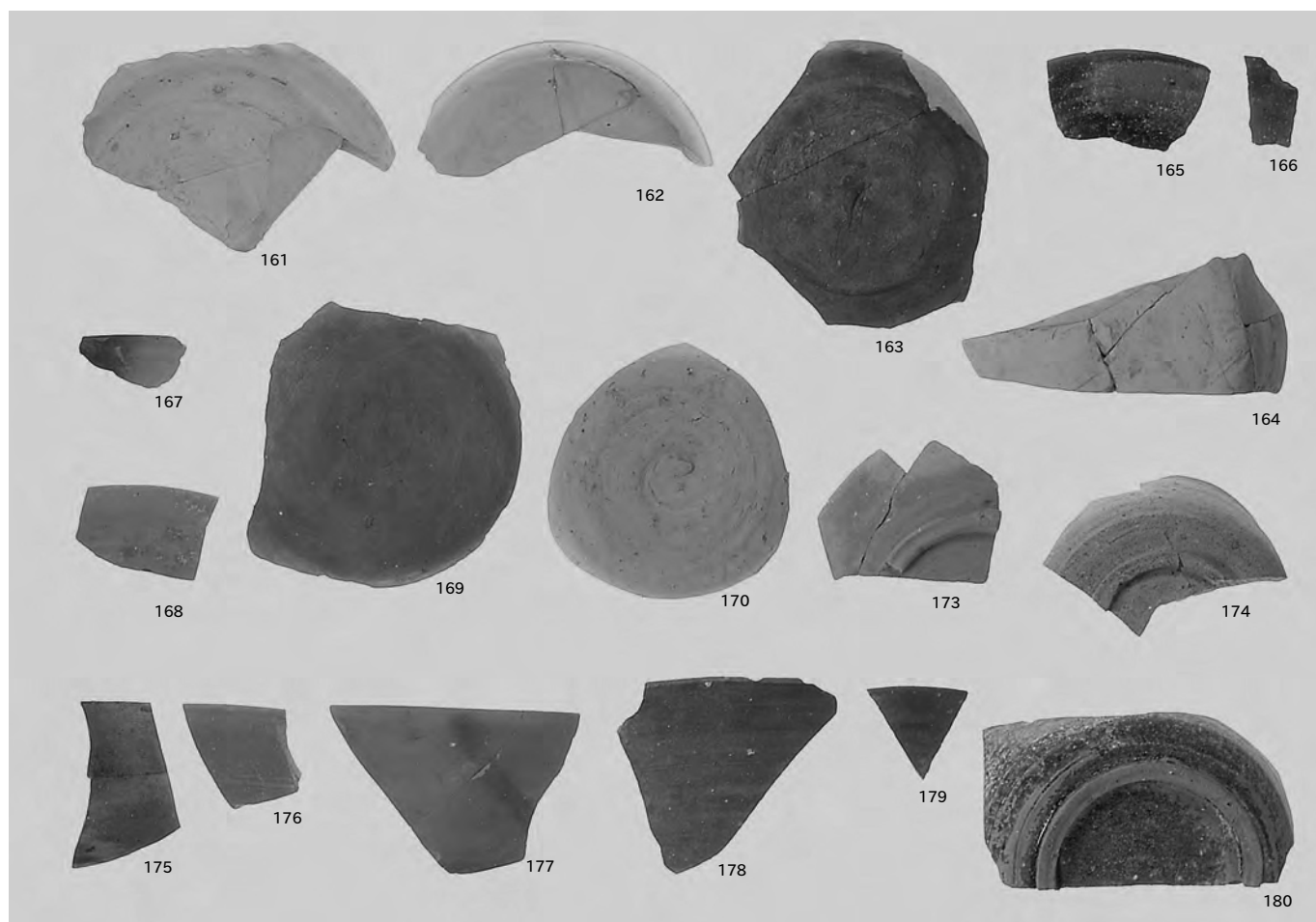
包含層(100~120)



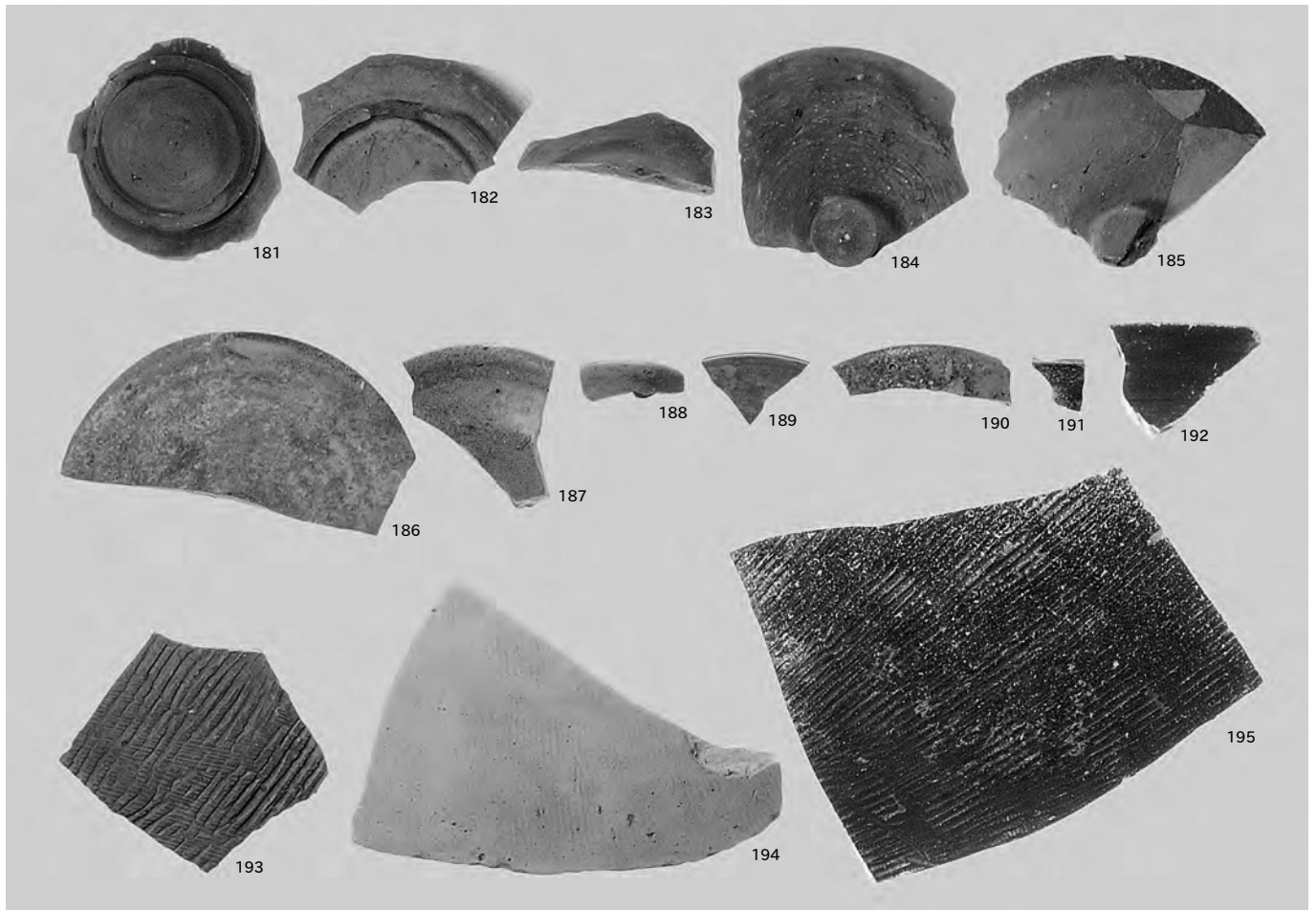
包含層(121~142)



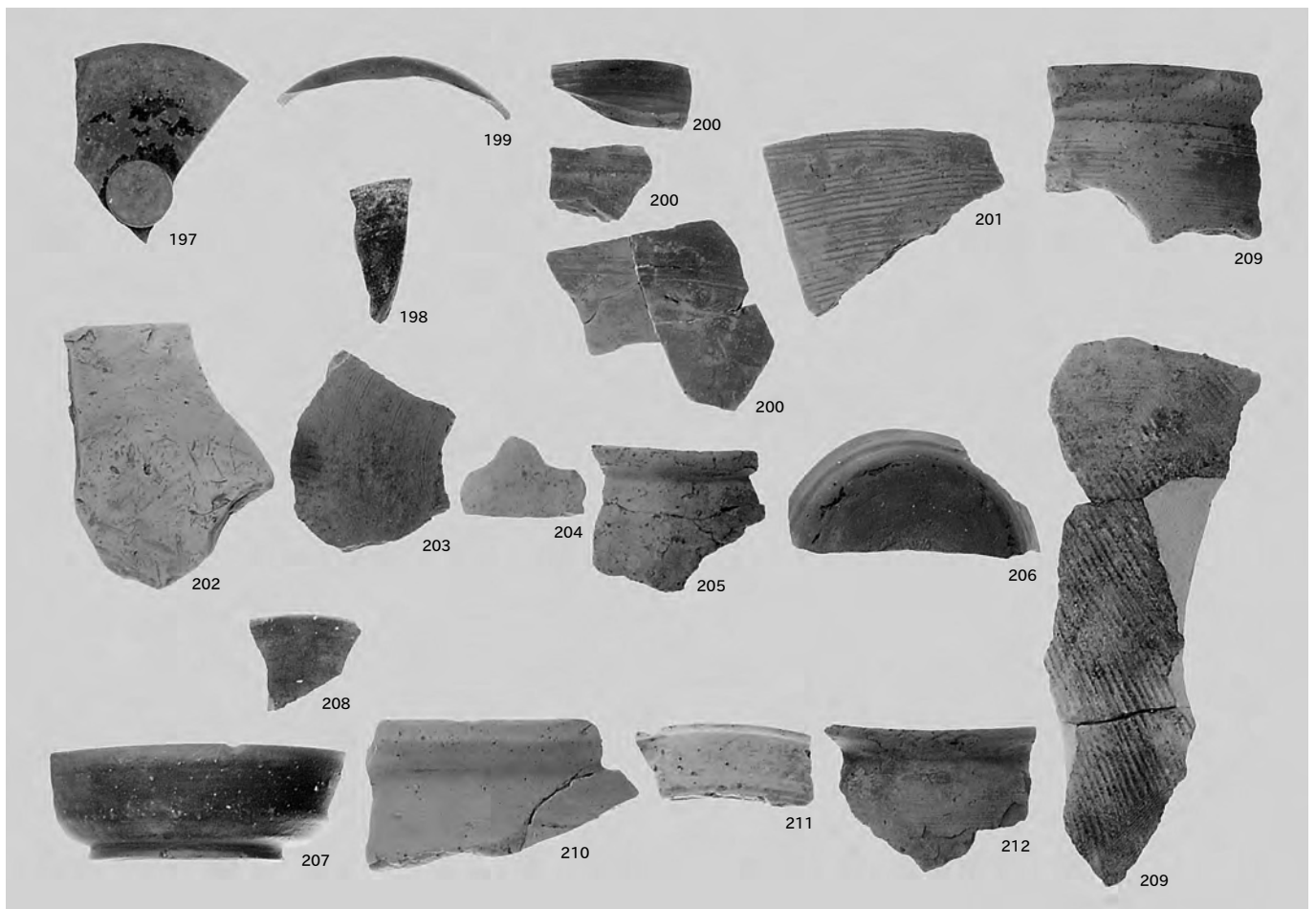
包含層(143~152・155~160)



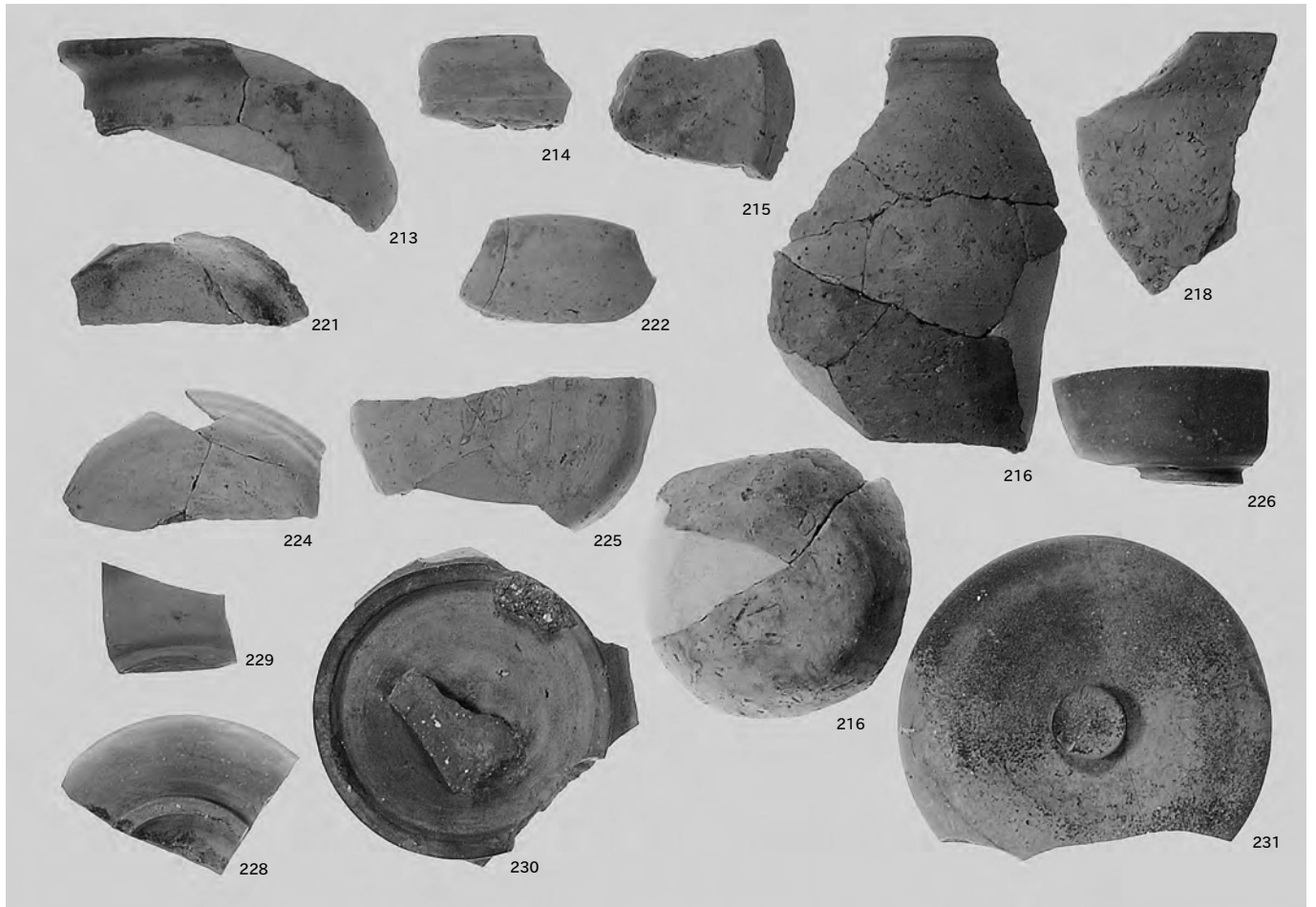
包含層(161~170・173~180)



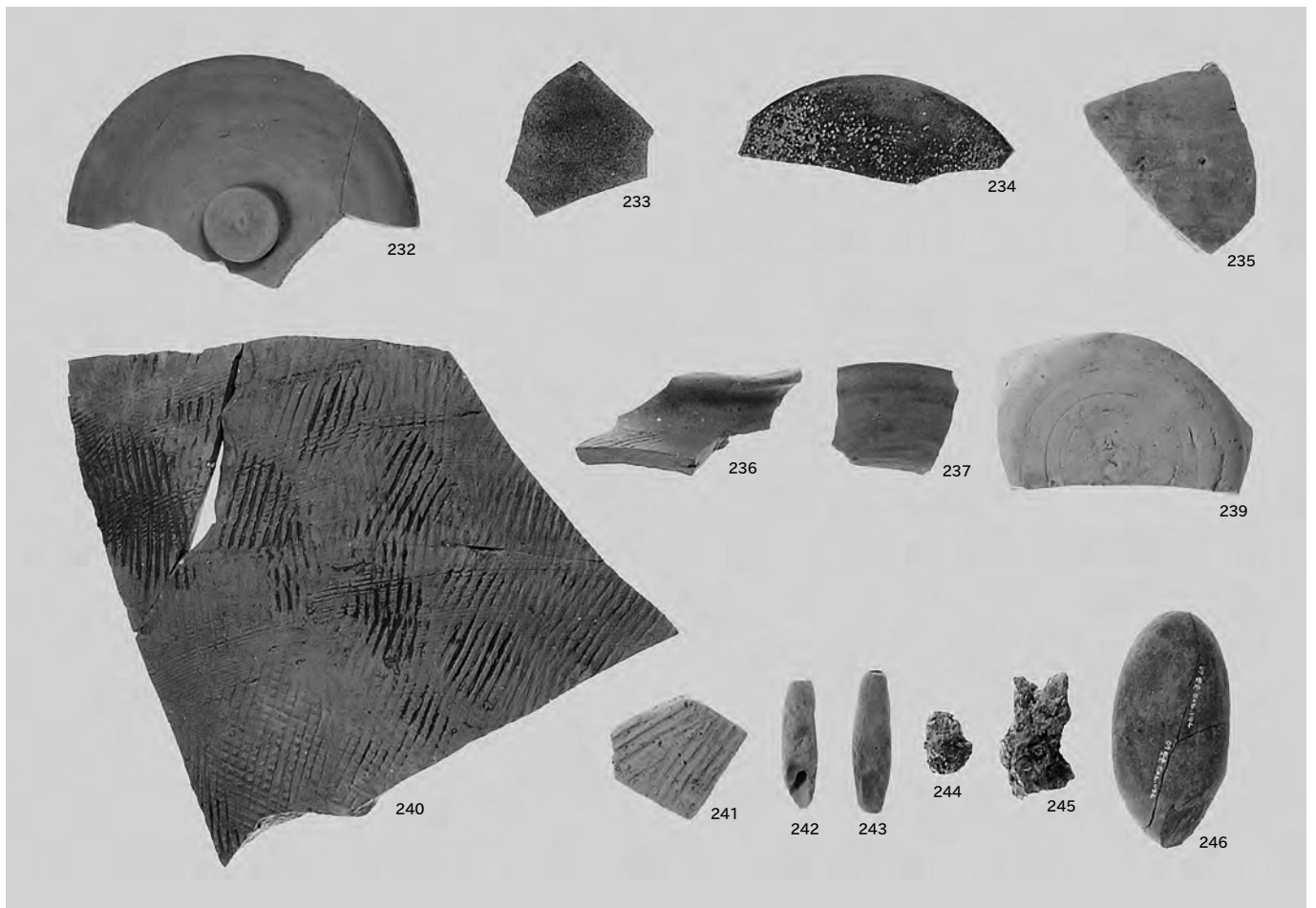
包含層(181~195)



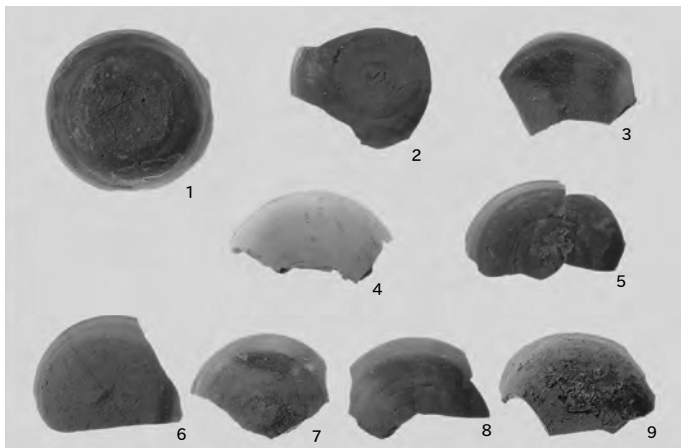
包含層(197~203).試掘調査5T(204).試掘調査7T(205~208).試掘調査8T(209~212)



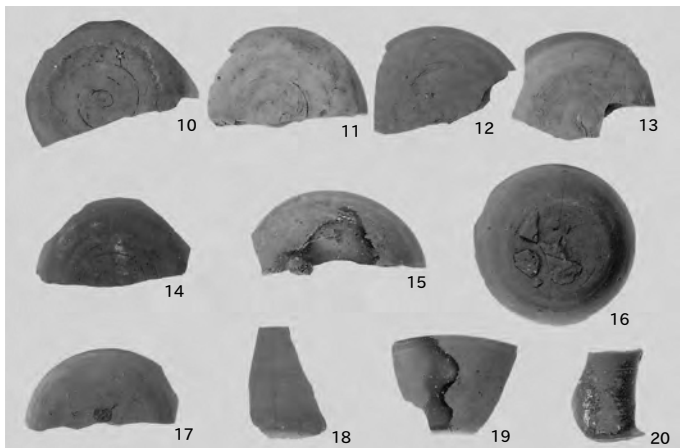
試掘調査8T(213~216・218・221・222・224~226・228~231)



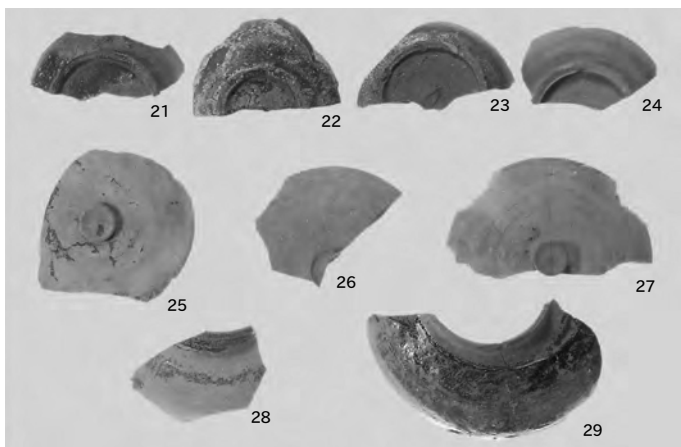
試掘調査8T(232~236).試掘調査10T(237・239・240).試掘調査11T(241).包含層(242・243).SX10(244).包含層(245).SX6(246)



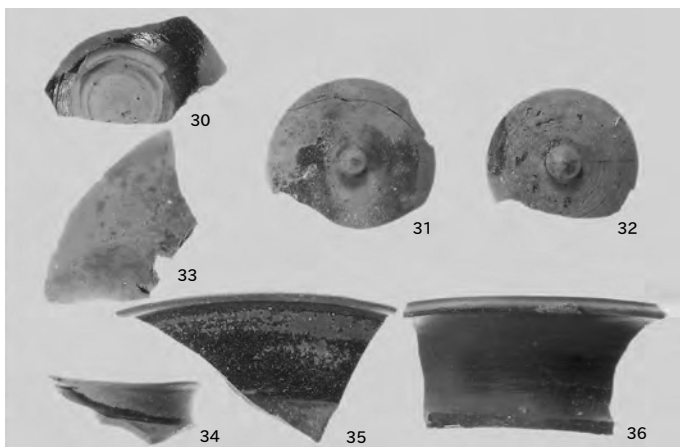
秋葉2丁目窯跡出土土器(1)



秋葉2丁目窯跡出土土器(2)



秋葉2丁目窯跡出土土器(3)



秋葉2丁目窯跡出土土器(4)



秋葉2丁目窯跡須恵器無台杯底部



秋葉2丁目窯跡須恵器無台杯底部



秋葉2丁目窯跡須恵器無台杯底部



秋葉2丁目窯跡須恵器有台杯体部

報告書抄録

ふりがな	かやめいせき だいにじちようさ							
書名	萱免遺跡 第2次調査							
副書名	一宅地造成に伴う萱免遺跡第2次発掘調査報告書一							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	立木宏明・八藤後智人・杉山真二・金原正子							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化センター							
所在地	〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地 TEL 025-255-2006							
発行年月	西暦 2009年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かやめいせき 萱免遺跡	新潟県新潟市秋 葉区山谷町1 丁目3552番 5ほか	15105	738	37° 47' 43"	139° 07' 09"	20080228 ~ 20080329	295.0	宅地造成に伴う本 発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
萱免遺跡	集落遺跡	古代(8世紀中葉 ~9世紀前半)		土坑・溝・性格不 明遺構・小土坑		須恵器・土師器・ 黒色土器・石製品・ 鍛冶関連遺物・土 製品		
要約	<p>萱免遺跡は新潟平野の南東に位置する新津丘陵に近い微高地上に位置し、現標高は5.3mである。西 方約0.6kmのところを阿賀野川の支流新津川(旧能代川)が北流する。本発掘調査の結果、古代(8 世紀中葉~9世紀前半)の遺構・遺物が検出された。検出遺構は土坑・性格不明遺構・溝・小土坑な どである。古代集落跡の一部であると考えられる。土器は土師器・須恵器などの食膳具・貯蔵具が大 量に出土し、従来の編年案に照らした位置付けを行った。須恵器の多くは近隣の新津丘陵の東側にあ る新津古窯跡群産である。焼成不良および焼歪みの不良品が多く出土し、それが利用されている。こ のことから、遺跡の住人が須恵器生産に係わっていた可能性も否定できない。自然科学分析の結果、 周辺での稲栽培の可能性が考えられている。この結果を含め、今回の調査では丘陵近隣に展開する「古 代のムラ」の一部の実態が明らかになった。</p>							

萱免遺跡 第2次調査

一宅地造成に伴う萱免遺跡第2次発掘調査報告書一

2009年 3月 26日印刷

2009年 3月 27日発行

編集 新潟市埋蔵文化財センター
新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地
〒950-3101 TEL 025 (255) 2006

発行 新潟市教育委員会
新潟県新潟市中央区学校町通一番町 602 番地 2
〒950-8550 TEL 025 (228) 1000

印刷 株式会社セビラス
東京都新宿区大久保 1-10-8
〒169-0072 TEL 03 (5285) 3430